
オタクヒーローと秘密のブログ

ゆいまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタクヒーローと秘密のブログ

【Nコード】

N5898H

【作者名】

ゆいまる

【あらすじ】

特撮ヒーローオタクの小木は、大学一の美女に告白されたものの、冷たい彼女の態度に不安を募らせる毎日だった。そんな時、彼女のブログを偶然見つけてしまい、謎のブロガーになりすまし、彼女の本音を聞きだすが……。特撮オタクはゲームオタク、アニメオタク、グラビアオタクの力を借り、果たしておっぱい、もとい彼女という栄光をつかめるか？

僕の仲間 1 (前書き)

作中『ブログ』を表現するために顔文字などを使用していますので、横文字表記をお勧めさせていただきます

大森が床に腰をおろしてマンガを読んでいた。その隣では中林が懸命にパソコン画面にへばりついている。

太陽の光は分厚いカーテンに遮られ、蛍光灯の明かりの下に浮かびあがる六畳の部屋はその数字よりも狭く感じられる。

壁という壁に漫画とマニアックな雑誌と、アニメやグラビアのポスター。床に散らばった雑誌にゲームソフトに食べかけの菓子袋。

フィギアが並んだショーケースだけ埃は見当たらないが、他は壊滅的なほど清潔のせの字も見当たらない部屋だ。

「電気つけるくらいなら、カーテン開けてくださいよ」

僕は奴らに小さくため息をつくときカーテンに手を伸ばした。

「いてっ」

その瞬間、後頭部に痛みが走り、足元に空き缶が落ちた。

「なんですか!」

頭を押さえて振り返ると、二人とも濁った水溜りの様な眼でこちらを見ていた。

「「なんですか」とはこっちの台詞だ。なあ、大森」

中林がこちらに視線をよこしたまま無表情に呟く。大森もマンガ本を開いたままのそりと頷いた。

「小木は、変わったな」

明らかに非難めいた声色に、僕は眉をよせる。

「カーテン開けようとしただけで、なんでそんな風に言われなきゃならないんですか」

「カーテンを開けようとした、だけ? 本当に、そう思っちゃってんの? とぼけんなよ。この裏切り者! なあ、大森」

「小木は、変わったな」

本当に、なんだよ二人とも。

僕はむくれてカーテンを半ば意地で引くと、太陽光にさらされた

二人の顔を正面から見据えた。

二人とも何日かぶりになる外界の眩さに、顔をしかめる。

パソコンデスクの前にいた中林は厚い前髪に覆われた顔をふせ、こちらを睨みつけた。よくみればこの三人の中……いや、この学校の中でも上位に食い込むほどのイケメンのくせに、滅多にこの部屋……日本文化研究部、俗称オタク部の部室から出ようとしない、対人恐怖症のゲームおたくだ。

チラリと画面を見ると、どうやら今もオンラインゲームを楽しんでいたらしい。

一方、昨日見た時から一步も動いた気配が見えないのはまだマンガ本を手放さない大森だ。

奴は中林と違って、大柄で熊の様な体格。異様な汗っかきで、冬でも大抵タンクトップだ。典型的なアニメ、マンガおたくで、やっぱりこの部屋からは滅多に出ない。

「変わったって、なにがですか。裏切ったって、僕が何かしましたか!？」

「泉さん」

ぼそつとした声だったので、最初は誰が発したのかわからなかった。

僕は二人の方を見る。二人は首をふり、顎で僕の後方をさした。

生温かな殺気が、ようやく痛みが引き始めた後頭部にじりじりと突き刺さる。

「サイズは上から88・56・87。誕生日は9月9日のおとめ座。好きな作家は角田光代。好きな食べ物は何となく和菓子。特に抹茶味。高校までイギリスに住んでいた帰国子女で、父親は外交官というお嬢様スポーツも万能で、趣味は乗馬。去年は我が大学のミスキャンパスに選ばれた、スーパー女子大生、泉美奈子さん」

「うわぁ」

本人でなくても鳥肌が立つこの情報量に、僕は思わずのけぞり声の方を見た。僕のすぐ後ろ、影のように立っていたのはグラビアお

たぐの部長、樹先輩だった。

樹先輩は眼鏡をずり上げると、骨に皮がくっついただけの様な顔をさらに突き出し、僕を睨んだ。

「なあ、小木。嘘だと言ってくれよ。本当に、お前。彼女と……」

そのまなざしはあまりに熱がこもり、っていうか、どすぐらい闇の奥から粘っこいなんかの呪いでもかけてきそうな迫力が込められていて、僕は思わず背筋を冷たくする。

こわごわ振り返っても、大森も中林も敵意をあらわに僕を睨むだけで、この場には誰一人として僕の味方はいないように思えた。

「本当の事を言いなさい。今すぐ言いなさい。ただちに言いなさい。さあ！ さあ！」

樹先輩の充血した涙目がすぐそこまで迫り、僕は耐えきれなくなつて顔を背けると、降参のつもりで両手を上げた。

「そうですよ！ 付き合ってます！ 泉美奈子さんは僕の彼女ですよ！」

「嘘だあ〜」

断末魔と共に骸骨……もとい、樹先輩は崩れ落ちる。そのまま本当に灰になってしまいそうなほど脱力しへたりこんでしまい、僕は少し心配になつて手を差し出しかけた。

その手の甲に、また何かが当たる。

今度は消しゴムだった。

「何で、小木なんだよ。だいたい、つりあわねえじゃんかよ。なあ、大森」

中林が投げたらしい。大森は三度「小木は、変わった」とだけ呟いた。

僕は両手をポケットに突っこむと、光射す窓辺に背を預ける。

そんなこと、誰に言われなくても、僕が一番わかってるんだ。

ちらり、フィギアのケースに映った自分の姿を見つめる。背が低くて地味な顔。特に不細工でも男前でもない、どこにでもありそうな、ごくごく平々凡々な外見だ。

中身が評価されたのか？　と言われたら、それもきつとNO。成績も、運動能力もすべて平均。高校のころはMr. アベレージとまで言われたくらい、僕には特徴がない。

人より抜きんでているのは……彼らと一緒に。オタク的知識だけだ。僕はファイブアケースの上に自分で張ったポスターを見上げた。歴代の平成仮面ライダーがずらり並ぶ熱いポスターだ。彼らを見ているだけで心が昂ってきて、こんな僕でも、強くなれるような気がしてくる。

正義の味方。仮面ライダーにレンジャーシリーズ。かれらが僕、小木正義の子ども頃からの夢。そう僕は、どこにでもいる平凡な特撮オタクなのだ。

そんな僕が、あんな高嶺の中の高嶺にある花の泉さんの彼氏になったんだなんて、僕自身、未だに信じられないんだ。

「なあ。もう、手とか繋いだのか？　キスとかしたのか？　もしかして、お前、もう、あの綺麗な足や、でっかいおっぱ……」

「それ以上言ったら、部長でも殴りますよ」

いつの間にかゾンビのごとく復活し、僕の足にすがりつく部長を一睨みすると、大きくため息をついた。

「皆に報告に来たのに、もう知ってたんですね」

「結構、有名だよ。っていうか、もう付き合って一カ月もなるんだろ？」

中林が応える。

「え？　家にも帰らない君が授業にでも出たの？」

「ば〜か。情報はみんなこの箱がくれるんだよ」

中林はそう言うと、自慢げに自分のパソコンを叩いた。そんな個人情報までインターネットに流されているのかと思うと、さっきの樹先輩とは違う気味悪さに僕は眉を寄せる。

「部活にもでてこね〜し、そうでなくても変だなんて事くらいわかるっつうの」

中林はそう言うと腕を組んで、長い足を投げ出した。

「じつとこちら見据えるその顔は、やっぱり何度見てもイケメンだ。
」で。この部、抜けるのか？」

僕の仲間 2

「え？」

僕は意外な質問に驚いて首を傾げた。

「どうして？」

「だって……」

中林は声を詰まらせると、目を反らした。

その仕草に、ふと、思い出す。

奴と視線を合わせるのに何か月もかかったことを。

同じ学年のこいつに始めに声をかけたのは僕の方だった。オタクはオタクを感知する。そして呼び寄せるものだ。入学式の日、隣にいた中林は一見イケメンのうかれた奴に見えたが、僕には同じ匂いがした。それで、声をかけたのだ。

彼が対人恐怖症なものもすぐにわかったが、面白い奴だって事もすぐにわかった。目を合わせるのに半年、打ち解け、こうやって会話できるようになるのには実に一年もかかったけど、それでも僕の目に狂いはなかったと思っっている。

「オタクと美女じゃ、まずいでしょ」

肩に手が置かれ、我に返る。僕はその手の主、樹先輩の顔を見た。僕は「どうして？」という言葉を読み込む。大森の低い鼻息が聞こえた。

そうだ、ここにいる皆は、ただ自分の好きな趣味を楽しんでいるだけ。なのに、世間ではゴキブリのような扱いをうける。オタク……秋葉系ってやつだ。

確かに、そんな奴と、あんな彼女とじゃ釣り合わないかもしれない。

みんなどこかで自分達に誇りを持ちながらも、かなりの部分を人への劣等感で支配されている。僕もそうだったし、今もそうじゃないとは言いい切れない。切なく複雑な乙女、じゃなくてオタク心だ。

でも……。

「僕は退部しませんよ」

僕は三人にきちんと聞こえる様に顔を上げた。

「する必要何か感じないですよ。僕は僕ですし、それに……」

この部屋を見回す。

どこからどう見ても、オタクの巣窟。

次いで、三人の顔を一人一人見る。

どこからどう見ても、秋葉系男子。

でも

「僕はこの部を愛してますから！」

「小木……！」

三人が破顔して、両手を広げて僕に向かって来た。

そうだ！ そうだよ！

確かに、泉さんはその……なんていうか、凄い。大切な人だ。だ

けど、ただ僕には彼女と同じくらい、友情も……。

そう、僕は皆が、仲間が大好きだ……！！

その時、僕の鞆から音楽が流れてきた。

これはデカレンジャーのジャスミンとウメコが歌っていた『g i

r l s i n t r o u b l e ! D E K A R A N G E R』の着メ

ロ。って事は、泉さんだ！

「はい！ 今、出ます！」

僕の心臓は一気にテンポを上げる。しゃがんで鞆に急いで手を突

っ込み、震える手で電話に出た。

『あ、あの美奈子です。今、大丈夫よね？』

ああ。泉さんの可愛い声！この電話の向こうで彼女が僕の事を想

って電話をかけてくれている。そう思うだけで、胸がいっぱいにな

りそうだ。

「あ、はい。大丈夫です。全然。っていうか、むしろ、美奈子さん

からならいつでもどこでも二十四時間大丈夫です！」

『ふふっ。なにそれ～。馬鹿みたい。あ、それでね正義君。今から

会えるよね』

天にも昇る気持ちだった。僕はすぐに返事をする、待ち合わせの場所を決めて、携帯を閉じた。

幸福感で頭がぼんやりし、今まで呼吸を忘れていたのか、思いつきり肺に溜まった二酸化炭素を吐き出す。

これからデートかあ。

彼女と、デート。彼女に、会える。

もしかしたら、今日こそは彼女と……。

「お・ぎ・く・ん」

僕の妄想が暴走を始めようとしたのを止めたのは、頭上の声だった。はつとして、恐る恐る視線を上げる。

そこには、無様な格好で抱き合ったままの中林、大森、樹先輩の姿。

「よけちゃってくれるからさあ」

中林の顔が引きつっている。

「野郎と抱き合っちゃったじゃないか」

樹先輩の顔が骸骨から死神に変化していく。

肌を刺すどころか貫通させてしまいそうな視線に、僕は鞆と携帯を胸の前で抱えたまま、後ずさる。

「用事が出来たんで」

一步、ドア……脱出口へと近づく。

一步、奴らがにじりよる。

僕がひきつる。

奴らが構える。

ここでカウントダウン。3・2・1……。

「失礼しま〜す！」

「小木〜！ 待てよ〜！」

中林の手が伸びた。僕はひらり、寸でのところでそれを交わすとスタコラサツサと部室のドアまでかけていく。

申し訳ないが、奴らに掴まり彼女とのデートがダメになるなんて

冗談じゃない。

「お前。この部を愛してるんじゃないのか!?」

「友情を裏切るのか〜」

僕は床に積まれた雑誌や漫画に足を取られないように器用に避けていくと、ドアのノブに手をかけ一気に引いた。外の空気が淀みきった部室に流れ込み、彼らは思わず足を止める。

僕は、急いで外に身を投じながら、彼らを少しだけ振り返り頭を下げた。

「すみません。やっぱり、女の方がいいみたいです〜」

「小木〜〜!」

中林のものか、樹先輩のものかわからない絶叫が聞こえた。そんなに叫ぶなら追いかけてくればいいんだけど、彼らがあの部屋から出ることなんかできないのを僕は知っている。

申し訳ないけど、僕は外を知ってしまった側だから。

「皆、ごめん」

僕は仲間を振り切るように廊下を走った。

罪悪感と優越感と混じった重苦しさはあつたけど、これから彼女と会えると思うとそんなものはすぐに吹きとんだ。

ただ、彼らの事が頭から追い出される前にふと、少しだけ考えた。僕が出て行ったあと、やっぱり大森は「小木は、変わった」と言うのだろうか。

僕の彼女 1

僕は彼女が待つ駅前のカフェに向かいながら、はやる気持ちを抑えようと必死になっていた。

大学を出て、駅前へと続く商店街の道を駆け抜ける。

町は桜の季節も終わり、新緑へと衣替え中。少し浮足立っていた空気も一段落、そろそろ通常の生活に戻ろうか……そんな感じだった。

新生たちは少しずつ新しい生活と身分に慣れはじめ、街全体もニューフェイスに馴染みつつある。

でも、僕はどうか？

信号待ちで足を止めた時、はたと思い、シヨウウインドーに映った自分の姿を見てみた。

Mr. アベレージが聞いて笑う背の低さ。実は160もない。髪だって一応気にはしているが、到底今風の長い髪は似合わないからただただ短いだけの芸のない形。服は上から下まで某量販店製品で揃えたものだ。彼女とのデートがわかっていたなら……とは思っても、今更遅い。今度からはどんな呼び出しにも対応できるように、自分の服装も考えないといけないのかもしれない。

「僕は、僕……か」

そこまで考えて、僕はさっき自分で豪語した言葉を反芻した。

あんなの、単なるかつこつけだ。

本当は、自分をありのままに勝負させることなんかできない。

部を辞めない気持ちは本当だけど、オタクって事もまだ彼女には隠してる。

彼女に恥をかかせないように、彼女と釣り合うように……違う。

僕は彼女に……

「捨てられないように」

声にしてみても、不安がさらに色濃くなった。

でも、それは実際、そうで……。
奇跡の告白を受けてから一か月。幸せなはずの僕は、毎日こつや
つてビクビクしていた。

駅前のカフェに駆けこむ。もつれた足のせいで、一瞬倒れかけ、
前のめりになるも、遠くで僕の顔を見つけて手を振ってくれている
彼女を見つけると、僕は根性で踏ん張った。

瞬間、ズキンと右ひざが痛む。

僕は顔をしかめそうになるのを、微妙な顔で止めて、なんとか体
裁を保とうと体を起こした。

「何？ まさか走ってきたとか？」

そんな僕に、彼女は人目も気にせず駆け寄ると、呆れた様子で顔
を覗き込んできた。

彼女の髪の毛の香りがする。ドキツとして、僕はどぎまぎしてしまっ
ても、彼女はそんな事お構いなしにさらに顔を寄せると

「正義くん？」

甘い声で僕の名を呼んだ。僕は今度は何とか笑ってみせる。

「大丈夫。座りましょう。それより、今日はどうしたんですか？」
うん。膝の方はもう大丈夫だ。たまに訪れるあの発作の様な痛み
はすっかり引いた。

確認してから歩き出す。

彼女もようやくやく安心して、あの輝くような笑みを綻ばせた。

「そう、用があつたから呼んだんだけど」

「はあ」

ちょっとその言い方はきついんじゃない？ って少し、ほんの少
しは引つかかるけど、彼女に悪気があるわけじゃないのはわかるか
ら僕はいつものように黙って頷いた。

「もうすぐね、父親の誕生日なの。その事で、相談があつて」

「相談、ですか」

僕はなかなか目を合わせる事が出来なくて、彼女の綺麗な指の爪

を見ながら彼女がとつてくれていた窓際の席に着いた。

彼女に頼りにされた。その事が何よりうれしくて、ちよつと口元が緩んでしまう。

「失礼しますお客様。ご注文は」

「あ、ああ、そうね。彼は……」

店員が来たようだ。少しだけ視線を上げてみた。

彼女が僕の代わりに僕の飲み物を注文している。珈琲が苦手な僕がいつもオレンジジュースを頼むから、いつの間にか僕が言わなくても彼女が注文してくれるようになったのだ。

僕の好みや、行動を意外に把握してくれている。気のきく人だ。

頬の辺りに焦げ付くような感覚を感じて、僕は周囲に目をやった。知らない人が何人かこちらを見ていたらしく、顔を上げた瞬間に皆示し合わせたように僕らから目をそらした。

ああ、目立つよね。こんな組み合わせじゃ。

この一か月、どこに行ってもこんな感じだから、もう慣れたけどさ。

僕は僕の飲み物の他に、軽い軽食の様なものを彼女が頼み終わるのを待ちながら、窓に映った自分と……今度は彼女を見比べる。

モデルか女優の様な彼女に、背の低い地味男。しかも中身は特撮オタクの僕。

一か月経つても、自分自身まだまだ釣り合わないのは身にしみて感じる。ちよつと少し前に離婚した女優と芸人の夫婦の十倍くらいの格差だ。

さつき僕らを見ていたのもほとんどが男で、きっと彼女の傍にいて、彼女に親しくされるのが僕って言う、世の中の理不尽さに目を疑っていたのだろう。

わかる。わかるさ。君たちの気持ち。

でも、これが現実なんだ。悪いね。

「あ、で、相談なんだけど」

彼女の大きな瞳が再びこちらに向けられた。

何をしても、どんな仕草もとろけてしまいそうなほど完璧な彼女。なにより、彼女は似ているのだ。僕の憧れのあの、女性。

愛と勇気の戦士ラブレイドのヒロイン。天音きらりに！

だから僕はきつと彼女には逆らえない。どんな願いも彼女に頼まれれば聞いてしまうだろう。

それこそ、たとえ火の中水の中だ。

「それは、お父さんの誕生日プレゼントか何かを選びたいんですか？」

気の利く彼女の事だ、僕に頼むといったらきつとこんなところだろうと見当をぶつけてみた。しかし、彼女はやっぱり首を横に振ると。

「違うわ。プレゼントはもう用意したの。そうじゃなくて、父が一度私の彼氏を見たいって言うから、ちょうどいい機会だし、父の誕生日会に来てくれないかなって」

僕の思考は停止した。

「え？ 何？ 泉さんの……？」

「そう。父に会って欲しいの」

え~~~~~!!!

確かに、彼女の事は好きだ。大好きだ。

天音きらりにそっくりな彼女はまさに理想の女性だ。

でも、そんな彼女の頼みでも、いくらなんでも……。

「約束ね」

彼女はそう言うと、澄ました顔で手元の紅茶を口に運んだ。

僕の彼女 2

ここで改めて僕の彼女についての整理をしてみたいと思う。

どうしてそんな事を突発的にやるのかと言えば、やはり僕がまだ混乱しているからだろう。

一呼吸置いてから、さっきまで昨日友人と見に行っただという映画の話をしていた彼女が手にしていたカップに目を落とす。

ちなみに、彼女は今、誰かからの着信に外へ出てしまっている。

僕の彼女。

名前は泉美奈子。二十歳。高校までイギリスにいた、とか体のサイズはさっきの五木先輩情報参照として……顔は、そう、十五年前の特撮ヒーロー番組、愛と勇気の戦士ラブレイドのヒロイン、天音きらりにそっくり。って、こっちもさっきの僕の感想と重なるな。

とにかく、ちょっと広めの額が理知的で、大きな瞳がちょっとつっている。でも、唇がぼつり甘く（まだ残念ながら味わった事はないけど、絶対甘いはずだ）面長の輪郭に微妙なアンバランスさがあるのがかえって魅力なんだ。

細く長い首にはホクロが一つ目立つ場所にあって、何とも色っぽい。

身長は、普通の女の子よりはあるかな。165で、実は僕より高かったりする。体重なんかは知るわけないけど、彼女が太っていないの是一目瞭然だ。

すらりと長い手足に凹凸のあるライン。グラビアモデルとしても全然いけそうだけど、彼女自身が普段からカジュアルな服しか着ないせいかな、どちらかと言えば女性ファッション誌のモデルな感じだ。

あ、外見はつかじゃ、僕がまるで彼女の外見だけに惹かれているみたいだな。

違う。

うん、違う。

僕が彼女の事を好きになったのは、実は去年。入学の直後だ。

あれは、まだ右も左もわからず、教科書を買いに迷いに迷って学内の購買部に辿りついた時だった。

さんざん足を棒にして歩き回った僕の目の前につきつけられた現実、厳しいものだった。

教科書を買いに来た人の山。まるで戦場の様なそれはそれは厳しい生存競争の渦中と化した購買だったのだ。

しかし、ひるむわけにもいかなかった。翌日からの講義にはちゃんと出たかつたし、それに、昔、ラブレイドも言っていたから。

『限界を自分で決めるな。限界を決めていいのは限界の先まで頑張った時だけだ』って。

だから僕は深呼吸をひとつすると、覚悟を決めてその中へと突撃した。

背も低く、しかもどうも押し弱い僕。

それでも人混みをかき分け、足を踏まれ、肘で小突かれ、睨まれ、舌打ちされ、それでも一歩ずつ前進しようやく教科書の前に辿りついた。幸いにも最後の一冊。最後の希望。っていうか、むしろ僕を待っていてくれた栄光の欠片。そう、感動して手に取った時だった。その栄光を狙う、もう一人の男が現れたのだ。

僕はしっかと教科書を抱えた。

ラブレイドの「男は本当に大切なものは、命を賭けてでも守るのだ」って言葉が胸に。

数分後

僕の手には教科書はなかった。

あるのは、うなだれて購買部の前で呆然とする情けない僕の影だけだ。

現れた男は、ラグビー部の海部だった。当然、反則なくらいマッ

チヨで、しかも

初対面のくせに鬼のように威圧的だった。

海部はやたら濃いあの顔を突き出し「どうも。俺も探してたんだ。ラスイチでGETなんてラッキー」って当たり前のように僕の手から教科書をぶんどって行ったのだ。

僕はというと……何もできなかった。命をかけるどころか声の一つもかけられず、手ぶらで出てきてしまったのだ。

いつもそうなんだ。いくらヒーローに憧れても、僕はヒーローになれやしない。なれないから、憧れる。ヒーローになれた気分になるのは、テレビを見ている、あの瞬間だけ。

思わず、自嘲の笑みをこぼしかけた、その時、僕の視界を何かが悪く遮った。

驚いて顔を上げた。

そこにいたのが、彼女だったんだ。

彼女は紙束を突き出していた。

「教科書。買えなかったんでしょ。これ、コピー。3日後にはまた入るみたいだから」

正直、反応が出来なかった。

どうして、ここに天音きらりがいるんだ？

どうして、僕が教科書を買えなかったの知ってるんだ？

どうして、助けてくれようとしてるんだ？

未だにその謎は解けていない。

でも、確かなのは、この瞬間に僕は恋に落ちたって事だ。

実はそれからの展開も期待しなかった。でも、学部が違う彼女とはなかなか会う機会もなく、見かけても声をかける勇気もなく、時間だけが過ぎた。

そうこうしているうちに、眉目秀麗の才女、スポーツ万能でしかも帰国子女。その上それを鼻にかけもせず、気さくで友人も多いパーフェクトガールの彼女は、学祭のミスキャンパスに選ばれ、学園

の有名人に。そして、僕はオタク部の虫けらに。
おおよそ接点何か、同じ人類っていうのと、同じ学校に通うって
言うのくらいしかなかった。

片想いは慣れていた。過去に彼女はいたことはいたけど、どれも
自然消滅。そんな僕に、あの女神の様な彼女が振り向くはずがない。
遠くから彼女の姿を見かける事が出来れば、それで幸せ。そんな風
に思ったまま進級した二年の初日だった。

いつものように教室の隅で授業の片づけをしていた時だ。

彼女がいきなり僕の前に現れた。

また、いきなりだ。

そして今度は、教科書のコピーではなく、こう切り出したのだ。

「好きです。恋人になってください」

今、思い出しても夢のようだ。

教室にはまだ沢山の生徒がいて、みな、凍りついたように動きを
止め、僕らの方を見ていた。

でも、一番凍りついていたのはこの僕だと思う。

何かの悪戯なら、酷過ぎるとも思ったけど、彼女の瞳は本当に真
剣で。

後にも先にも、彼女があんなに泣きそうになっているのを、僕は
見た事がない。

そして、僕らは付き合うようになった。

カフェのドアベルが鳴り、視線を向けると彼女が小走りに駆けて
くる所だった。

「皇月が明日合コンに来ないか、ってしつこくて」

「え。合コン、ですか!？」

僕は思わず声にしまった。そんな僕を不甲斐なく思ったのか、
彼女は困ったような顔をして首を横に振ると。

「行くわけないでしょ。くだらないもの」

といつものように一刀両断した。

「それに、私を誘うなんて、失礼でしょ」

「あ、ああ。そうですね。泉さん、そういうキャラじゃ」

「そうじゃない」

彼女が僕の言葉を遮って否定した。

滅多に感情をあらわにはしないから、僕はちよつと驚いて目を丸めてしまう。

そう、彼女は僕と一緒にいる時、確かに笑いもするし、不快も表現はする。でも、だからと言って声を荒げることもなければ、大笑いしたり顔を真っ赤にして怒る事もなかった。

微笑んだり、眉を寄せる。その程度だ。

だから、驚いた。

そんな僕の様子に、彼女が気まずそうに目を伏せる。

「あ、その。わからないならいい。もう、出ましょ」

「はあ」

彼女は迷いのない動きで席を立ってしまった。

僕は慌てて彼女を追いかける。

僕より背の高く、そして少し心細そうな彼女の後姿を。

僕の恋敵 1

なんとなく、さっきの一件から、彼女と気まずい空気になってしまった。

カフェから一步外に出ると、もう夕暮れ時で、空がぼんやりと茜色に染まっている。等間隔に立っている街灯の灯りが春霞に浮かんでいた。

僕は、まだ怒っているのか早足の彼女の顔を、そつとのぞきこんだ。

彼女はまっすぐ前を見据え、唇を結んでいる。頬が少し赤く見えるのは、この夕焼けのせいなのか、まだ怒っているせいなのかかわからなかった。

こういう時『彼氏』ならどうするべきなのかな？

手を引いて「待てよ、何怒ってんだよ」なんて諫めるのだろうか。彼女の綺麗な手を見る。

実は……まだ一度も繋いだことのない、手だ。

『僕たち、本当に付き合ってるんですか？』

喉までせり上がってきた不安を、噛みつぶす。ここで僕が足を止めたら、きつと、彼女は振り向きもせず、このまま先へ先へと一人で行ってしまうのだろう。そんな気がしたから。

僕は情けない気持ちで、ただ彼女の後ろを小走りで着いて行っている。

そう、いつもこんな感じなんだ。

僕は彼氏と言っても、樹先輩がさっき言ったような事どころか、指一本触らせてもらえていない。

手を繋ぐとすれば振り払われる。肩を抱こうとすれば肘で腹を殴られる。一度、勇気を振り絞ってキスしようとしたけど……思

いつきり横つ面を殴られ、冷やかな目で「軽い女だと思わないで」と言われ、僕が土下座する羽目に。

泉さんは歩みを止めない。どこに向かっているのかも話してくれない。

左右に振れる彼女の髪が背中ではなっている。

僕はその後姿に叫びたくなる。

『僕は、本当に君の彼氏なんだよね!?!』

つて。

その時だった。彼女の背中が急に傾いた。

小さい悲鳴が聞こえ、僕はとっさに一步踏み出す。

また、膝が悲鳴を上げる。それでも僕はその悲鳴すら飲みこみ、精一杯手を差し出した。

初めて、僕の手が、彼女にまともに触れた。

僕は彼女がこけてしまう前に抱きとめたのだ。

彼女の顔は見えなかったが、息をのむのが聞こえた。

「大丈夫ですか?」

怪我なんかしなかっただろうか?

心配に、彼女を抱えたまま彼女を覗き込もうとした時だった。

「やめて!」

「!?!」

彼女が思いつきり僕を突き飛ばしたのだ。

逆に僕はそれで後ろに吹っ飛ばされ、尻もちをついてしまう。

「え……」

反応できなかった。どうして?

「あ、あの」

彼女も自分がとりみだした事に動揺しているのか、口をぐもらせるとスカートを直しながら立ち上がった。

「私、平気だから」

「はあ」

彼女は髪を直しながら、そっぽを向く。

僕はそれを呆然と見上げることしかできない。

夜の風が僕らの間に入り込んできた。徐々にお互い冷静になっていくにつれ、彼女の表情はいつもの澄まし顔に。僕の方は情けなさ
と混乱を隠そうとあやふやな顔に……。

「そ、そ、そうですね。僕がいちいち手を出す事もなかったですよね……」

僕は僕に言い聞かせるように呟くと、立ち上がるうとした。その前に手が差し込まれる。

え？ 泉さん？ 期待して顔を上げると、そこにあっただのは

「そうだよ。ようやくわかったか。この間抜け」

海部のごつくて濃ゆくて、自信に脂ぎった、もとい漲った厭味な顔だった。

海部は強引に僕の手を取ると引き上げた。

ラグビー部の海部は、片腕が僕の足くらいの太さで、簡単に片手で僕を持ち上げることができた。

「あ、ありが」

「つたく、美奈子も冗談が過ぎるよなあ」

僕が地に足をつける、そのタイミング。奴はいきなり手を離す。

体は再び支えを失い、僕のお尻は再び地上とキスをし悲鳴を上げた。

「なあ、もう、いい加減素直になれよ、美奈子」

「なにが？」

海部はそんな僕を一瞥もせず彼女の方へ振り返ると、馴れ馴れしい粘着力抜群の声色で彼女にすり寄った。

涙目の向こうに映る彼女は、腕を組んで、彼女よりはるかに大きな奴に物おじもせず氷河期を思わせる眼差しを奴に向けている。

「わかつてるんだぜ？ お前が別にこいつと好きで付き合ってるんじゃないってことくらい」

「え？」

僕の顔が思わず跳ねあがった。

海部は彼女の名を舌の上でなめまわすような厭らしさで口にし、彼女の肩を抱いていた。彼女はそれに抵抗もせず、ただじっとしている。

……僕の手はすぐに振り払うのに、だ。

「俺への当てつけだろ？ 俺が英文の子とちょっと仲良くなっちゃったからさ」。ジェラシーってやつ？ 可愛いところあるじゃん」
「そうなの？」

僕は初耳情報に動揺して、不恰好にまだ道端に座り込んだまま絵になる二人を見上げる。

そう、海部は確かに厭味で気色の悪い奴だけど、なかなか女子にはもてるんだ。

親父が輸入ブランドを扱う店の社長とかで、ブランド品持ち放題、ばらまき放題。僕らもてない男子は、それで女子をつっているんだとか、それにえられる女子もちょっとアレだとか、ひがみまがいな事を受け惜しみでよく嘯いてはいるが……それにしたって、やっぱり女の子は僕なんかみたいになちびっこよりは、マッチョな奴の方が好きなのかもしれない。

「馬鹿じゃない？」

その時、頭上に振ったのは彼女の極寒の雪の結晶だった。

僕は知らず落ちていた視線を上げて、彼女の顔を見る。

彼女は自分の肩を抱いていた奴の手の甲を思いつきりつねると、奴が手を離れたすきに障られていた部分を丁寧に払った。

「うぬぼれもいい加減にしなさい。彼はね、あんたなんかより……」
チラリ、僕の方を見た。

目が合う。

僕は息をのむ。

また、あの疑問が僕の喉にせり上がる。

『僕は、君の……』

しかし、彼女はその先を口にはしなかった。溜息のようなものをつつくと、僕ら二人に背を向ける。

「今日はもう、帰ります。さようなら」

そして、一人で、行ってしまった。

さっきの想像とおんなじ映像だ。

僕が足を止めても、彼女は一人で行ってしまふ。

振り向きもせず。

そしてすっかり日の落ちた街に、間抜けな僕と、気色の悪い海部だけが取り残されたのだった。

僕の恋敵 2

『未来なんて誰にも予測なんかできない。だから、世界は希望に満ちている』

ホントウに、そう思う。ただし、前半部分は。

僕はラブレイドの言葉を思い出しながら、数分前の自分には予測不可能だった未来にいる自分を恨めしく思った。

「え？ お前、酒も飲めぬの？ ださっ。じゃ、お前はウーロンでいいよな」

僕は何故か僕の隣で大張りきりで注文をする海部に、気もそぞろに頷いた。たぶん、奴は僕が頷いたかどうか見てないだろうけど。

僕は今、何故か海部と、何故か肩を並べ、何故か飲めもしないのに居酒屋にいる。

まだ宵の口と言うのに繁盛しているこの居酒屋は、家の大学生達ご用達だ。埋まっている席のほぼ七割が学生で、残りの三割はストリートに家路につけないサラリーマン達の宿木になっている。

「じゃ、ま、乾杯でもしようぜ」

「はあ」

「でも、何に乾杯かって話だよな。うん。やっぱここは美奈子にでいいか。じゃ、かんぱい」

奴の大ジョッキと僕のウーロン茶のグラスがまるで協調しない音を立てる。

奴は手元の枝豆を一口放り込むと「もうちょっと塩がいるな」なんてまた独り言を言って、備え付けの塩を思いっきり振りかけた。

僕はあんまり塩辛いのは好きじゃない。

「でもさ。美奈子も素直じゃねえよな。お前みたいなの、わざわざあて馬にするなんてさ」

「あて、うま……ですか」

さっきの話の事だ。僕は奴の顔をじつと伺う。奴は押し付けがましい同情の色を浮かべ、大仰に頷いた。

「そう。あ・て・う・ま。だって、考えても見るよ。お前みたいなオタクと、彼女がっいたらうわけないだろう。そこにいる映画部の奴ならともかくさ」

海部が横眼で後ろを指したのでその方向へ目を向けると、なるほど、そこにはイケメンで有名な映画部の人がいた。確か僕らよりは2つほど上だ。

僕は、海部でも負けを認める人間がいるのかと小さく笑った。別に馬鹿にしたわけじゃなく、なんとなく親近感を覚えたのだ。

しかし、海部はそうは感じなかつたらしく、僕の背中を自分の分厚い肩で小突くと

「何がおかしいんだよ。俺が優しいからって、調子に乗るなよ。このオタクが」

とすごんだ声で睨んだ。ここで言い返す事も出来ればカッコいいんだけど……僕は「すみません」と犬の寝言の様な声を床に零して今一瞬で震えてしまった手を握りしめることしかできなかった。

でも、いくらこんな弱気を隠しても、こつという輩は目ざといもので、僕がビビったのを確認すると、満足げにジョッキを傾け飲みほす。

「ま、いいや。俺達、親友だからな」

「は？ 親友？」

僕は突拍子もない言葉に、思わず声を裏返してしまった。奴はそんな僕の驚きを楽しむように目を細めると、二つに割れた顎を上下に振った。

「だって、同じ女に惚れてんだからな。でもさ、俺は、お前にちょっと悪いと思ってるわけよ。俺の為にわざわざピエロになってくれたんだからな。で、優しい俺は、こつやって、お前をねぎらってるの」

なんだか無茶苦茶な理由付けだ。わかるようでさっぱりわからない。ただ、僕は確認しなくちゃならない事があった。

仮にも、泉さんの現彼氏としては、だ。

僕は二杯目を早くも注文する奴の後頭部をじっと睨みつけた。

怖い。正直言って、怖い。

あの、丸太の様な腕で吹っ飛ばされたら僕の肋骨何か、ポツキ―を束ねたもののように簡単に粉々になるだろうし、あの、やたらに発達した筋肉がボコボコ付いた足で蹴られたら、数か月は立ち上がることなんかできないだろう。

それでも、訊かないといけない事があった。

『怖いものに向かっていく。それが本当に勇気がある事じゃないかな？』

ウルトラマンの言葉を思い出す。

そうだ、最初は誰もヒーロじゃないんだ！

今すぐできる事を、頑張るしかないんだ！

僕は息をのむと、振り返る海部の頬にありつただけの勇気をぶつけてみた。

「あの、聞きたいんですけど。本当に、泉さんは、そんなつもりなんでしょうか？ 海部君の事が好きだって証拠はどこにもないじゃないですか。海部君の思いこみなんじゃないですか？」

「なんだと？ 俺の、思い込みだって？」

完全に振り返った海部の顔が、僕の言葉でみるみる色を変えていく。それはさながら、人間に化けていた怪人がその正体を晒す時の様な威圧感で、僕は思わず上半身をのけぞらした。

「なにか？ お前は、じゃあ、本気で自分が彼女に選ばれたとでも思ってるのか？」

「あの。それは……」

駄目だ。負けるな。

僕は何も間違っちゃいないじゃないか。

ごくごく自然に生まれた疑問をぶつけた。それだけじゃないか。もし、これが本当に奴の思い込みなら、泉さんは迷惑だろうし、逆に奴の言ってることが真実なら、僕は僕の進退を考えなければならぬ。

でも、奴はそんな僕の事情何かお構いなしに身を乗り出してくると、鼻先が当たるほどの距離で、思いつき睨みつけてきた。よく漫画やドラマで不良がガンを飛ばすって、あれだ。

テレビの中のヒーローなら、ラブレイドなら、こんな脅しにも毅然として冷静に対処できる。彼らを見ている時の僕も、自分はそうできるような気になる。

でも、実際はどうだ。

自分でも自分が嫌になるくらい、完全に縮みあがって、一言も発する事が出来ない。それどころかじわじわ込み上げてくる涙すら、どうしようもなく、僕はかみ合わなくなりそうな歯をぐつと奥で噛みしめていた。

「お前……」

唸り声の様な海部の声。奴の僕の顔ほどの大きさの拳が掲げられた。

殴られる！

本能が瞬時にして察知し、目を閉じ身構えた時だった。

「あははははは！面白い奴だな〜」

火山の大爆発の様な海部の馬鹿笑いが聞こえ、僕の額があのでかい拳で軽く小突かれた。

僕は何が何だか意味が分からず呆然として、腹を抱える海部を見つめた。

「いや〜。お前からそんな妄想発言が飛び出すなんて、思わなかったよ。今の、ギャグ？それとも天然？いや〜どっちにしても、ウケるわ！ あ、どうも」

海部はちょうど彼の二杯目と串盛りを持ってきた店員に、声をか

けると盆から直接ジョッキを手にして、グイッと一口喉に流し込んだ。

重い音がして、そのジョッキが目の前のカウンターに叩きつけられる。二杯目だって言うのに、もう中身は半分だ。

「あの。海部……くん？」

「本当に、お前って奴は！」

海部はまだ笑いが収まらないらしく、自分の肩をゆすりながら僕の肩を抱くと、嬉しくてたまらないといった風に口を開けた。吐き出す息が酒臭い。

「いい事教えてやるよ。実は、俺と美奈子はフィアンセなんだ」

「え？」

僕はまたまた初めて耳にする情報に、驚いて奴を凝視する。奴は楽しくてしょうがないといった風に眉を寄せながらくつくつと笑うと

「俺んち、輸入業してて、美奈子んちは外交官だろ？ 親同士にちよつとした面識があつてよ、俺達力ギの頃からの知り合いなんだ。

彼女がイギリスにいる間もさ、日本に来る度会ったりなんかしちゃつてさ……そしたら、どうだ、帰国したと思つたら、俺と同じ大学に通うつて言うじゃないかよ」

「え？ それ、本当なんですか？」

「マジもマジ。親公認の仲つてやつ？」

後頭部をライダーキックで直撃されたような衝撃だった。

だって、彼女はそんな話、僕には一度もしていない。奴の自信満々な顔を見ると、嘘をついているようにも思えないし。

僕は何も言い返せず、奴の顔をじつとみた。

奴はまたまた、あの、厭味な同情の眼差しをこちらに張りつかせ頷くと、とどめに僕にこういったのだった。

「それに、美奈子は日本のオタク、嫌いだしね」

『未来なんて誰にも予測なんかできない。だから、世界は希望に満ちている』

やっぱりこの台詞。前半部分にしか賛成できないな。
僕はまた涙目になりながら、そう思った。

僕の発見 1

「それで、尻尾巻いてここに逃げて来たってわけ。飲めない酒も飲んで」

「うるさい！」

僕はパソコン画面を見たまま、こちらに一瞥もしない中林に八つ当たりすると、本日、もう何本目になるかわからないビールの缶を開けた。

泡の吹き出る音がして、不快な臭いが鼻につく。さっきの海部のあの顔を思い出し、さらに嫌な気分になった。

僕はあの後、海部の自慢話に延々付き合わされた拳句に、ほとんど飲み食いもしていないのに「ここは頼むよ親友」なんていって、奢らされたのだ。

とはいえ、この胸のやるせなさは奴の横暴な振る舞いなんかが原因じゃない。原因は……。

「僕は、彼女の彼氏じゃなかったのか」

零れ落ちた言葉に、涙と鼻水まで一緒についてきた。

僕はついでに肩も落とし、手の中のやけくそで買ったビールをぼんやりと見つめる。

まるで力が入らなかった。

確かに、僕と彼女じゃ釣り合わない。付き合ってると言っても、キスどころか手も繋がせてもらえない。

そうさ、どっかで薄々は感じてたんだ。

彼女が僕の事を好きじゃないんじゃないかって事は。

でも……ラブレイドも言ってた「信じ抜くことは困難だ。しかし、だからこそ価値がある」って。

僕は、信じたかったんだ。

そうさ。僕はあの奇跡の告白の時の彼女の涙をこらえたあの瞳。

あの輝きを信じてみたかったんだ。

なのに……。

「大森は？」

泣き声が出てきそうなのを、僕は他の話題で誤魔化した。

この部室に来れば、皆がいて、一緒に飲んでウサを晴らしてくれると思ってくれたから来たって言うのに、部室にいたのは中林一人だけだった。

今は電灯もつけない薄暗い部屋に灯るのは、中林のパソコンの青白い光だけで、その頼りない明りが、冴えない特撮おたくと、仮想空間に囚われたゲームおたくを照らし出している。

「コミケの準備だって。入稿が何とかって、慌てて出て行った」

「樹先輩は？」

「なんとかかっていうグラビアアイドルの握手会が明日東京であるから、夜行で向かうって」

「皆、忙しいんだな」

「お前だってちょっと前までは忙しかったじゃん」

中林の責めるような声に、僕は顔を上げた。いつの間に手を止めたのか、中林はキーボードから手を下ろし、背もたれを抱えるような恰好でこちらをじっと見ていた。

「いちいち女に振り回されんなよ」

「中林は、好きな子いないの？」

「ゲームキャラならいるけどな」

これぞオタクの模範回答だ。僕は少しほっとして口元を緩めた。

それをみた中林が長い腕を伸ばして僕の買って来たビールに手を伸ばし、はにかむ。

「お前だって、リアルの女より、なんとかって特撮のヒロイン。ほら、なんだっけ、アマイノキライ……？」

「天音きらり」

「そう、そっちの方がいいって言ってたじゃん」

「だね」

僕は苦笑すると、プルトップを上げた中林と軽く乾杯をした。

「それにしてもさ」

中林はビールを一口飲むと、椅子を降りて床に散らばった雑誌を足で蹴散らし、僕の前に胡坐をかいて座った。

読み物を足でどうこうするのはどうかと思っただが、なんだか、そんな事も今はどうでもいいような気がして、僕は指摘するのをやめる。

「たとえアイツらが幼馴染だとしてもさ、フィアンセって証拠はないだろ？」

「そうだけど」

でも、数ある大学の中で、海部が受ける大学を選んだのなら、やはり気がないわけじゃないんじゃないか。

海部に肩を抱かれていた彼女の姿を思いだし、僕の声は力を無くす。そんな僕の態度に苛立ちを覚えたのか、中林はやや前のめりになって声を荒げた。

「そんなんで、いいのかよ。フィアンセだろうが、なんだろうが。お前、とりあえず一か月は彼氏やってたんだろ？　つまり、その、エッチぐらい……」

男なら誰しも興味あるその行為を指す言葉を、言い淀み、表現を選んだ末に、女子が使うような言葉を選択した中林が何だか可笑しくて僕の口は少し緩んだが、すぐに主旨がそんな所はないと思いなおすと、なんだか今度は気分が暗くなった。

だよな。

普通、一か月もしたら、一回ぐらいしてたって普通だよな。

しかもさ、向こうの方から告白してきたんだ。まあ、せめてそういう深い事はしなくても、キスぐらいはするだろ。

でも、でも……僕は。

「え？　してないのか？」

僕の沈黙に、中林の声が突き刺さった。

僕は頂垂れる様に頷く。

「じゃ、手前くらいまでは」

首を横に振る。

「まさか、キスも？」

もう一度僕の首が落ち込んだ。

形のない不安が、劣等感が、情けなさが、他人に指摘される事で形を持ち、重みを増していく。

目をつぶって口を固く結んでも、心の底の方からじゅくじゅくと染み出してくる痛痒く、ひりひりした何かを止める事が出来ない。

それでも、僕は懸命にあの日の彼女の瞳を思い出そうとした。

信じ抜くこと……僕は彼女の事が好きだから。あの日の彼女の瞳を……。

僅かに残る理性をかき集め、アルコールに後押しされた感情の津波を押し込めないと。

僕はそう思い、奥歯を噛みしめ、耐えようとした。

でも、できなかった。

中林が「マジかよ」と呟く声が、最後のダメ押しだった。

僕は気がつくとも中林に掴みかかっていた。

「ああ、マジも、マジ。大マジ！ 嘘みたいな本当の話だよ！」

自分でも頭が真っ白になっていた。奴の手から缶が転がり落ち、辺りにビールが飛び散る。床に置いたままの雑誌や同人誌がアルコールに台無しになっていく。

中林の顔が驚きに蒼褪め、目が見開かれている。

皆、皆、視界には入っていた。入っていたけど、もう、そんな事もどうでもいい気がした。

「してないよ。してない。してないどころか……ああ、なんか僕、すっごい惨めだ。惨めで、情けなくて、悔しくて、哀しくて、やり切れないよ。彼女に告白されて幸せだったのなんか、最初の一週間ぐらいだ。触れるどころかたいして笑いもしてくれない。用がないと電話もメールもない。こんなんじゃないや、もっと早くに皆に報告にもきてたさ。でも、僕自身、彼女の彼氏って実感も自信も持てないんだ。確証が持てたらって思っても何も起こりやしない。

だから一か月たっても言い出せなかったんじゃないか」

「小木……」

「彼氏って肩書がどんどん重くなってきて、僕は今、不安とプレッシャーと焦りに心がリンチされているような状態なんだ。」

別に、体だけが目的なわけじゃないけど、何にもないのもおかしいじゃないか。せめて、もっと心を開いてくれてもいいじゃないか。違うか？ いつつ、遠慮がちに作ったような表情ばかりだ。でもさ……それでも、信じていたかったよ。彼女を信じたかったんだよ！ けど、それも限界だ。何にもない上に、他の男がフィアンセだと名乗り出て、僕の事をあて馬だというだけ？ 僕にはもう、自信がないよ。自分が彼女の彼氏だって事にも、彼女を信じ切るって事にもね。もう……もう……」

僕はそのまま崩れる様に膝をつき、何度も中林の胸を叩いていた。もはや、自分が何を言ったのかもよくわからない。

ただただ、ただただ、涙が流れ出た。

中林はしばらくそんな僕の拳をじっと黙って受け止めてくれた。だが、僕の拳が止まると、長い溜息をついて僕の背中を優しく二度叩いた。

「辛かったな」

その言葉に僕は、また、泣いた。

僕の発見 2

落ち着いてから、僕は自分で床の掃除をした。中林も手伝うと言ってくれたけど、それは断った。さすがに悪いと思っただし、こうすることで冷静さをもう少し取り戻したかったのもある。

中林は濡れた自分の服を脱ぎ、自宅に帰らない事が多いためここに常備している着替えを取り出していた。

「あのさ」

中林が背を向けたまま声をかけてきた。

「ん？」

僕はまだ酸欠でぼんやりする頭を上げる。

「とりあえずさ。難しく考えること、ないんじゃない？ ほら……よくわかんねえけどさ、海部とやらだって、お前の事、親友って言ってるくらいだし」

きつと冗談で笑わせるつもりで言ったんだ。下手なジョークに僕は苦笑し

「でも、ラブレイドはさ、最後、親友に裏切られて死ぬんだよ」

とオタクらしい言葉で返した。中林が新しいシャツの袖を通すと眉をひそめ振り返る。

「なんだよ、それ。じゃ、お前の好きなヒーローは、最後、親友に殺されて終わりなのか？」

「うん。ま、殺されてっていうのは少し違うけど」

ラブレイドの最終回。

ずっと一緒に闘って来た相棒であり親友だった男は、実はヒロインのきらりの事が好きで、彼女を手に入れたがために悪の組織と手を組んでしまっていた。

彼に陥れられ窮地に立たされるラブレイド。でも、親友もまた、悪の組織に利用されており、彼の命も危ない事を窮地にいたラブレイドは知り、その親友ときらりを助けるために、命を投げ出して戦

い、死闘の末、悪の組織のボスをやつつけるのだ。

そして、最期、世界の平和ときらり、そして親友のために戦い抜いたラブレイドは、燃え尽き安らかに眠りにつく。

もう、何百回も見た映像が、脳裏に色濃く蘇る。

僕はそのラブレイドの最後の顔を思い浮かべてから、肩をすくめ「でも、ちよつと似てるかもね」

死んでも、海部何かの為に命は投げ出さないけどね。と、つけ足した。中林は苦笑する。

「あはは。なんかさ、俺、食うもんでも買ってくるわ」

財布を手に取り軽い調子で言う。

「え？ 中林が外に出るの？」

「俺だつてたまには出るよ。でなきゃ腹減るし、腹減ったらゲームもできねーだろ」

僕は、僕を元気づける為に外に出ようとしてくれている中林の気持ちに、素直に嬉しくなった。

「じゃ、なんか頼むよ」

「おう」

短い言葉だけ交わして、中林はドアに手をかける。しかし、「あとと眩きノブを回しかけた手を止めた。

「そつだ」

「なに？」

「暇なら、パソコン、使つててもいいぜ。ネットゲでもしたら気分転換なるし」

ゲームで気分転換？ 中林らしい発想に僕は笑みをこぼすと「うん。ありがと」とだけ答えた。中林は僕の顔をみてちよつと安心してたように目を細める。

「じゃ、いつてくるわ」

今度は本当にドアノブをまわし、出て行ってしまった。

独りきりの部室。

この部室で一人になることなんて今までなかったから、妙な寂し

さを感じる。

見回しても、もう読んだ事のある雑誌や漫画ばかりだ。

そこで目についたのはパソコン。いつもは中林が占拠して、このキーボードに触れた最後の記憶さえ曖昧だ。

「暇だしな」

じっとしていたら、また彼女や奴のことを考えてしまいそうだった。

だったら、何かしている方がまし。

僕はそう思い、腰を上げるとパソコンの前に座った。

自宅でネット世界をさまよう事は時々あるけど、そんなに詳しいわけでもなかった。

どちらかと言えば、調べ物をしたり、オークションを楽しんだりの実質的な事でしか使わず、暇つぶしはもっぱら特撮のDVD鑑賞や、特撮専用の雑誌などだったからだ。

一応、部のものとはいっても、たぶん、ネット自体は学校の通信を使っているはずだ。なら、履歴も残るだろうし、まさかヤバイサイトは見られない。

そこまで考えて、検索サイトになにげにクリックしていた自分の手を止める。

ヤバイサイトって……僕はそんなに欲求不満なんだろうか。ちょっと情けなくなって、思わずため息が唇の隙間から洩れ出た。

いや、そういうものを目にしないわけでもないけど、わざわざ友人のパソコンで見たいほどじゃないだろ。普通。

椅子の背もたれに体重を預け、僕は自分に失望してまだアルコールに霞む目で天井を見上げた。

彼女の気持ち genuinely 分からない。

じゃ、自分の気持ちはどうだ？

好き……は好きだ。そこに迷いも疑いもない。

じゃ、彼女とそういう関係になりたいか？

当たり前。好きならそうしたいに決まってる。

うん。ここまででは正常だぞ。

僕は自分の気持ち、まるで修理した機械の動作確認をするように一つ一つ確かめていく。

じゃ、万が一、できなきゃ、彼女の事は好きじゃなくなるのか？
それも、否、だ。

なら、このまま出来なくてもいい？

このまま。彼氏って肩書だけで、指の一本も触れさせてもらえず付き合っただけ？

そこで僕の思考は停止する。

壊れた僕の頭の故障箇所は、どうやらここにあるようだ。

何にもしない、恋人……。

友達と何が違うんだ？ それ。

「あ~~~~~！ わからん！」

僕は声を上げると、勢いをつけて背もたれから離れ、パソコン画面に顔をつきつけた。

そもそも、僕は特撮オタクなんだ。女性の気持ちなんかわかるわけがない。

ふと、頭の端に、今日、中林が言っていた事を思い出す。たしか、この箱の中にはどんな情報も入っている。そんな内容の言葉だ。

「なら、教えてもらおうじゃないか」

僕は半ばやけになって、パソコン画面をホームに戻す。某超有名サイトのホームが出てきた。

その上部に検索のキーワードを打ち込む欄が設置されている。僕はそこにポインターを合わせ、クリックした。

とはいえ、どんなキーワードを打ち込めば、彼女の気持ちがわかるのだろうか？

女心……と検索に入れて、果たして出てくるのだろうか？

うん、どちらかと言えば、そんなの入れたらそれこそヤバイサイトが検索されそうだと。

いきな壁にぶち当たった。

僕は唸って腕を組む。

たとえば、この箱の中に女心を的確に説明する情報が入っているとしても、その取り出し方が分からなければ意味がない。どうしたものか。

検索ワードを入れる欄の下には、広告をはじめ、今日のニュースがずらりと並んでいる。どれをとっても、たぶん、世間的には大きな出来事で、僕にとってはどうでもいい出来事だ。

ここに「泉美奈子の心境」って項目でもあれば、それでなくてもせめて「女子大生の本音」なるものがあれば、迷わずクリックするのに。

「やっぱ、無理か……」

呟き、パソコン画面を閉じようとした時だった。

目の端に何かが映った。

それはまさに、向こうが僕を呼んだ、そんな感じで、それまで気にもしなかったバナーが急に目を引く。

それは、無料ブログのバナーだった。

その巨大サイトが運営する、誰でも簡単に始める事が出来るというブログサイトだ。

僕はそれまで、正直、人の日記を読むようでブログはあんまり好きじゃなかった。たまにファンのスーツアクター（ヒーローのスーツをきて戦う俳優さん）や出演俳優などのブログを覗く事はあるけど、一般人のは一度も見た事がないし、もちろん僕自身やったこともなかった。

でも、だからこそ、こういう時はいいんじゃないだろうか。

女子大生のブログをいくつか見てみて、女の子の心情を勉強するんだ。コメント出来そうなら、こちらから質問してみた方がいい。

僕はなんだか、とっても素晴らしい案を思いついたような気になり、何も迷わず、そのサイトのバナーをクリックした。

彼女のブログ 1 (前書き)

ブログの記事を表現する上で、顔文字を使用しております。できれば横書きで読んでいただけたら幸いです。

彼女のブログ 1

ブログって、どういう感覚でやってるのだろうか？

趣味を披露する場としては、結構理解できる。

自分の作ったフィギアやら、まあ……カタギでいくと、料理や旅行写真と言ったところだろうか。

悩みや何かの感想って言うのも、わかる気はする。

顔が見えない相手だからこそ、相談できる事って結構あるだろうし（これって信頼できる人間がリアルなかなか作れない、哀しい世相の反映だろうけど）、映画や漫画のレビューなら企業やお金の絡んだ専門家のレビューより信頼できるような気もする。

でも、日記は……どうなんだろう???

日記は人に公開するものなのだろうか？

わからない……わからないけど、今の僕にはその日記ブログの存在が必要ないように思われた。

ブログのサイトを開けると、たくさんのカテゴリが現れた。

想像していたのより多く、一瞬、どのカテゴリに行けばいいのか迷う。

しかし、その迷いはすぐに払しょくされた。

『恋愛』

まさにズバリそのものな、カテゴリがあつたからだ。

これで、いくつか読んでみて、彼女の年齢に近い人のを読ませてもらえば、少しでも女子の心情とやらが掴めるかもしれない。

クリックする。

ずらりとたぶん、記事のタイトル、が表示される。

そこには様々な文字や絵文字が飛び交っていた。

ちよっとエッチなものを想像させるものから、悲痛さを感じさせ

るものまで様々だ。

ドキドキしてきた。いいのかな？　なんて罪悪感に近いものがうつすらと頭をかすめる。

だって、恋愛と言え、人のプライベートな面でも、さらにデリケートな個所じゃないか。それを、こっそり覗くような事をしていいのだろうか。

アルコールが徐々に回って来て、喉の渴きを感じた。

あんなに大量の水分はどこに行ったのか？　不思議に思いながら、ソフトドリンクがこの部屋に存在しない事に気がつき、舌打ちをし、再びビールの缶を開ける。

開けたついでに、躊躇していた指を動かした。

まず一つ目は『彼氏と……』なんていう、ちよつと意味深な記事だ。

でも、内容的にはその日彼とデートしたって言う内容が、幼稚な文章で羅列されているだけだった。それも、どうやら高校生らしい。僕は読み続けるのをすぐに辞め、次に移った。

そんな感じで、いくつか読んでみる。

タイトル通りの内容の記事もあれば、これはあからさまに『釣り』（興味をひくタイトルで人を釣るが、内容はたいしたことない。もしくは関係ない）だらうつてもものにも当たった。

まるで、訪問販売員のような気分だ。

がっかりしたり、ちよつと気になってみたり。

ただ、訪問販売と違うのは、読み手にはほとんどデメリットがない点で、10記事読んだ頃にはこのブログの手軽さに気を取られ、すっかり当初の罪悪感は消えていた。

とはいえ、目的は達成もされていない。

意外に、女子大生の恋心を見つけるのは骨なんだな。

そろそろ飽きも来て、これで最後にしよう。そう思って、マウスに手をかける。

どうせ、最後なら、何となく彼女のイメージに近いものにしよう。

タイトルの隣にハンドル名とそのブログ名も表示されている事に、読みながら気がついていた僕は、今度は記事の名前ではなく、この、ハンネとブログ名に目を通し始めた。

よく見ると、そっちの方が個性的にも感じる。
考えてみると、それもそうだろう。

日々更新する記事とは違い、使い続けるハンネやブログの方が本質に近いのは、自明の理にも思えた。

ページをいくつかめくる。

めくるというのもおかしな話だが、つまり、画面底の数字をクリックしていく。

そのブログの名前を見つけたのは、五つ目のページをめくった時だった。

HN：MNK ブログ名：【Tea time】

全て横文字での表記だったのもあって、なんだかそのブログが気になった。

ブログのTea timeっていうのも、なんだか紅茶好きの彼女を彷彿とさせる。

次に記事タイトルを見ると『彼氏との距離』となっている。

ちよっとは彼女に近いかな？まあ、遠距離話ならやっぱりはずれになるけど。

僕はパソコン端の時計を見ながら、そろそろ中林が戻ってくる時間だし、ここらで手を打つか。そんな気分で、そのブログをクリックした。

《彼氏との距離》

200# / 5 / # # 19 : 22

今日も結局素直になれなかったよ〜（つ、
どうしたら、素直になれるのかなあ（；・；）

せつかく、彼女になれたって言うのに、可愛くなれない。
このままじゃ、嫌われちゃうよ。

しかも、最悪なのが、デート中にまたあの勘違い男が現れちゃってこの勘違い男、幼馴染でたまたま同じ大学って言うだけで私が奴のこと好きだなんて思い込んでちゃって。しつこくて本当に嫌だ。ただ、実家から通える大学を選んだだけだって言うのに！

……でも、もつと最悪なのが、私なんだよね。

彼とその勘違い男がもめてるのに、何にもいえずに帰っちゃった。

自己嫌悪（x|x*x）

もしかして、彼の気持ち、もう離れちゃってんのかな？

私が合コンに誘われたっていつても、反応薄かったし……（涙）

彼からまだメールも来ないし、こっちからメールするのもなんだし。明日からどうしよう……（。。、）

記事はここで終わっていた。その下のコメント欄には何人かの意見が寄せられている。

（M a k o）

こんばんは

M N Kちゃん、やっちゃったね

気になるんなら、メールくらいした方がいいんじゃない？

優しい彼でも、やっぱりホローはしといた方がいいよ。

頑張つて！

（海牛母ちゃん）

あらら。

素直になるって難しいですよ。

私も、主人と付き合っている時はそんな感じだったからわかります。でもね、失ってからじゃ遅いんですよ。

ちよっときつい言い方もしれないけど、M N Kさん、彼氏くんを失いたくなかったら、もう少し素直になった方がいいと思いますよ。

優しい彼氏みたいじゃないですか。きつとありのままのMNKちゃんでも受け止めてくれますよ。

(とし坊)

こんばんは。

俺も今日、彼女と喧嘩しちゃったよ。

お互い早く関係修復できるといいね。

などなど。

ふうん、何となく、記事の内容が今日の僕達のシチュエーションに重なり、僕はちよつとこの記事に引つ掛かりを覚えた。

勘違い男を海部、彼氏を僕と、起き変えてみると、案外離れた感じにも思えない。

ただ、一番違つと感じたのは、このMNKという、プロ主のキャラと彼女だ。

絵文字満載で、ちよつと甘え口調にも感じられる文面からは、彼女の様なパーフェクトな感じは一切見えてこない。

やっぱり、参考にはならないか。

と、思いつつ、ブログタイトルの方をクリックする。

こうすると、このブログの過去記事も表示されるからだ。

過去記事のタイトルに目を通しながら、ふと考えなおす。

でも、待てよ。彼女の様な完璧な人を探す方が元々は難しいんじゃないだろうか。全く一緒でなくても、彼女に近い人物、たとえば性格は違つても年齢やシチュエーション、ならある程度の参考にはなるんじゃないだろうか。

このブログ、【Tea time】は、シンプルな壁紙だけど、このブログ主のセンスの良さをうかがわせる配色のブログだった。ブログ名にふさわしく、こう茶色を基調に、アイコンなんかは小さなティーカップになっている。

カテゴリーも整理されているらしく、プロフィールを先頭に、恋愛、彼氏、悩み、夢、読書、映画、日記と並んでいた。

八つあるカテゴリの中で、彼氏関係が二つもある辺り、このMN Kさんの恋への関心度がうかがえるような気がして、さっきの記事の内容も相まって、こんなに彼女に思われる、その彼氏とやらが僕は少し羨ましく思った。

「どれどれ」

まずは過去記事で気になるタイトルを押ししてみる。

《イメージ》

200#/4/# # 20:25

彼は、私にどんなイメージを持つてるんだろう??

告白して一週間。すつごくハッピーだったけど、今日、いきなり彼に手を握られそうになって、ビックリした? (@ @)ノア
ワワワワ・・・?!

あ、別に純情ぶってるわけじゃないよ。

でも、こんなに好きになったのって初めてだから、簡単に色々進めたくないってどうか……。

前までは、彼ができて、すぐに手をつないだりキスもしてた。キス何か別に特別じゃないと思ってたし、ハグだって友達ともするくらいだし。

でも、今回の彼は違う(。(ニヤ

なんていうか……彼には軽い子って見られたくない。

帰国子女って、結構軽いつてみられるって、前に友達から聞いてそれから余計に気になっちゃって。

確かに、向こうにいる時はそういうの、もっとオープンだったし、それが普通だと思ってたんだけど……。
どうしてかな。彼にはそうできないよ。

身構えすぎかな(。(

お高くとまってるて思われるのも嫌だし、どうしよ(。(;
。()

僕はそこまで読んで、「へえ」と声を漏らした。

この子も彼女と一緒に帰国子女なんだ。うん、ちょっと参考になりそうだなぞ。

オークションで掘り出し物を見つけたような感覚を感じ、僕はさつきより身を乗り出すと、次の記事をクリックしていた。

彼女のブログ 2

プロフィールを読んでしまおうかと思ったけど、僕はこれだけで結構几帳面な性格だ。

読むと決めたのなら、できるだけ始めから読みたい。

いつから始めたか調べると、一年前の四月からこのブログは始められたらしい。

さすがに、一年分となると、読むのに時間がかかりそうだ。できれば中林が帰ってくる前に一区切りは付けておきたい。

そこで、僕はまず始めの記事を読み、それから二か月ないし三カ月おきにランダムに記事を選んで読んでみることにした。その中で気になればその前後を読んでいく。

左端に表示されていたカレンダーをクリックする。

あっという間にMNKさんの時間は一年前に遡ってしまった。

《はじめに》

200* / 4 / ## 22:00

今日から、ブログを始める事にします。

ブログをするのは初めてだけど、自分の気持ちをまとめていきたいし、誰かの意見も聞きたいし、そういった理由でブログという形にしました。

で、なぜ、それが今日なのかと言うと。

実は、好きな人と再会したんです(/ / / /)

わけあって、彼とは長い間離れていたんですが、ずっと忘れられなくて……。

そんな私ですが、素直な気持ちを綴っていきたいと思いますので、よろしく願います(/ 3)

なるほど、どうやら一年前に何かのきっかけで再会したところか

ら始まるらしい。その日は他にも記事はいくつかあったけど、どうも一年後には彼女には彼氏ができているようなので、僕は先を急いで、その付き合うまでをざっと読んでみることにした。

《苦しいよ》

200* / 5 / ** 23 : 14

今日も彼の姿を見かけたけど、声はかけられなかった(p | q、) 入学式の日、どうしてもあんな風に自分があんな大胆な行動に出られたのか不思議なくらい、彼の声を聞くだけで心臓が飛び出しそうになる。

彼はいつも一人でいるから、声をかけるチャンスがないわけじゃないんだけど、私に勇気が出ない。

彼、ちよつと暗くなつたのかな？ なんて思ったりしたけど、サークルにも入っているみたいだし、よく考えると昔も一匹狼で群れにいるような感じじゃなかった。

ヤバイ。本当にかっこいい(*、艸、*)

せめて、話しかける勇気が持てたらなあ。

よつぽど好きなんだな。この子は。思われている男は幸せ者だ。自分を見ている女子の視線にくらい、気がついてやればいいのに。僕は次に少しとばして九月のカレンダーの中の一つをクリックした。

《初めての学園祭》

200* / 9 / # 23 : 16

楽しかった〜 (@ ^ ^ @)

日本の大学の学園祭って、初めて経験したけど、本当に面白いね！ 私のサークルの出し物はクレープだったんだけど、クレープって焼くのも結構面白い！ 飛ぶように売れちゃって、なんと午前中には完売！

暇でうるうるしてたら……なんと、ミスキャンパスに出場する事に緊張した〜（＾皿＾）

結果は……秘密です

彼も見ててくれたかな？

あ、彼のサークルも探したけど、見つけれなかったよ。残念（つじ）

へえ、やっぱり、大学生なんだ。入学式云々、ってことは、僕と同じ学年になるのかもしれないな。

それにしても、この子は再会を果たしたって言うのに、まだ友達にもなっていないのか？ 再会って、相手の男は彼女の事を覚えていなかったのだろうか？

人の日記を読むなんて……と最初は戸惑っていた僕も、もう、すっかりブログのとりこになっていた。読んでみると、結構面白い。

見知らぬ人の見知らぬヒストリー。ちょっと覗き趣味的な部分は否めないけど、本屋で見かけた詩とも童話とも言えないケータイ小説なんかよりは、よっぽど面白い気がした。

初めに読んだ記事によると、彼女は今年の四月に両想いになっているはずだ。

時計を見る。

大森の趣味で備え付けられたアニメの女の子がフレームになっている時計は、中林がこの部屋を出て行ってそろそろ二十分ほど経とうとしている事を告げていた。

夜の空気も一層静まり返り、五月といえど、少し足元が冷えてくる。真つ暗な窓に映った自分の影と目が合い、虚ろなその色に苦笑する。

彼女の気持ちをしりでも知りたくて読み始めた、ブログという他人の日記。でも、気がつけば参考にといいより単純な好奇心だけで読んでいた。

そろそろ辞めるべきかな。

文面から伝わってくる、このM N Kさんの気持ちが真剣であればあるほど、興味本位でこつこつ覗き見の様な事をしている自分が恥ずかしいような気もしてきたし。

「よし」

まあ、どうせなら、M N Kさんが両想いになった所まで読んで辞めよう。

さっき読んだブログをもう一度思い出す。たしか、告白して一週間って下りがあった。じゃ、その一週間前の日付を読めば……。

僕の手が素早くマウスを滑らせる。

すぐにカレンダーは近い過去にやって来て、簡単にM N Kという知らない女の子の告白したのであるう日に着地した。

《彼氏ができました》

案の定、喜びにあふれたタイトルが表示された。

どれどれ。僕はその顔も声も素性も知らないM N Kさんの、喜ぶ様を勝手に想像し、彼女の思いが通じた事をなんだか少し喜びながら、下に続く文字に視線を滑らせる。

そして、僕は固まった。

「え、これって……」

『偶然は必然的に起きるものだ』

ラブレイドの言葉が僕の頭の奥でぼんやり響き、僕は目の前につづられた文字を、信じられない気持ちで、だがしかし、一字一句読み間違えないようにじっと見つめた。

まさか、本当に？

目を疑う。何度も読み返す。

そこに綴られた信じられない内容。

それはまさに、僕が彼女から告白を受けた状況、そのままだったのだ。

《彼氏ができました》

200# / 4 / # 19 : 37

とうとう、告白してしまいました。

そして、タイトル通り、付き合う事になっちゃいました！キャ

(* *)

今、物凄くHAPPYです！

本当は友達から、なんて思ってたけど、この一年、全然声もかけられなくて、このままじゃ、埒があかないと思ってたし、六月の父の誕生日会までに間に合わせないといけなかったから。

本当に、泣きそうだった(< | >

今日、告白するって決めてから、ずっと心臓が壊れそうだったよ。最近、彼を見かけるのは今日の講義だけだったから、もう、これがラストチャンスだと思ってる、思い切って言っちゃった。

でも、よく考えると、みんなまだ教室にいたし、彼も皆もビツクリしちゃってたんだよね。

本当に、賭けだったよ。

だって、あの、教科書のコピーを渡した再会の日から彼に話しかけたのはこれで二回目。丸一年は挨拶もしてなかったんだもの。奇跡だよ。

っていうか、もしかしたら、彼の方も私の事を覚えていてくれたのかな。

あ~~~~。とにかく、今はもう、胸がいっぱいで(*)。

明日から、どうしよう。

とにかく、ご報告でした(*)。

心が躍っているのが、文面からも伝わってくる。

僕はこの記事を五回読み返した所で、もう一度、このブログの記事をいくつか読んでみた。

ブログの登場人物を、彼女と僕に置き換えて読んでみる。

驚くほどの符合があった。

出会った（彼女の言う再会した）日の日付も、その時の出来事も書かれてあり、全くそのままだった。

告白の日も同じ。僕が色々仕掛けたことまで、結構細かく記載されている。

「嘘だろ」

今の今まで、他人のプライベートを面白おかしく読んでいたくせに、自分の事を書かれていたと疑いだいたとたん、急に不快感に似た不安が僕の視界を奪い始めた。

僕が、彼女にキスをしようとして失敗したことまで……書いてある。

「勘弁してくれよ」

怒り？ いや、何だろう、この気持ちは。自分の弱い部分や恥ずかし秘密を、勝手に暴露されたような……悔しくてやるせない気持ちでもいっべきなのだろうか？

僕はアルコールに重くなった頭を抱え、TOP画面に戻した彼女のブログをぼんやり見つめた。

MNK、美奈子、MINAKO……。

そう考えると、ますます、このブログは彼女のものなのではないかという気がしてきた。

っていうか、そうなのだろう。

ちっちゃな虚脱感に襲われ、僕はもう、パソコン画面を閉じようと、マウスを握った。その拍子にページが更新される。

「ん？」

みると、新たな新着記事が載っていた。

今日の記事の、さらに後。投稿時間を見ると、たった5分前に投稿された事になっている。

もう、ついでだ。毒を食らわば皿まで！

僕はした唇を噛むと、その記事をクリックした。

《大好き》

200# / 5 / ## 22 : 46

私はやっぱり彼の事が大好き(。<|>。
子どもの頃に助けられたからでも
彼が優しいからでも
なんでもなくて

ただ、彼が彼だから大好き。

彼の事を想うだけで、胸が苦しくなって、泣きたくなる。
こんなに誰かを好きになったの何か初めて。
失いたくないよう……。

これから、メールしよう。

とりあえず、今日の事、謝らなきゃね。

どうしよう。メール打つのも緊張しちゃうよ。

でも、頑張らないと(、(、(

では、これからメール打ってきます。

返事、来るかなあ(。ー。

「泉さん……」

僕のひび割れかけた胸の奥が、じんわりと温かくなった。

そして、僕がこの記事を読み終えるのを見計らったように、鞆の
中の携帯が鳴る。

ラブレイドのきらりのテーマ……彼女のメール用着信音だ。

僕は椅子から降りると、震える手で、携帯を開いた。

新着メッセージがある事を点滅画面が教えている。

もし、これが本当に今日の謝罪のメールなら……。

泉美奈子

件名：(なし)

こんばんは。

美奈子です。

遅くにごめんなさい。

今日の海部君の事

だけど、誤解のない

ようにしようと思い、

メールしました。

彼とはただの父親を

通した幼馴染です。

父の誕生会の件、

よろしく願います。

おやすみなさい。

いつもの、そっけないメール。僕は急いでブログ画面に這い戻る。そして、この手元のメールと記事の文面を見比べた。

とうてい、同一人物のものとは思えない。でも、ここまで一致する偶然を信じない方が、むしろ、無理があるように思えた。

確かめたい。もし、このブログが彼女のもので、彼女が本当にこんな風に僕を想ってくれているのだとしたら……。

僕はもう一度携帯の方へ眼を落とすと、一息をついてから、ポインターをある場所へと移動させ、クリックした。

ポインターが移動した先。それは、この記事のコメント欄だった。

僕の偵察 1

中林が戻って来た時、ちょうど僕の指が送信ボタンを押した時だった。

それから、中林とは明け方まで飲んで、気がつくとき計は1時を指していた。すぐには昼なのか夜なのかわからなかったが、カーテンの隙間からこぼれ落ちる陽射しに、僕らは酔った拳句に昼過ぎまで寝ていた事を、二日酔いで最悪な状態で認識した。

「中林！ 中林！」

揺すってみる。しかし、中林はまだ起きそうになかった。だらしない恰好で寝転がったまま、薄目すら開けない。

まあ、奴は奴なりに僕を気遣ってくれたんだ。僕はそう思いなおります事にして、いつだれが持ってきたのかわからない、部屋に転がっている毛布を彼にかけた。

それよりも、だ。

重い頭を支えるように額に手を当て、前髪をかき上げる。自分でもわかるほど酒の匂いがする自分自身が吐く息に顔をしかめて、水を含んだコートを何枚も重ね着したように重い体をなんとか持ち上げた。

スリープ状態のパソコンの前に座る。

昨夜のブログ……あれはアルコールが見せた幻想だったんじゃないか。僕はそうであってほしいような、そうでないでほしいような、中途半端な気持ちでキーを一つ押した。

画面は昨日、慌てて戻したホームサイトのままだ。更新すると、新しいニュースが羅列された。

そのどこにも、泉美奈子の彼氏が彼女のブログを盗み見たなんて載っていない。

当たり前だけど、そんな事に僕はちょっと気を軽くして、あのサイトへと飛んだ。今度は迷わない。ブログサイトから検索欄に彼女

のブログ名を打ち込む。

すぐに画面は切り替わり、最終更新がついさっきにもあった事を知らせる表示が出てきた。

今、確かめる事はただ一つ。あのブログ主、M N Kは本当に彼女なのかって事。

そして、もし、本当なら……。

僕はどうするつもりなんだ？

酷い吐き気が込み上げて、僕は思わず片手で自分の口を塞いだ。

だめだ、脳みそが直接ハンマーで打たれるように痛い。しかも、胸のあたりでヘドロをぐるぐるかき回されているような、強烈な吐き気もある。

駄目だ、本当に……僕はこみ上げるものをなんとか胃の中で沈めると、恐る恐る一つ大きく深呼吸してから、もう一度パソコン画面を見つめた。

今は、とりあえず今は深く考えるのはよそう。

とにかく、ハッキリしているのは、彼女かどうかまずは確かめたい、確かめないと気になって仕方ない。なら、とりあえず、今は確認する事だ。

僕は、二日酔いとは別に、早まる鼓動を感じながら、再びあのサイトを開いた。

《返事が来ない》

200* / 5 / * * 09 : 15

昨日、あれからメールしたんだけど、彼からの返信はありませんでした(T——T)。

心配してくれたみなさん、ありがとうm(——)m
でも、いつもはすぐに返信してくれる彼からのメールがないなんて、もう終わりなのかもしれない。

もう、学校に行かないといけない時間なんだけど、学校に行くのが怖いよ。

《彼氏に会えない》

200*/5/** 12:55

今、学校。彼を探してるけど、今日はどこにもいない(T^T)
本当は会って、ちゃんと謝りたいんだけど。

といっても、私の事だから、あつたらまた素直にできないんだろう
なあ。

でも、今日は、その対策も用意したんだけどなあ。

返信はまだ来ていません。

最悪。。。(><)。。。。

今日は朝から二つも記事を上げていた。

コメントの到着の方を見る。何人かとやり取り済みのようだが、
そこに僕の打ち込んだ名前はなかった。

無視か？ それとも、新着は十件までしか表示されないから、す
でに僕への返信は流れたのか？

昨日、メールが来る前に書き込まれた記事を表示し、そのコメン
ト欄を開けた。

簡単に、昨日、僕が打ちこんだメッセージが再表示される。

(セイ)

はじめまして。以前からこちらのブログを拝見してましたが、読み
逃げしてました。ごめんなさい。

あの、彼氏さんとなにか誤解があったようですが、一度素直にぶつ
かってみてはいかがでしょう？

言葉や態度に出すのが難しいのなら、手紙なんかはいいんじゃない
ですか？ メールは送信してしまうと取り返しがつきませんが、手
紙なら書いてから一晩寝かせることもできますし、その方が気持ち
も伝わると思うのです。

はじめましてでお節介、すみません。

でも、いつもM N Kさんの恋を応援してます。

もちろん、以前から読んでいたなんて大ウソだ。でも、もしこのブログ主が彼女で、このコメントに何らかのリアクションがあつて、うまくこの作戦にのせられたら、確認する事は出来るはず。

僕は緊張しながら画面をスクロールさせた。

僕の他にもコメントは届いていて、その中でわかったのは（M A K O）（海牛母ちゃん）の二人は特に彼女と頻繁にやり取りをしているらしいという事だった。

後、昨日気がつかなかつたけど、コメント欄の隣に【内緒】というボタンがある。どうやら会員じゃない人には使えない機能らしいが、ちょっと気になった。

M N Kのコメントの返事が始まった。

僕の偵察 2

>セイさんへ

その文字に、思わず二日酔いで回っていた世界も回転を控え始める。

生睡を飲み込む。

ちなみに、この非会員の謎のブロガー『セイ』は僕の名前『正義^{まさよし}』の正の字を音読みさせただけだ。もっとましなのを考えつけたらよかったんだけど、昨日のあのアルコール漬けの状態だと、これが精一杯だった。っていうか、まともな日本語がコメントできていて良かったと思うくらいだ。

>セイさんへ

はじめまして。こんな拙いブログ、読んでくださっていたなんてありがとうございます。

お手紙のアイデア、物凄くいいですね！そうなんです、メールはいつも迷いに迷って打つくせに、送った後に絶対後悔しちゃうんです。

もし、今夜返信がなかったら、書いて明日渡してみようと思います。

結果は、また後日報告させてもらいますね。

「うわぁ」

僕は思わず声を漏らしていた。

予想以上に簡単に僕の作戦に彼女の方が載ってきたぞ。

ってことは、だ……。僕はもう一度今日付けの記事に戻る。

といっても、私の事だから、あつたらまた素直にできないんだろう

なあ。

でも、今日は、その対策も用意したんだけどなあ。

この部分って、もしかして手紙の事なのかな？

そうだとしたら……。

僕はパソコン画面を見つめる。

僕は、もしかしたらもしかして、最高の武器を手に入れた事になるんじゃないか。

そう、わかりにくいっていうか、全く理解不可能な彼女の心の中をまるつきり映し出す、この彼女のマニュアルともいべき武器を！

僕の携帯が鳴った。

きらりのテーマ……彼女からのメールだ。

僕は息をのむ。

携帯を手にして、ボタンを押した。音楽が途切れ、画面が切り替わる。

そこには、やっぱりそっけない文面で、僕のロッカーに手紙を入れておいたから読んで欲しいとの事が綴られていた。

ロッカーに挟まれていた手紙は、薄い水色の何にも柄のない封筒に、中もやはり柄のない水色の便せんで綴られていた。

このチョイス一つにしても、あの絵文字満載のブログの主とこの手紙の送り主が同一人物のものなんて、俄かには信じ難く感じさせるのだが、もはや僕はあのM N K = 泉美奈子という図式を疑いはしなかった。

綺麗に置まれた便箋をゆっくり開く。

中には綺麗な手書きの文字でこうあった。

小木正義さま

こんにちは。昨日の件で少し気になる事があり、お手紙しました。本来ならば直接話すべきでしょうが、うまく説明できる自信がない

ので、手紙という形にした事、お許しください。

まず、父の誕生日会の事ですが。日時について話していませんでしたね。

日時は六月四日（日）午後六時。場所は私の実家です。他にもお客様を招待しているので、できる限りフォーマルな格好でいらしてください。

次に、海部さんの事ですが、彼の話す事は事実無根で、気にしないでください。彼とは幼馴染ではありませんが、それ以上の関係ではありません。

できれば、近いうちにお会いしたいです。

連絡ください。

泉美奈子

「……」

僕はこの手紙を読み終わると、思わず笑みをこぼしてその便箋を抱きしめた。今までなら、なんて他人行儀のないようなだろう。

こんな用件だけの感情のかけらも感じない手紙……やっぱり彼女の気持ちを読めない。そう思ったことだろう。

でも、あのブログを知った今、僕にはこの手紙が全く違ったように見えた。

手紙の隅々にまで、隙の欠片もない文面。

完璧すぎるこの手紙が、かえって彼女の緊張の度合いを示しているように思えた。

あの、ブログの不安に震える言葉を思い出す。僕の事が好きで、好きだから迷い、悩み、不安になっている、あの女の子らしい言葉を、だ。

僕はそつと手の中の彼女の文字を見つめた。

どんな顔をして書いたのだろうか？ もしかしたら、何度も何度も書き直したのかもしれない。幾度も幾度も読み返しては溜息をつ

き、僕の、僕だけの為に長い時間を費やし心を砕き、勇気を振り絞ってくれたのかもしれない。

「泉さん……」

そう思うと、あの、氷のような冷たい表情も、女王様の様な高圧的な態度も、全てがああの可愛らしさの裏返しの様な気がして来て、僕はたまらなくなつた。

急いでケータイを出す。

メールを打つ。

『すぐに会おう。僕も、君に会いたい』

僕は勢いに任せて、そう送信した。

その後、彼女からすぐに連絡が来て、僕らは昨日のデートの仕切り直しをした。

昨日と同じ喫茶店で待ち合わせ、昨日行く予定だったシヨッピンセンターと一緒に廻り、いつもの時間の彼女を家まで送った。

昨日と違うのは、海部の登場がなかった事くらいで、彼女の態度が何か変わったわけじゃなかったけど、僕は始終笑みを堪える事が出来なかつた。

「じゃ、もうここでいいわ」

彼女は実家から大学へ通っている。そして、その実家は豪邸と呼んでいいほどでかい。

僕の住む6畳のワンルームなんか、きつとこのうちの玄関より狭いだろう。

いつも家まで送ると言っても、これまた大きな門の前で、そこからは家まで階段が伸びていて、玄関自体はその先の庭を超えた向こうにあるらしく、僕はまだドアすら見た事はなかつた。

外周をぐるりと歩いてもゆうに15分はかかるだろう家で、来月、僕はここの家の娘さんの彼氏としてこの敷居を跨ぐのかと考えると、ちょっと気後れすら感じさせられると同時に、誇らしい気にもなつた。

こんなお金持ちのお嬢様で、美人な子が僕の彼女。そして僕の事が大好きなんだ。

「またね」

「おやすみなさい」

別れを寂しがるそぶりもなければ、キスもない。それでも、今日の僕は気にならなかった。むしろ、気になったのは目の前の彼女の態度よりも、ブログだ。

今日の事をどんな風を書くのだろうか。今日のデートは楽しんでくれたのだろうか。早く知りたい。

彼女はいつものように振り向きもせず、門をくぐり階段を上っていく。僕はその後姿を見つめながら、ふと、思いついた。

そつだ。どうせ反応をみるのなら……。

「泉さん！」

僕は声をかける。彼女が振り返った。やっぱり、表情はない。でも、僕はそんな彼女に満面の笑みで、こう言ってみた。

「手紙、ありがとう！ すごく嬉しかった！」

それは、一瞬だった。

夕暮れの薄暗さにはつきりとは見えなかったけど、でも、僕は見たんだ。彼女の表情が少しだけ、ほんの少しだけ緩むのを。

息を飲んだようだった。目が、ちょっと潤んでいるようにも見え

た。でも、彼女はすぐに表情を正すと、「それは良かったわ」と口の中で呟くように零し再び僕に背を向けたのだった。

ちよつと早足で階段を駆け上がる彼女の背中を見て、僕は満足していた。

僕の快進撃 1

《嬉しい！！》

200* / 5 / ** 20:33

今日、彼氏とデートでしたゞ()ノ”。

あれからもなかなか会えなくて、彼のロッカーにお手紙を置いたの
で、MNKが彼にメールして読んでくださいって送ったら、彼はす
ぐにロッカーを見に行ってくれたみたいで、すぐに『会いたい』っ
てメールくれました。

本当は、もうダメになっちゃうんじゃないかなって思ってたから、
すっごく嬉しくて。

昨日のデートの仕切り直ししました。

どこにいても、もう、彼しか見えなくて(^ m ^)

お茶して、お買い物したただけのデートなんだけど、ずっとドキドキ
してたよ。

手……繋げばよかったかなあ。

前まで彼は時々繋ごうとしてくれてたんだけど、恥ずかしくて拒否
ってたら、最近は全然繋ごうとしてくれなくなっちゃって……。

ああ、私って本当に可愛くないことばかりして、駄目だなあ。自
業自得だよね(x | x *)。

うちって門限があつて、八時には帰らないといけないんだ。いつも
本当はもっと一緒にいたいよ。

でも、そういうのも本当は寂しいくせにそっけなくしちゃう。

あ、でもね、今日はその時、彼が言ってくれたの！

「手紙ありがとう」って！

もう、泣きそうだった() ㄱ | ㄱ。 *)

今も、ドキドキして落ち着かないよ。

アドバイスしてくれたブロ友さん。ありがとう

この調子で、少しずつ素直になれたらいいなあ

僕は家に帰ってすぐに立ち上げたパソコン画面を見て、ドキドキした。

このブログは彼女のブログだと再認識したせいもあるけど、なにより、彼女がここまで僕の事を好きでいてくれていたんだという、その事実を目の当たりにしたというのが大きいように思えた。

彼女のブログを盗み見するのは確かに趣味のいい事ではない。

でも、彼女も僕に心を開きたがっているんだ。そして、その相手の事はあたりまえだけど、僕が一番知っている。

こんな感じでセイとしてアドバイスをして、僕として彼女の望むような反応をする。そうしていくうちに彼女の警戒も解けて、いずれは素直になってくれるんじゃないだろうか。

そう、これは彼女のためだし、誰も苦しめるわけじゃない。っていつか、むしろ、すっげー幸運。すっげーチャンスなんじゃないか！？

僕は逸る鼓動を押さえながら、コメントボタンを再び押した。

(セイ)

よかったですね。彼氏さんもきつと物凄く嬉しかったんだと思いますよ。

手も、貴女のほうからさりげなく……例えば何かを避けるふりをしたり、肩を叩いて注意を引くような感じだったり、そんなタイミングで繋いでみてはどうでしょうか。

彼はきつと喜んで、手をつないでくれると思いますよ。

頑張ってください。

そして、送信する。

ドキドキは彼女を騙しているというほんの少しの罪悪感と、思いもかけない方法で彼女との距離を縮める事が可能になった興奮で、しばらくは収まりそうになかった。

(M N K)

> セイさんへ

アドバイスありがとうございます(・v・)。

昨日、すつごく悩みながら手紙、書いたんです。けど、何度かいてもうまく行かなくて……今でも、あれで良かったのか自信はありません(u|u)。

やっぱり、男の人は素直で可愛らしい女の子がいいですよね？

(セイ)

こんばんは。今夜二回目のおじやましますです。

少しでもお役に立てて嬉しいです。

お手紙の事は、彼氏さんが「ありがとうございます」と言っていたのなら、良かったんじゃないですか。自信持つてください。

女の子の趣味についてですが……そうですね、確かに素直で可愛い子の方が好きな人は多いかも知れませんが、僕はM N Kさんのように一生懸命に頑張っている人も素敵だと思いますよ。

(M N K)

> セイさんへ

励ましの言葉、ありがとうございます。でも、最近ちょっと焦っています。付き合い始めてから、私、全然、素直になれなくて……拒絶するような冷たい事はかりしてしまっていて。

でも、とりあえず、一歩踏み出さなきゃですよね。

手、つなげるように頑張ってみます()ノ。

その夜、僕はこんなやり取りを彼女とした。

ただし、パソコン画面上で、僕はセイ、彼女はM N Kとしてだけ
ど。

セイはもう、りっぱなM N Kのブロ友になったようだった。

そして、翌日、僕は付き合って一カ月と十日で初めて、彼女と手を繋いで歩くのに成功したのだった。

僕は毎日、彼女のブログを覗くようになった。

リアルとバーチャル。彼女は全く違う二つの顔を持っていたけど、バーチャルでの会話がリアルで反映される度に、僕は言いようのない快感を覚えた。

まるで、仕掛けた悪戯が次々に成功していくような、そんな快感だ。

彼女が悩み相談してくる。セイがアドバイスする。彼女がアドバイスに従う。僕がセイの睨んだ通りの反応をする。彼女はセイをますます頼りにし、またセイに相談してくる。

その繰り返しだ。

二週間が過ぎる頃には、僕……いや、セイはすっかり彼女の信頼を勝ち取っていた。

そして、僕は、というと……。

「もう、時間だよな」

僕は隣に座る彼女の手を握りながら、自分の足元に呟くように言った。

すっかり日の落ちた公園。

街灯が照らしたすのは誰かが置き去りにしたボールと、ベンチに座る僕たち二人の影だけ。

頭上に広がる空にはぼんやり明るい春の月が浮かんでいて、彼女の髪をさらう風は少し冷たかった。

彼女は怒ったような顔をして、俯いたまま、何も言わない。

ただ、僕の手をぎゅっと握り返している。

《キス（*く艸）》

200*/5/** 23:24

キスって、日本では付き合ってたれくらいですか？

ぶつちやけると、私は向こうではキスしてから付き合うつて方が多かった。でも、それって、日本では軽く見られるのかな？それとも日本でもキスから先に始まる付き合いもアリ？

普通、付き合つて、どれくらいでするものなんでしょうか？

実は、今の彼とは、まだなんです（ノノノノ）

でも……本当は、M N Kも……

あ〜。恥ずかしい（＼ノエノ）

ちよつと今日は攻めの姿勢のM N Kでした

僕は、こんな、昨日の彼女の記事を思い出していた。

そして、続いて寄せられたコメントを思い出す。

（M A K O）

え〜。別に決まってるけど、M A K Oの場合は、相手がしてくるまでじらしちゃうかな。

でも、一回やったら、次からはM A K Oから（＼＼）

（みかんのみ）

本能におまかせww

（海牛母ちゃん）

今の子はどうなのかなあ。海牛母ちゃんはこれでも、結構奥手だったので、付き合つて3か月はしませんでしたよ〜。

でも、彼が誘ってくるんなら、そろそろいいんじゃないでしょうか？

お二人のタイミングで（＼＾―＾＼）

「正義君……」

僕の手を握る彼女の手に力が込められた。

僕はそつと彼女の瞳を見つめる。あの、告白の時以来の、不安げで泣きそうな目だった。

（セイ）

MNKさんがそろそろと思っているのなら、もう、いいんじゃないですか？

彼氏さんは、拒否する事ないと思いますよ。

「泉さん」

予感が僕らを優しく包みだす。

僕はそつと彼女に近づいてみた。一度、こつやつて彼女に突き飛ばされた時の事を思い出す。

でも、今日の彼女はそうはしなかった。そして、しない事を、僕は知っていた。

(MNK)

>セイさん

そうでしょうか。でも、女の子から誘うのはひきませんか？

肩と肩が触れ合う。時間をかけるほどに、緊張は増していくけど、その分、お互いの気持ちを確認かめあっているような感じで……このキスは、軽いもんじゃない、僕は彼女が好きで、彼女は僕の事が好きなんだ、そんな事を信じられるような気がした。

彼女の目が閉じられた。

(セイ)

大丈夫ですよ。僕なら、彼女から誘われたら、正直嬉しいですが、あからさまなのは驚かれるかもしれないですが、そういう雰囲気になれば、自然とそうなるんじゃないでしょうか。

心臓が、破けそうだ。

繋いでない方の手をベンチから離すと震えていた。カッコ悪い。

僕はそれを誤魔化すように一度強く拳を握ると、勢いよく開いて彼

女の肩をそのまま抱いた。

ぐっと引き寄せる。

彼女の髪の毛の香りがした。

そして……。

(M N K)

そうですね。いつもアドバイスありがとうございます。

明日、デートの約束してるので、頑張ってみます)* < >*(ノ

僕は、念願のキスをした。

(セイ)

頑張ってください！ 明日、いい報告が聞ける事を祈っています。

僕の快進撃 2

自然に顔がにやけて鼻歌が零れる。

久々に顔を出した部屋は相変わらずのメンツの、相変わらずの汚さだけど、今の僕にはそんなことすらも、この素晴らしき世界のひとかけらの様に見えた。

僕は自分の唇を触ると、昨日のキスをまた脳内再生させる。

何十回、いや、何百回と脳内再生されているあのキスは、僕これまででの人生の中でラブレイドのスイーツアクターの人に会った時と並ぶほど、大切な経験になった。

キスをした。

やわらかかった。

彼女の体温を感じ、腹の底が熱くなった。

強く抱きしめたい、でも、そうすると壊れてしまいそうで怖い。そんな対局の想いが交錯しているうちに、彼女の吐息を感じ僕はゆっくりと離れた。

それからは、彼女はやっぱりいつものように怒った顔でだんまりを決め込み、僕はそのまま彼女を家へ送って別れたのだが、もう、そんな態度に不安にあるはずもなかった。

ある期待を胸に家路を急ぐ。

そして、その期待通り、家について速攻チェックしたブログには、彼女の興奮した気持ちが綴られており、僕への溢れんばかりの気持ち記されていた。

僕らはうまく行っている。

セイのリードで彼女の態度も少しずつ軟化しているし、彼女も僕らの関係が前進している事を喜んでくれるようだ。

しかも、僕をここまで幸せにさせるのはこれだけじゃない。

「あ~~~~っ。どうしよう」

僕は手元にあった何かを抱きしめると、思わず声を上げた。

昨日、彼女としたやり取りを思い出す。

やり取りと言っても、ブログでセイとしてした、やり取りだけでなく、ちなみに、最近、僕はこのサイトの会員になった。ブログは作っていないけど、無料だったし、会員になるとあの、『内緒』機能が使えるからだ。

これは、相手にしかコメントが読めないようにする機能で、非常に便利だった。

その、内緒機能を使つてのやり取りで、昨日、彼女はなんと……。「くそ〜」。ここは男としてキめんとやばいよなあ」

キスのその先について、相談してきたのだ。

男である僕……セイに、このまま先に進んでも軽く思われないうるか。

キスの一件で完全に彼女の相談相手を装い、彼女を誘導する事に味をしめていた僕は、当然、こう返答した。

(セイ)

お互い軽い気持ちじゃないって信じられるのなら、大丈夫じゃないですか。むしろ、ここまで時間をかけて手順を踏んだのですから『軽い』とは思わないと思いますよ。

変に意識することもないでしょうけど……そうだな、もし、今度彼氏の方が誘ってきたら、気持ちに任せるって言うのはどうでしょうか。

これで、もしかしたら、僕は彼女と……。

いろんないけない妄想が脳内を駆け巡る。今、僕の脳はキスを再生したり、期待と希望にピンク色に染まった妄想を渦巻かせたり、大忙しだ。

正直、昨日から自分で何とか落ち着こうとしても、この興奮はなかなかおさまってくれなくて、困っているくらいなんだ。

だから、部室に来ただけだ。

「小木、そろそろいいか？」

僕は、僕の腕の中でした声に、ビックリして思わずのけぞった。僕の腕の中にあつたもの。それは勿論彼女ではなく、クッションや本という穏やかなものでもなくて、ただただむさ苦しい……。

「お、大森。いつからそこに」

タンクトップからつきだされた丸太の様な野郎の腕だった。

どうやら、僕は、大森のぶつとい腕を抱きしめていたらしい。寝起きのトトロのような眼差しを僕に送る大森は、不可解そうに眉を寄せてから

「ずっとだけど」

とボソリ答えた。その隣で、今の今まで笑いをこらえていたのだろう、中林と樹先輩の笑いが爆発した。

「あはははは。小木、頭、大丈夫か？　とうとう、あの氷の女王様に魔法でも掛けられたのか？　そうだ、あれか？　パルプンテだろ」

中林の涙目に、樹先輩がつっこむ。

「いや、もしかしたら、メダパニかも。いつもの敬語もなくなつてたしなあ」

「どつちにしる。男に走るのだけは、気色悪いからここではやめてくれよ。確かに、大森はおっぱいはでかいかもしれないけどさあ、腐女子の皆さんにも、デブとチビじゃのオタクじゃ、サービスカットにはならんと思うぜ」

そう言いながら中林が大森をつつくから、大森はさらに眉を寄せ、て「やめろよ」と女子の様に自分の胸を隠して見せた。

おえつ。

甘い妄想からしよっぱい現実に引き戻され、気まずさ紛れに唇を突き出す。

「馬鹿じゃないですか。大学生にもなつて、魔法だなんて」

僕は返す言葉が見つけれなくて、良くわからない憎まれ口を叩くと、いつまでも胸を隠している大森を「やめて下さいよ」と軽く

小突いた。

失態だ。

ぼんやりし過ぎてしまった。

気恥ずかしさを誤魔化すように咳払いをすると、まだ二人で好きな事を言っている中林と先輩を睨んだ。

「ちよつと、考え事してただけです」

「エロいことだろ？」

「ちがつ」

……う、くない。

僕は中林の言葉に詰まり、口を噤んだ。中林は面白そうに僕の顔を覗き込む。

「なんだ？　もしかして、あんまり氷の女王様が何もさせてくれな
いから、とうとうAVなんかに走っちゃったりした？　ああ、やだ
やだ。母さん、正義をこんな子に育てた覚えはないよ」

「違うよ」

「じゃ、なんだよ。母さんに隠し事でもあるんかい？」

「ってか、こんなゲームオタクな母さん持った覚えはないんですけ
ど。と僕は心の中で突っ込みながら、それでもにやけてしまう顔を
崩さないように必死に取り繕いつつ、言葉を選んだ。

「き……」

自分の鼻の穴が膨らむのを感じた。

彼女の事を思い浮かべる。抜群の容姿に、完璧なプロフィール。

完全無欠のお嬢様。そんな人が僕の彼女で、そして、僕は

「キス、したんだ。これから、その先だってあるかもしれない」

言いきってやった。

そう、僕はもう、ちよつと前までの自信がなく下ばかり向いてい
た僕とは違うんだ。

仮面ライダーにベルトがあり、レンジャーに巨大ロボがあるよう
に、今の僕には彼女のブログがある。

謎のブロガーセイに変身すれば、いつどんな時だって、彼女の気

持ちが掴め、彼女に助言できるのだ。そして、あの、悲惨だった状況を救って来ている。

僕は、今、まさに無敵なんだ。

皆の顔をゆっくりと見回してみた。

間抜けに口を開けたままの樹先輩の顔。

口に入れたポツキーを落とした大森の顔。

目を見開き減らず口が叩けなくなった中林の顔。

どうだ。

僕だって、やる時はやるんだぞ。

「マジ……かよ」

初めに声を発したのは、一番気丈な中林だった。

「お前、犯罪まがいの事とかしたんじゃないのか？」

奴は僕に掴みかかると、必死の形相で声を上げる。

「そうだ。お前が、あの、泉美奈子さんと出来るわけないじゃないか！ 母さん！ どうしよう、正義がとうとうやっちゃったよ！」

ついで、樹先輩が喰いかかってきた。

二人はとうとうとよくわからないことを口走りながら、僕を涙目で見つめる。

ふふっ。どうだ。ちょっとは見直した？

僕はかなりいい気分で二人のリアクションを眺めると、気取った動きで中林の手を振り払った。

「何言ってるんですか？ 二人とも」

大げさな動作で襟を整える。

気分はもう、ラブレイドだ。

僕は、立ち上がると汚れてもいないのにズボンの埃を払い、二人を見下ろした。

「僕はね」

そうさ、変身できるようになった僕は、ラブレイドと同じヒーローだ。素直になれない女の子の背をそっと押し勇気を与え、恋愛を成功に導く、愛と勇気の戦士！ ラブレイド！ またの名を……。

「僕はね」

そうさ、変身できるようになった僕は、ラブレイドと同じヒーローだ。素直になれない女の子の背をそっと押し勇気を与え、恋愛を成功に導く、愛と勇気の戦士！ ラブレイド！ またの名を……。

成功に導く、愛と勇気の戦士！ ラブレイド！ またの名を……。

「小木正義。僕はね、ずっと前から、泉美奈子の彼氏なんですよ」
僕につかみ掛かっていた中林と先輩が一斉に僕を見上げ「おお」とため息のような声を漏らす。輪の中から一步外にいた大森なんかはわざとらしく目を細め「小木から、後光が……」なんて言っていた。

心底、気持ちがいい！

三人の僕を見る目が変わるのがひしひしと感じられ、僕の鼻の穴は広がりっぱなしだ。

そうだ。

僕は、小木正義。泉美奈子の彼氏なんだ。

そうして僕は、意味もなく胸を張りながら部室を後にしたのだ。た。

このたった数時間後に、中林に泣きつくことになるとも知らずに……。

それは、ほんの些細なやり取りがきつかけだった。

気分揚々と部室を後にした僕は、そのまま自宅に戻り、パソコンを開いた。あのブログサイトに行くと、どうやら彼女が記事を上げたばかりのようだった。

内容は、彼女も昨日の興奮がまだ冷めない、そういうものだった。おんなじ気持ちでいる事に、僕の胸はじんとして、そのままコメントをいれた。

もちろん、内緒機能を使ってコメントだ。

(セイ)

幸せそうですね。今日も彼と会ったのかな？

(M N K)

はい！ とつても幸せです〜 (*。v。*) ”

でも、今日は会ってません。会いたいんだけど、どんな顔して会えばいいのかわからなくて。

けど、明日は大学が創立記念で休日になっちゃうから、どうせなら今日中にあいたいなあ (> <)

(セイ)

おやすみなら、どこかへデートとか誘ってみてはどうですか？

ここまでのやり取りで、僕の中では明日、彼女をデートに誘う気満々になっていた。ちょうど、明日から彼女が見たがっていた映画が公開になる。彼女を誘いだすにはいい口実だと思っていた。

(M N K)

でも、昨日の今日だし。口実が…… (、 、

(セイ)

映画なんかはどうですか？

思わず書き込んでしまう。でも、悪くはないと思った。彼女が思っていた所に、僕がメールする。二人の気持ちはなんだか繋がっているんじゃないか……そんな風に思わせるのは決して悪くない、むしろ、いい作戦じゃないかとすら思った。

この間、記事にされていた映画。『ステイゴールド』でしたっけ、ちょうど明日公開じゃないですか？

そして、こんな風に描き足して、送信して……しまったのだ。チャット状態になっていた彼女からの返信を待つ。その間に携帯を取り出した。メールではどう打とう。断られないとわかっているデートを誘うほど、気が楽なものはないな。そう思っていると、彼女からのコメントが入った。

(M N K)

え！ (。、) セイさんの所も明日公開なんですか。うちもなんですよ。偶然ですね。もしかして、近くだったりして……。

僕は彼女からのコメントを読んで、凍りついてしまった。冷たいものがつうと背中を滑り落ち、喉が一瞬で干上がる。同時に、体中の毛穴から、変な汁の様なものがにじみ出るような錯覚を覚えた。

しまった、ちょっと調子に乗り過ぎてしまったか。

この町の映画館は田舎なため、全国公開より時間差で映画が公開されることが多いのだ。やばい。そんなことも失念していた。

僕は何度も彼女と自分のやり取りを見直してみる。

よく読むと、僕はかなりコメントに無防備になっていたようだ。

ヤバイ。

どうしよう。

落ち着け。

パソコン画面を見つめる。ここまでラリーしていたのに、急にコメントを止めるのもおかしいだろうか。でも、ちょっと考える時間が欲しい。

体勢を立て直さねば、今のままじゃ、きっと、いや、確実にボロが出て……。

その時だった、また、彼女の方からコメントが来た。

え？

思わず息を飲む。

コメントのやり取りで連続してコメントする事はさほど珍しい事でもなかったのだけど、よりによってこのタイミングで？

本当に、セイは僕だってばれたんじゃないだろうか。

もう一度最近のやり取りを呼び戻してみる。

無防備だったとはいえ、僕だって感づかれるようなコメントはしていないはずだ。でも、まてよ、僕がそのつもりだったってだけで、元々賢い彼女が気づくって事がないとは、言い切れないんじゃないか？

生唾を飲み込む。

固唾とは良く言ったもので、自分の唾が本当に固形化したように喉を通過するのに痛みが走った。

恐る恐るマウスに手を置く。いつもの十倍は重く感じる指を持ち上げる。

彼女は、本当に……。

カチツと音がした。彼女からの二つ目のコメントが画面に表示された。

(M N K)

前から思っていたんですけど、もしかしてセイさんって@@大生じゃないですか？ ちょっと話してて、感じたんですけど……違っ

てたらごめんなさい。

あと、昨日、海牛ママから連絡があつて、オフ会するんです。今日あたりに告知があると思います。セイさんも来ませんか？

私、迷ってるんですけど、セイさんが行くなら行きたいなあって思っています。

連コメ、失礼しました。

……絵文字が消失シテル。

僕の頭の中は真っ白になった。

それに、オフ会ってどういうこと？ お麩かい？ お深い？ お

腐化い？ ちがぁう！！

これはあれだ、バーチャルで知り合ったネット仲間が、リアルで集うという、悪魔の儀式、大シヨツカーの集会、もとい、一般人の交流イベントだ。

どうして？ どうしてこんな時に？

確かめられる事じゃないけど、きつと、たぶん、数%かもしれないが、彼女は、疑い始めたんじゃないだろうか。だから、オフ会なんかを？ イヤ、待てよ、主催は違うらしい。でも、でも……。

僕は急いで今度は、過去ログを別窓で始めから読み返してみた。

確かに、セイのアドバイスの的を得ている。得過ぎている。しかも、アドバイス通りに事が実現して行ってるし、改めて目を通すと彼女がさほど詳しく書いていない事からについても割と正確に状況を把握してしまっている。

うまく、行き過ぎてしまっていたのだ。

事件をあてすぎる占い師が、犯人じゃないのかと疑われるのと同様の理屈だ。

それに彼女は馬鹿じゃない。イヤ、むしろ、頭はすっごくキレる。もしかしたら、いや、きつと、今のやり取りで感じてしまったんじゃないだろうか。

ヤバイ。ヤバいぞ。

僕は何度も前髪をかき上げると、自分の手を握ったり開いたりした。

落ち着け、落ち着くんた。

『ピンチこそチャンスだ。自分にしか切り開けない道が、必ずピンチの向こうに隠れている』

ラブレイドの声がこだました。

そうだ。落ち着くんた。

これが、今、ばれそうなピンチって言うのなら、ばれなくするためのチャンスでもあるかもしれない。

僕は、最後にもう一度ぐっと拳を握りしめると、ゆっくりと開き、キーボードを叩いた。

(セイ)

もちろん、行きますよ。その時、自己紹介させてもらいますね。

楽しみにしています。

そして、送信と同時に僕は家を飛び出した。

ピンチをチャンスに変える為に……いや、実際はそんなかつこいものじゃない。自分の失態を、友人に泣きついてなんとかするために、だ。

僕の影武者 2

「ふ〜ん」

部室以外の場所で中林を見るのは実に久しぶりだった。

今、僕らがいるのは大学近くのファミレス。二十四時間営業の便利な場所だ。利用者の半分以上がうちの学生じゃないかと思うほど常に大学生がいて、全国チェーンの店のくせに学割サービスなんかもあるから半学食化しまっている。

店内は割と広く、喫煙席も四人掛けのBOX席が四席もあり、禁煙席になると優にその四倍の席はあるように思われた。

今は時間にして昼の二時。ちょうど昼食の客がはけたところらしく、店の中の人影はまばらだった。

僕らは喫煙席の端の席を選び、向かい合っている。

中林はつまんなそうに、僕のおごりという名目の日替わりランチのハンバーグをフォークでつつきながら、これ以上ないだろうって言うくらい気のない返事をした。

「で、お前はその、セイって役を俺にしてほしいと」

「そうなんです。本当に、困っていて……」

「だったら、酔っぱらった時みたいにさ、タメグチで話せよ」

中林は普段僕がこうやって誰にでも敬語で話すのを嫌う。僕自身意識しているわけじゃないが、これは子どもの頃からの癖の様なもので……。

「タメグチでも、敬語でも、内容は同じじゃないですか」

「距離感が違うんだよ。全然。ってか、泉って女も、お前のそういう所に引っ掛かってるんじゃないの？」

中林はそう言うと、最後のハンバーグを口の中に放り込み僕を睨みつけた。

何か月床屋に行っていないのかわからないその、ルーズに伸びた前髪の隙間から覗く顔は、やはり悔しいくらいに整っている。

はず向かいの席に座っている女子のグループの子なんか、さつきからこつちを、いや、中林をちらちら見ていて「うちの大学かな」なんて詮索の声まで聞こえてきているのに、こいつはまるで気がついていないようだ。

そう言う所、正直ちよつと羨ましさ半分、妬みもあつたが、とにかく今の僕には『セイ』が必要だった。

「今は、口調の話はどうでもいいですよ。とにかく、お願いします。一生のお願いですから、友達を助けると思つて！」

「友達、ねえ。さつきまで、美人の彼女とキスしたつて大威張りしてたやつがあ、ねえ」

「それは……」

そうだけど。確かに、調子に乗りすぎたとは思うけど……。

僕の声のトーンが落ちると反比例して、奴の声のトーンが一つ上がる。

「どうせ、友達だの、仲間だの言つてさ。俺らの事馬鹿にしてたんじゃね〜の？ 彼女もできないオタクがつてさ」

「そんな事！」

背中ですっきの女の子たちが「オタクだつて〜」とゴキブリでも発見したかのような声を上げていた。僕は慌てて中林の口を塞ぎ「声大きいよ」といさめる。

しかし、中林はひるまなかつた。僕の手を振り払うとさらに声を上げる。

「何だよ。オタクがそんなに悪いのかよ。あ？ もしかして、そこで煙草スパスパ吸つてる、見知らぬ女どもにお前は気を使つてんのか？」

「中林！」

肩越しにチラツと振り返ると、さっきの女子たちはひとり分が悪そうに煙草を灰皿に押し付け、後の二人はひそひそと小声で何かを話し、もう一人は怪訝そうな顔で僕らを見ていた。

「お前なあ。どうしちまつたんだよ」

けど、喉まででかかった言葉を慌てて飲み込む。

「どうしちまったんだよ」

たった今、見知らぬ人に大声を上げていた変人は……青ざめた顔で、震える手を必死に握りしめていた。

そして、僕は気がついた。

中林は、わざと、僕の目を覚まさせる為に、自分の中にある人への恐怖と闘って、今の様な行動に出たのだという事を。

中林はなんにもかわっちゃいなかったのだ。

人見知りの人間不信。

僕がその事を察したのがわかったのか、中林は視線を下げて前髪をいつものように戻した。

相当、無理をしたようだ。落ち着きなく何度も手を握り直しては、動揺を収めようとしている。

「ごめん」

そうだよな。こんなに人に関わるのが嫌いなものを知ってるのに、オフ会への代理出席を頼むなんて、僕が馬鹿だったし、あまりに友人の事を考えてなさすぎだった。

僕は自分の考えの浅はかさを恨みながら、言葉もなくずっと中林の手だけを見つめていた。

中林の手の動きが少しずつ穏やかになっていく。

すっかり止まり、灰皿の上の煙草を手を取ったのは、それが半分ほどが灰になった頃だった。

「俺さ……嬉しかったんだ」

「え？」

中林は煙草を一つ吹かすと、空中に揺らめく紫煙の様な声で呟いた。

「初めてだったんだ。俺の見た目じゃなく、オタクの部分で友達になつてくれたの、お前が初めてだったんだ」

「中林」

中林はその短い煙草をくしゅつと灰皿に押し付けると、苦笑いをその前髪の間からもらした。

「なあ、どうして影武者役に俺を選んだんだ？」

「え？」

「俺はこの通り、うまく人と接するの何か出来ない。もしかしたら、そのセイとやらが彼女と築いた関係をぶち壊すかもしれない」

「それは……」

「そうだ。でも、大森や樹先輩より、彼が適任だと思った。だって……。」

「中林が一番、僕の事をわかってるんじゃないかと思って」

中林の顔つきが変わったのが、ありありと見て取れた。

一瞬、僕は答えるべき答えを口にしなかったのかとたじろぐ。もしかして、彼はもつと別の答えを僕に期待していたんじゃないか、僕は彼を失望させたんじゃないのかと。

もし、そうなら、僕はさらに彼を傷つけた事になる。

「あの、中林……僕……」

「そっか」

中林の頬が緩んだ。

僕は首を捻る。なんだ？ 違うのか？

不思議に思う僕をよそに、中林は一人ホツとしたような顔をしてテーブルに両肘をつきながら煙草を取り出した。

中林の手の中で火花が散って、二本目のタバコから香ばしいにおいが立ち上る。

「中、林？」

「あ？ あ、それならいいんだ。それならさ」

中林は微笑むと、煙草の先で僕の方を指した。

「最近のお前って、人の目ばっか気にしてさ、なんかお前じゃないって〜か……そのブログにしたってしそうじゃなか。本当なら直接に顔をみて解決すりゃいい話を、別人になり済ましてどうのって遠回りなことしてさ」

「それは」

「傷つかない人間関係何か、ないんだぜ」

「え」

中林はそう言うのと頬杖をついて、僕を上目づかいで見上げた。ずっとずっと人と合わせる事を拒んできたその目は、そうなるにはそれなりの理由があったのだと僕に訴えているようだった。

「俺はさ、嫌いなんだよ。匿名のやり取りって」

「でも、ネトゲやってるじゃないですか」

「あれは、あくまでバーチャル。出逢い目的の奴もいるけどさ、俺はあくまでゲームだと思ってる。あそこで活躍するのは、俺であって俺じゃない。だから、ネットでつるむ奴も、存在していて存在しない存在」

「なんだか、複雑ですね」

「単純だよ。つまり、真剣じゃない、ごっこ遊びって事さ。でも、リアルで繋がるんなら、フィールドがネットだろうが、恋人同士だろうが同じだと、俺は思ってる。で、繋がんのに匿名を使う奴は信頼できない」

「どうしてですか？」

「気持ち悪いからだよ」

中林はそう言うのと、煙草を吸いこみ、さもまずそうな顔をして煙を吐きだした。

「分が悪くなったら逃げようって気、満々じゃん。都合のいい部分だけでお互い繋がって、都合が悪けりゃ、はいサヨナラ……。仲良しゴッコするにも、けなし合うにしてもだ。そんなつもりだから、

実名を明かさないと、関係にも発言にも責任を持つとしない。そんな奴、どうやって信頼するんだよ」

「確かに」

物凄く、中林の言う事は正論で、それでいてキツかった。

ネットの匿名性についてはこれまでにならなくて散々議論されている。匿名だからこそその利点と、匿名だからこそその危険性。

実名だったら責任能力が認められるのかという、斜めからの視点。きつと、この事についての意見を聞けば、きつと十人いれば十通りの意見が返ってくるだろう。

僕は、匿名という仮面をつけるからこそその自由は、結局は実名や顔を晒してのリアルの付き合いに最後の最後で重みの差が出てしまふんじゃないだろうか……そんな感想を持っている。万の言葉より、一瞬の温もりには勝つてこないって事だ。

でも、匿名は傷つかずにすむっていう利点も無視できない。

厳密に言えば、そうでもないんだけど（ブログを炎上させられて自殺に追い込まれた芸能人の例だってあるし）、たいていの戯言レベルの場合は、気楽でお手軽に本音を吐ける便利な道具になっているのは事実なんだ。

言いたい事を言えない世の中、心の中を吐き出せる駆け込み寺の様なもの。

大きなリスクを背負わずに、簡単に本音を引き出せ、お手軽に去ったり出会ったりできる場所。

それを中林の様に全て非難できるほど、僕は強くない。

だからこそ、僕も彼女のブログにハンドルネームという匿名、いや、偽名でもぐりこみ、リアルの自分を傷つかせることなしに都合よく付き合おうとしてしまってるんだろう。

「傷つくの避けて手に入れられるものって……どれくらいの価値があるんだろつな。少なくとも、俺はこれまで傷つくの避けて来て、手に入れたものに価値何かほとんどなかった」

「中林」

中林は煙草を思いつきり吸い込むと、深呼吸の様に煙を吐き出し勢いよくそれを灰皿に押し付けた。

「でも、いいよ。今回だけは、受けてやる」

「え、でも」

「お前が、まだ根っこまでは変わってないってわかったからな」

中林はそう言うつと鞆を手に立ちあがった。

僕は何が何だか分からなくて彼を目で追う。

「どういう……」

「お前がさ、もし、俺をビジュアルで選んだんだったら、思いっきりこの場でぶっ飛ばして絶交するつもりだった」

「あ」

中林は笑う。

ぼさぼさの髪で、オタクのTシャツで、髭だらけのその顔で。

「お前は、まだ、俺とはオタク仲間だった。だから、今回一回だけは、付き合っつてやる。尻拭いも、友情のうちだろ」

「中林」

立ちあがる僕に、中林は顎で外を指す。

「傷つかない人間関係はない。大切であるほど、厄介で苦しいもんだ。だから、俺は友人は選ぶし、選んだ関係は大切にする」

「中林……」

僕の心は震えていた。胸が熱く、眼尻に涙がじんわり滲む。

中林はそんな僕を照れ臭そうに苦笑すると

「行くぞ。とりあえず、過去ログ全部見せる。それから作戦会議だ」

僕は頷いた。

そして、こう感じた。

もし、仮にこの作戦がうまく行かなくて、彼女との関係に溝ができて……。

前に行く、中林の背中を見つめる。

僕は、自分のした事を後悔しても、彼を選んだ事は後悔しないだろうと。

僕はほとほと意志の弱い人間で、信条というものをもてない男なのだろう。

自分自身をそう卑下しながらも、目の前の中林の変身ぶりに僕は溜息をついた。

あれだけ後悔しないと（心の中でだけ）豪語した僕は、すでに中林に頼んだ事をちよつと後悔し始めていた。前からイケメンだとは思っていたけど、まさか中林がここまでかっこよくなるとは思っていなかったからだ。

「セイ」にはちよつと男前すぎるんじゃない？

僕はそんなみつともない男の嫉妬で、せつかく自分の為に一肌脱いでくれた友人の想いを台無しにしないように、口の中でその台詞を噛み潰した。

ファミレスから部室に戻り、僕らは樹先輩や大森にもいきさつを正直に話した。僕はもつと彼らに呆れられるか馬鹿にされるかを予想していたんだけど、意外にも彼らの反応はその逆で「やつぱり小木だ」とむしろこんな情けない僕を歓迎しているようだった。

それは、中林が僕を許したような理由とは少しずれているようないや、たぶん全く違う所からの理由なんだろうけど、予想通りになるよりはよっぽどましだと思っ事にした。

それから、四人で僕の過去ログを読み、とりあえず、大筋の方向は決めた。

自分のずるくて卑怯な部分を人に見せるというのは、凄く勇気がある事だったけど、恥ずかしさの分が自分の卑怯さの度合いなのだと、半ば自分に罰を与えるような気分で作戦会議には臨んだ。

オフ会までの数日は、セイとしてのアクセスは部室のパソコンからのみという事になった。とりあえず、中林がセイとしてやってもおかしくないように、彼がロム（記事を読む）するためだ。

そして、リアルでの彼女への対応はと言つと……。これはついさっき、食堂でのやり取りだ。

「正義君って、パソコン良く使うよね」

彼女が断定口調で僕に尋ねてきた。

あの、絵文字が消失して以来、彼女からの風当たりが少しきつい様な気がする。それはもちろん、僕の後ろめたさを感じさせる思いすぎだって言う可能性もあるけど、セイへのメッセージでの絵文字が絶滅危惧種に認定されつつあるのは事実だった。

「え、あ、はい。使いますよ」

ここで否定するのも怪しい。樹先輩いわく、嘘をつくのがうまい奴は本当に隠したい事以外に嘘はつかないのだそうだ。つまり、僕が彼女のブログを見ているという一点以外は逆に正直でいる方がいいという事になる。

「ブログ……とか、興味ある？」

まだ午前中の学食。人の姿はほとんどない。百席以上ある食堂内には、窓際に教授と思しき中年のおっさんのしょぼくれた背中が一つ、入って来たばかりで自分達の話に夢中になっているテニス部のユニフォームを着た女子の団体が一つあるだけだ。

薄い膜を張ったように僕らの周囲を包むのはカレーとラーメンの匂いが混ざり合った空気で、約二時間後の昼食時間に備えて厨房がせわしく動いているのが想像できた。

「ブログ、ですか。泉さんは興味あるんですか？」

答えに詰まったら、質問で返せ。

これは中林の助言だ。人付き合いの苦手な彼の処世術の一つらしい。

彼女は僕の切り返しに「こっちが訊いたのよ」と少しむっとしたようだったけど、追及は止めたようだった。

MNKのブログ記事の更新も、あの日以降少し間隔があくようになっていた。

内容的には以前と大きな差はないが、更新頻度の減少も、彼女の警戒の表れではないかと僕は疑っていた。

ちなみに、僕等の関係も……。

「そろそろ行きましようか。今日、これから」

もし時間があるなら、出かけませんか？ そんな言葉を用意して立ちあがり彼女に手を伸ばした。

その僕の手が、振り払われる。

「今日はこれから講義とサークルなの」

彼女は突き放すようにそう言う。「あと、学校内でこういう事するのはどうかと思うわ」ととどめを刺すように付け足して僕に背を向けた。

そう、すっかり以前に逆戻りしてしまったのだ。キスも結局あの一回きりで、デートらしきものでも、僕はただのカバン持ちに戻ってしまっている。僕のリアクションも同じく逆戻り。彼女の背中を見つめ「じゃ、また」と彼女の耳に届いているのか定かでない呟きを口にするしかできなくなっていた。

普通なら、こんな態度、彼女に嫌われたと思っても仕方ない。そうならずにするんだのは、皮肉にもブログのおかげだ。ブログを読む限りではまだ僕の事を想う気持ちに変化ないようだった。だけれど……。

僕は彼女に拒まれた自分の手を見つめた。

何かが、かけ違い始めている。そんな気がした。

「小木。どうしたんだよ」

中林の声にハッとする。

どうやら僕はかなり長い間ぼんやりしてたようだ。

今、目の前の中林はオフ会に向けてのコーディネートチェックをしている。こういう事は意外にも樹先輩が得意とする所だったらしく、服は先輩のお兄さんから借りて来たらしい。髪もムースやジェルを使って整えると、あのむさ苦しい伸ばしっぱなしの髪も、今風

に見えるから不思議だ。髭は剃る予定にしていたが、もしかしたらこのままでもいいかもしれない。

「うん。凄くいいと思いますよ。これが「セイ」ですかあ」

いけないいけない。僕はペロツとこぼしてしまいそうになった、さつき噛み潰したばかりのはずの男の嫉妬を、再び奥歯で食い止めた。

幸い、そんな僕の男心に気付いた人間はここにはいないらしく、樹先輩は満足げに中林の変身を見つめながら誰にともなしに確認する。

「中林は中林だって事でいいんだよな」

「樹先輩の理論で行けば、嘘は最小限に……ですからね」

僕がそう言うと、大森がさも重要な案件に頷くようにゆっくりとした動作で無い顎を引いた。

そう、当初、影武者として送り出す予定にしていたのを、話し合いの結果影武者ではなく、むしろ、セイは中林だったという方向へシフトしたのだ。

目的はセイ＝小木正義というのを隠すという事だ。

そこさえ隠せたらいいのだから、他は正直に行く。つまり、オフ会に中林が行く以上、中林自身のプロフィールをいじらない方がいいという事になったのだ。どうせ同じ大学。どれだけ中林がひきこもりでも、素性が知れる可能性は低くはない。もし、偽名を使いそれがばれれば、ややこしい事になる。

ならいつそ、セイ＝中林で行こうというのだ。

「でも、中林のハンネがセイって……根拠なくないですか？ どうしてそのハンネにしたのか……そんな質問オフ会だったら普通にありそうですけど」

「そこは心配ない」

大森がボソリと言った。

僕は首をひねって中林本人を見る。いつも猫背でパソコンに向かってるからわからなかったが、結構背も高いようだ。

中林は前髪で自分の視界を隠せない事が落ち着かないのか、しきりに髪を触りながら片眉を上げた。

「あ、それはうん、心配ない」

「どうして？」

「俺の名前は『まさと』だから……」

「あ」

僕は口を開ける。

中林の名前。

なかばやし まさと。

漢字にすると聖人。

つまり、まさとの聖は、音読みで……。

「そゆこと」

すっかりモデル風のいで立ちに馴染んできた中林は、そういつてウインクすると、悪戯っぽく笑った。

「うまく、いくか？」

大森が言った。

「いくさ。俺達もついて行く」

そう、オフ会の会場には僕らも行く予定だ。

ここにきて、このサークルの部員の皆が、普段ほとんどの部室にひきこもっており、まず彼女に面が割れていないのが幸いした。

ちなみに、僕は当日変装する予定だ。

様々なシチュエーションを想定し、困った時に出すサインや、指示の合図も決めてある。

中林の恰好も決まった。

ブログでは最近オフ会の話題でもちきりで、現実では彼女に警戒され、もう引くに引けない所まで来ている。

「作戦も、武器も整った。あとは、やるだけだ」

中林が表情を改め、鏡の中の自分に言い聞かせるように呟く。

そのとおりだ。もう、やるしかないんだ。

僕は、緊張に何度も握り直される中林の拳を見つめながら祈るよ

うな気持ちで頷く。

運命の日は、目の前だった。

僕らの作戦 2

明日のオフ会は大阪で行われる事になっていた。

彼女のブログが属しているコミュニティのオフ会で、共通のつながりと言うと、海外に興味ある人や帰国者と言う事だ。

オフ会に参加表明している面々は僕がネット上で把握するだけで十二名ほど。オフ会に参加した事がない僕に、それが多いのか少ないのか、または妥当な人数なのかはよく分からなかったが、これ以上多いと厄介だなあ言うのが正直なところだった。

理由は、もちろんセイこと中林の人みしりだ。

奴は大勢の人間の中にとくと極度の緊張で、挙動不審を通り越し、気分不良になってしまう。ちょうど、入学式でもそうだった。

本人も二十人そこらが限界。時間も十分ほどで勘弁してくれと言っていた。始めはこのまま中林でいくのはどうかとも思ったし、セイ役を大森か先輩に変わってもらおう案もない事はなかった。けど、中林はセイ役をする事に関しては譲らなかつた。

最終的に、長時間になればなるほどぼろも出やすくなるだろうし、用事のでに顔だけ出した事にしてもさして不自然じゃないだろうと結論付けて、彼の出番は十分限定のものとなった。

で、明日の出発に備え、僕らは今日は早めの解散をして各々自宅に戻ったのだが……。

僕はパイプベッドに身を投げ出すように仰向けに寝転がった。

入学した時に買って自分で組み立てた簡易ベッドは、名前に忠実に簡単に軋む。視界を埋めた築二十年のアパートの天井には何のものかわからない染みと、その染みの中で一か所だけ人の顔に見えて気持ち悪いからって貼ったラブレイドのポスターがあるだけだった。ライダーにベルトがあり、レンジャーに口ボがあるように、僕にはブログがあるはずだった。

でも、変身後のセイになったのは、僕ではなく、中林だ。
中林の姿を思い出す。

誰かに似ていると思ったら、平成ライダーの四作目の主人公に少し似ているんだ。まるで、なくしていたパズルのピースがひよっこり出て来て綺麗にハマったような感覚に、僕はぼんやりと溜息をつく。

そうだよな。主人公って言ったら、あんな風にイケメンって決まってるよな。

僕は再び頭をもたげ始めた惨めな嫉妬を蹴散らすように頭を振ると、じっと眼を凝らしてラブレイドのポスターを見つめた。

そして、すぐさまその定義を否定する。

僕がラブレイドを好きになった理由。それは、ラブレイドが強いからでも、男前な生き様だからなわけでも、ましてやイケメンだからってわけでもなかった。いや、要因の一つと言えなくもないけど、一番大きな理由は……。

変身後のラブレイドの隣にポーズを構える変身前のラブレイドの姿を見る。

僕は小さく息を吐いた。

ラブレイドの変身前の姿。それは冴えない小柄ないじめられっ子だ。貧乏で、見た目もぱっとしない高校生。学校では海部みたいなやつにいじめられていて、両親はいない。三人の兄弟をバイトで養う苦学生。友達もヒロインのきらりと最後に裏切る幼馴染の相棒以外にはいない暗い奴。それが彼の正体だった。

最近の特撮ヒーローは揃いも揃って、イケメンで、中には環境や才能にすら恵まれている奴もいるけど、僕のヒーローはそれとは真逆の人間だった。

今のヒーローだって、見ていて痛快は痛快だし、やっぱり昔に比べてCG技術も特撮技術も格段に上がっているから見ごたえはあるけど……なぜか僕は、情けない正体を持ち、親友に裏切られ死んでしまうこのヒーローの方が好きなんだ。

カーテン越しの日が陰り、夜がやってくるのを告げている。耳に聞こえるのは家路を急ぐ子ども達の声だ。

身体を起こすと、すっかり見渡せてしまう狭い僕の部屋には、ぎつしりと特撮の本やDVD、フィギュアにポスター。その中で、一部だけ異質な空間があった。鏡の前だ。

姿見のその鏡の前には、何着か新しい色をした服が掛けられていて、男性用のファッション雑誌と整髪剤が置かれている。

全て僕の持ち物だし、全て僕が選んで買って来たものだけ……。鏡の中の自分と目が合った。

チビで凡庸な顔のくせに、めいいつぱい背伸びした格好の僕。

また、中林と僕を比べる。

ベッドの反対の壁に添えられた机の上のパソコンを見た。

ラブレイドも、正体は格好悪くても、変身後はカッコいいもんな。こんな事になったけど、やっぱりセイは僕じゃなくて中林で良かったのかもしれない。

薄暗い部屋。もう、電気をつけないと自分の顔もハッキリとみられないほどになって来ている。それでも僕は電気をつけるのを躊躇い、鏡の前に立った。

彼女の言葉を思い出す。じかに聞いた言葉ではなく、ブログで知った彼女の言葉。

「こんな、僕が、かつこ良い？」

彼女のブログの中でたびたび見られたあの言葉。

嘘だろ。僕は笑う。あからさまな自虐の笑みに、薄暗い僕の姿は醜く歪んで見えた。でも、本当に皮肉にしか聞こえない。こんな、チビでそこらにいるような僕の、どこがカッコいいって言うんだ。っていうか、彼女は一体……。

「僕のどこに惚れたんだ？」

わからない。これだけは、あのパソコンでも答えを持っていないし、彼女のブログでさえも教えてくれない。時折昔何かあったような事をほのめかしはしていたけど、僕には覚えのない事だった。

心の奥の方で燻ぶる、重苦しい感情に、僕は苦笑する。いけない、そう思いつつ、自分を好きになれない自分の心が汚く歪んで、嫉妬と卑屈さと溶け合い始めようとする。

馬鹿だ。

形になりかけの感情を否定しようと僕は鏡の中の自分を拳で叩いた。でも、否定するほどにその形がはつきりしていく。

冷静になれ。

自分に呼びかける。

彼女はただただ僕の事を想ってくれているだけじゃないか。

中林は単純に僕の事を想って協力してくれているだけじゃないか。大森も、樹先輩も……。

厄介事を作って、皆に泣きついたのは僕自身だ。僕が望んで僕が引き起こしたのが今の現状で、そしてそれは望んだように展開してきた。

なのに、こんなに不安なのは、どうしてだ？

鏡のなかの精彩のない自分と、中林が重なった。

天と地ほどの差。変身前と変身後の差……。

夜が音もなく僕を包みこもうとしていた。

オフ会の会場へは始め新幹線で行き、新大阪で降りてからJRで大阪駅まで出た。

大学のある街とは違い、さすがに日本の第二都市。都会という感じがした。ただ、東京との違いはどこかわざと洗練されていない感じがする所だ。

照れがあるのか、もともとそういう気風なのか、流行の先の方にはいるはずなのに、東京の様に「私が流行のお手本ですよ」と言う顔を見せようとしない。若者向けの店の一つ筋違いの場所に立ち飲み屋が並んでいたり、店も気取った雰囲気を出すよりも入りやすさを重視したような作りのものが多いように感じられた。

もちろん、それは田舎から出てきた特撮オタクの一感想でしかないのだが、それでも僕には東京よりは肩の力が抜けるこの土地の方が好きになれそうな気がした。

オフ会までの時間に余裕があったので、待ち合わせを駅前のヨドバシカメラの一角に決めてバラける。

樹先輩はちゃっかりとこの日に大阪の紀伊国屋書店であるグラビアアイドルの写真出版記念握手会を押さえていたし、大森はどこかにある、まんだらけという店に行く予定だそうだ。

すっかりイケメンのセイになった中林と僕は、なんとなく取り残されたような気分になって、とりあえずゲーセンの方へ向かうことにした。JR大阪駅のすぐ近くに巨大な観覧車を屋上に乗っけているビルがあり、その隣の映画館を入れているビルの裏手の商店街にゲーセンが多いのだと中林は言っていて、僕は言われるがままについて行った。

行きたい場所が全くないわけでもないけれど、この溢れかえる人の中に中林を独りにするのは、迷惑をかけている手前無責任な気がして、僕は離れるのを躊躇ったのだ。

本当に、すれ違う人の量が、多い。

僕の田舎は島根の町だ。子どもより年寄りの数が圧倒的に多く、その年寄りの数より畑の数の方が多いような場所だ。

大学のある街は僕の地元よりは都会に思えていたが、やっぱり、大阪という町の巨大さは比べようもなかった。

こんな大勢の人が、祭りでもないのに一斉にこの場所にいる。それが奇妙に思えてたまらない。

格好も、性別も、この場所に目的もそれぞれ違う人間が、偶然とはいえ、同じ場所に集まっている。

ネットと少し似ているような気がした。

中林の半歩後ろを歩きながらぼんやり考える。

JRの改札を離れ、とおりゃんせの音楽が鳴る交差点（カウントダウン機能があり、青になる前に皆が一斉に歩きだし、赤になっても渡ろうとする人がいるのには驚いた）をすぎ、天井の低いビルに入ったあたりだ。

中林の説明によると、このビルを通り抜けた先に観覧車のビルがあり、その裏が目指す場所の筈だった。

正面に屋台の花屋が見え、左手に動く歩道が見える。噂どおり、動く歩道の上を、やはり大阪の人たちは歩いていて。

「もう少しだからな。ってか、マジ、早くここ抜けてえ」

中林が少し青い顔で僕の方を振り返って、愚痴を零した。

彼がこんな人混みの中を歩くのは、きつと一生のうち何度もある事ではないのだろう。早くも人酔いを始めているらしく、彼はしきりにゲームの電子画面を恋しがる言葉を呟いていた。

「みんな、他人なんですよね」

僕は百貨店のショーウィンドーを横目に中林に言うでもなく、口にした。

中林は片眉をあげて「はあ？」と溜息様な声を漏らす。

「あ、いや。当たり前のことなんですけど。不思議だなあって、思ってた……」

人の流れに乗ってそのまま外に出た。

また、交差点だ。そして、また、人混みがその先にあった。

こんなに、たくさん人間がいて、こんなにたくさん人生がある。それぞれの日常があつて、それぞれの歴史がある。そのなかで僕らが関われるのはほんの一握り、いや、一つまみの一瞬の間だけだ。

ブログも一緒。ネット世界で星の数ほどある誰かの一瞬に、こちらの世界が一瞬……まるですれ違う見知らぬ人と目が合う、そんな偶然のような感じで重なり合う。

それが、ただ一時のすれ違いになるか、恋の始まりになるのかは別として。

「中林」

僕は大量の他人とすれ違いながら、自分達の居場所を探し歩き続ける。

中林は返事をせずに、人の姿を自分の視界に入れまいとするように俯きながら歩いていた。

「リアルとネットと何が違うんだと思いますか？　僕は、どうしても彼女とリアルで向き合えなかつたのでしょうか」

中林は何も答えない。

映画のポスターがいくつか貼られているその前を通り過ぎる。すぐ近くにエレベーターがあり、そこからたくさんのカップルが降りてきた。もしかしたら、このエレベーターの先に映画館でもあるのかもしれない。

何とはなしに見てみると、地方の映画館とは違い、幾つもの新作映画が上映中らしかった。

どのカップルも顔を見合わせ、楽しげだ。とはいえ全員が全員、相手に素顔を見せているなんて限らない。女の子は十分着飾っている子ばかりだし、男だってそれなりの恰好をしている奴ばかりだ。映画の感想を述べあっているにしても、自分の意見を押しこめ相手に合わせているだけかもしれないし、もしかしたら映画すら興味じ

やなつたかもしれない。

それでも、どの組み合わせも楽しげだ。

リアルだって、ネットと変わりないんじゃないか。

僕らも、そうだった。彼女も仮面をかぶり、僕もオタクを必死に隠してた。

でもそうやって取り繕ってでも維持したい関係だったし、そういう隠し事の全てを悪しとするほど僕も子どもじゃない。

「リアルで訊けば、確かに、こんな面倒に皆を巻き込まずにんだとは思いますが。でも、ネットでお互いが素性を隠しあつて、本音を引き出すのと、リアルで駆け引きするのと、そんなに違いってあるのでしょうか？ 僕にはわかりません。わかりませんが……あんな事をしてしまって、やっぱり、後ろ暗いです」

中林はその映画館のあるビルを抜け、ようやく目当ての商店街に伸びる横断歩道までたどり着くと、足を止めた。

信号が赤だった。

対岸にはやはりまた、人混みだ。

「ねえ、聞いてるんですか？」

ずっと黙りこんだままの中林に、僕は少しいらだつて声をかけた。隣に並ぶ。猫背の中林は、部屋で見たときほど大きくは見えない。

「なあ、小木」

「はい？」

耳をそばだてないと、周囲の騒音にかき消されそうな声だった。

中林は両手を乱暴にジャケットのポケットに突っこむと、顔を少しだけ上げた。信号機を睨む。正確には、対岸にある人混みを睨んでいるのかもしれない。とにかく、中林は視線の先にあるものを、暗い色の瞳で凝視していた。

「前から気になってたんだけど、どうして正義の味方って、正体を隠すんだ？」

「え？」

「正しい事をするんなら、堂々とそのツラを晒せばいいじゃんかよ。でも、どうしてしないんだ？」

「それは……」

信号が青に変わる。

一斉に人の山が動き出す。それは一つの塊にも見えるし、てんでバラバラのつながりを持たない孤独な粒が、何かに吹き飛ばされたかのようにも見えた。

僕たちはその流れに取り残された形になって、視線を合わせる。

中林は暗い表情のまま笑顔に似た形に、その綺麗な顔を歪めた。

「正しいから晒せるわけでもねえし、晒せるから正しいわけでもねえ。そう言う事なのかも知れねえな。ただ、俺には、匿名で仮面を被った正義のヒーローに覚悟を感じることはできねえよ」

「中林」

「こうやって、良いも悪いもてめえの面を晒して動いている一般人の方が、いつそ清々する」

中林はそう吐き捨てる様に言うと、点滅し始めた信号を渡り始めた。

僕は渡るべきかどうか迷って、周りを見回す。

人の流れは五分五分。渡ろうとする人と立ち止まる人、それぞれだ。

どうしよう。

迷う間に中林の背中は一人で向こうへを渡っていく。

どうしよう。

行かないと取り残される。

どうしよう。

でも、そろそろ信号が赤になる。赤で渡ると人に迷惑をかける。

どうしよう。

僕をせかすように点滅の速度が速くなる。同時に焦りも募り、僕の足元は行ったり来たりを繰り返す。

どうしよう。

行かなきゃ、でもやっぱり人に迷惑になるんじゃない……。

僕は、どうしたら……。

- 信号が赤に変わった。

ずっと線を引かれたように、先に進めたものと、進めなかったものの姿がハッキリと分けられる。

中林は対岸の方へ渡りきっていて、僕はまだ、同じ場所に立っていた。

中林が道路を隔て僕の方を振り返った。

待って、と言おうとした僕の口からは声が出なかった。やっぱり、周りが気になったからだ。

周囲には全く知らない人の顔、顔、顔。僕を見ているのは、向こう側にいる彼だけだ。なのに、僕は、彼に声を上げることができなかった。

車が動き始める。無理に渡ろうとする人間を、容赦なくなぎ倒そうとする無慈悲な流れに、僕はなすすべもない。

中林が、一瞬寂しそうな顔をした、気がした。

「あ」

そして次の瞬間、僕が人ごみの中を一人で歩くのは無理だろうと思っていた彼は、僕を置き去りにしてその中に姿を消した。

結局その後、僕は次の青信号を待ってゲーセン街に飛び込んだんだけど、中林の姿を見つucker事は出来ずに、一人で大阪の町を彷徨う事になった。

最後、僕をみた中林は怒っているようにも、憐れんでいるように

も見えた。でも、そのどちらかだとしても、僕にはその理由が分からない。

なぜ、顔を隠すのか……彼が口にした言葉がヒントの様な気がしたけれど、やっぱり僕にはこれといった答えを導き出す事は出来なかった。

待ち合わせの場所には、僕が一番先についた。行き先もなく、三十分以上も前からヨドバシカメラでうろついていたんだから、当然といえば当然だ。

次に、目じりをめいいつぱい下げた樹先輩が現れ、僕にいか握手したグラビアアイドルの手が柔らかかったかの熱弁をふるった。

「こう、もうこの世のものとは思えない柔らかさなんだよ。おっぱいも大きくて、握手したらおっぱいも一緒に揺れちゃってさ。でも、その子おっぱいの割には童顔で、唇がこう、むっちりしててさ。おっぱいもきつとあの手の様に、いいや何倍もやわらか〜」

「何回『おっぱい』っていうんですか」

「いや、女はおっぱいあってなんぼだろ。おっぱいは、いいぞ。おっぱいは世界の宝だ。いいか、人間、生まれてすぐにおっぱいで生かされるんだ。おっぱいがないと人間は……」

「もう、いいですよ」

おっぱいを連呼する先輩に辟易して来た時、現れたのはリュックを背おい、両手にパンパンの紙袋を抱え、額にバンダナを巻いた、これぞオタクの見本、というような姿の大森だった。

大森は夏でもないのに汗だくでふうふういいながら、タンクトップから突き出た肩を上下させ、どっかとその紙袋を足元に置く。

「大人買い、サイコー」

「何、買ったんで……」

みると、紙袋には大量の同人誌やアニメのフィギアにポスターがぎっしり詰まっていた。

僕はその量の凄まじさに思わず言葉を無くす。樹先輩はそんな僕をよそに、しゃがみこみ、美少女フィギアを取り出すと「生の方が

いいけど、こういうのもわるくないね」と大森と盛り上がり始めた。こんな公衆の面前で……恥ずかしくなって俯く僕に、厭味の様に盛り上がり声をかけてくる二人。

おそろおそろ視線を上げ周囲を見てみる。幸い、僕らを見ている人間は一人もいなかった。どうやら、都会では、っていうか、このヨドバシカメラ周辺では僕らの様なオタクは珍しくない人種らしい。もし、これが大学の近くの駅での待ち合わせなら目立つ事間違いない。しだっただろう。

妙な安ど感に、一息ついた時だった。時間は約束より五分過ぎたあたり。ようやく中林が来たのだ。

大勢の中にも、やつぱりちよつと抜きんでているかっこよさだ。歩く姿も心なしか猫背ではなくなっている。

そんな中林は遅くなったこと先輩を大森に謝ると、改めて僕の方を向き直った。

無然とした表情で何かを突き出してきた。見ると、たくさん力ードだ。

「なに？ これ」

「土産。俺はいらぬから」

受け取る。一目見て、最近流行っているガンバライドって言う、仮面ライダーのゲームで使うカードだってわかった。ざっと二十枚はあるだろうか、中を調べるとレアカードも何枚か入っていた。

「どうしたんですか？ これ」

中林はゲームおたくと言っても、カードゲームは専門外の筈だ。なのに、どうして？

「もらった」

中林はそれだけ呟くと、やや落ち着きのない動作で煙草に火を付けた。

気まずい沈黙が僕らの間に降りる。

「そついや、お前たち一緒じゃなかったんだ」

饒舌になっている先輩が空気も読まずに僕らに問いかける。僕は

困って手の中のカードを見つめた。V3のカードだ。どういっても
りで彼が僕にこんなにカードをくれたのかわからない。一体、どう
言う意味なのか問いただきたい気持ちは強かったが、むすっとした
表情のままの彼にはなんだか聞きづらかった。

「別行動ですよ。一緒に行動しなきゃなんねえ決まりもないでしょ」

中林はそう言うと、わざとらしく腕時計を見て見せた。

「そろそろ行くか」

「お、おお」

大森が唸るように頷く。

中林に聞きたい事がたくさんあった。

どうして一人で行ってしまっただんだ？

このカードはどうやって手に入れたんだ？

どうしてそれを僕にくれるんだ？

僕の事を怒っているのか？

怒っているのならどうして？

でも、やっぱり僕は何一つ訊く事は出来なかった。彼女の時を同
じで、聞くのが、怖かったんだ。

そして僕らは不協和音を鳴らしたまま、いよいよ決戦の地へと赴
いたのだった。

オフ会の会場は、幸い店の貸し切りにはなっていないかった。それについては前日に先輩が調べて置いてくれたので、まあ、作戦通りと言えばそうなのだが、ホッとする。

僕らの作戦はこうだ。

初めに中林に大森の携帯を預けておく。着信音はもちろんサイレントモードだ。そして先に僕らが三人客として入り、団体の予約席の近くに陣取る。

続いて、オフ会のメンバーの入り具合をチェックし、美奈子さんが入ってきたあたりで中林に渡してある大森の携帯に僕が電話する。それから携帯は通話状態で維持、会話が聞こえる様にしておく。

そして、中林が入店。美奈子さんの向かいの席にさりげなく座る。中林の人酔いが始まる前に、声をかけ、名乗らせ、少し話したあたりで今度は樹先輩が中林の携帯に電話する。

中林はそれを取り、用事ができたからと退席。

これでミッションコンプリートってことになる。

ちなみに、中林がもう限界の時は左手で後頭部をかく。

バレそうな時はグラスを倒す。

緊急事態の時はトイレへ避難。

僕らからの指示は中林の携帯へメールする事になっていた。作戦の最終確認をしている間に店の近くまで来た時だった。

急に中林が足を止め、右手にあった書店をじっと見つめる。

「どうした？」

先輩が肩越しに振り返ると、中林は軽く手を振り

「いや、俺、ここで時間つぶします。まさか、一緒に店に行くわけにもいかないでしょう」

と答えた。場所的には目的地手前五百メートルといったところだ。中林の表情は少し硬かったが、これから見知らぬ人間に人見知り

が飛び込む事を考えると、無理からぬことのように思えた。

「わかった。ま、ちよつと緊張解してから、来いよ。ちゃんと合図するからな」

先輩が自分の携帯を掲げて見せる。中林は短く返事だけをし、踵を返した。

「じゃ」

僕にかけられた声なのはわからなかった。それでも、僕はその中林の声に振り返る。緊張しないで頼むぞ、そんなつもりで。

待ち合わせの場所から一度も合わなかった目が、あう。

そして僕ははつとした。

中林は微塵も緊張なんかしていなかった。

ちよつと皮肉めいた笑みを口元に浮かべ、むしろ彼の方が僕に「緊張するなよ」とでも言っているかのような顔をしていたのだ。

違和感を覚え、何かを言おうとした時には、もう、中林の姿は書店の中へ消えていた。

「小木？」

大森に呼ばれ、僕は慌てて取り繕う。

なんだ？

どうしたんだ？

あの交差点で別れるまで、あんなに緊張していた中林になにが……。僕は先輩に言われて変装用の野球キャップをかぶり、スタジアムジャンパーを羽織り、応援用の球団ロゴの入ったバットを持ち、樹先輩いわくどこからどう見ても阪神ファンに変身しながら、拭いきれない違和感に、もう一度だけ振り返ったのだった。

店は創作イタリアンの店だった。

時間がまだ夕食よりは少し早い事もあり、僕らはすんなりとテーブル席に案内してもらおう事が出来た。

古い木の感触に味がある椅子に腰を下ろし、ざっと店内を見回した。

ランプの明かりを意識しているのか、照明は少々オレンジがかつていて仄明るいといった感じだ。テーブルや店内の装飾もモウツド系を基調にしている、所々にイタリアを連想させる赤や緑や白の置物や、ニンニクやトウガラシをリース状にしたものが吊るされている。

かすかに漂うのはんにくとトマトの匂いで、食欲を直接刺激した。

テーブルの配置はちょっと変わっていて、中央に大きなスペースがあり、その周囲の壁に沿うように他の四人掛けの席が配置されていた。

そして、今はその中央には十二人掛けのテーブルが二つ備えられている。パーティー用の場所らしいが、四人掛けのテーブルを三つ合わせて置いてあるところからすると、普段は四人席を四つほどそのスペースには用意しているのかもしれない。

その会場にはすでに幹事と思しきアジア系の女の子二人がせわしく歩き回っていた。どの席からも中央のテーブルは観察可能なようなので、僕らは入口からもトイレからも一番遠い席に陣取らせてもらった。

オフ会開始まであと十五分。僕らが席に着いたのと同じころに、立て続けに数人の男女が店内に入ってきた。

「どうする？」

「どうするって、彼女の登場を待つしかないですよ」

僕は緊張のあまり、思わず大森の言葉にきつい返答をしてしまう。しかし、大森は気にする様子もなく

「いや、注文だよ。今日はお前の奢りなんだよな」

大森はそう言いながら、食い入るようにメニューを眺めていた。よく、こんな状況で食べる気になるよ。

僕は唇を突き出すと「そうですよ」とだけ答えて、自分に注文の意志がない事は言わなかった。どうせ、今のも何かのついでに言っただけだろう。

案の定、先輩と大森はその後は僕の夕飯の心配なんかせずに、めいっばい高そうなものばかりをオーダーしていた。

くそ。本当に、彼らは手伝う気で来たのか？

僕は心の中で少々不安になり、三杯目の水に手を伸ばした大森に訊いた。

「あの、確認で聞きますが、携帯はサイレントにしてくれてるんですよね」

「もちろん」

大森は大きく頷くと、ぽんつと何かを机の上に置いた。

「ほら、なってるだろ。サイレント」

それは最新機種の携帯に、美少女アニメのシールを貼ったもの。待ちつけも可愛いメガネっ子だ。何とも大森らしい携帯って……

「ええ！？ 大森！ どうしてお前が持ってたんだよ！」

僕は思わず立ち上がり、大森の襟首を捕まえた。

大森はキョトンとして

「どうしてって、俺の携帯だし」

「いや、俺のって」

勘弁してよ。大森の携帯は中林に渡しておくんじゃないのかよ。

僕は力が抜けて、そのままペタンと座り込んだ。そこでようやく大森は自分のミスに気がついた様で「おお」なんて毒にも薬にもならない声を零した。

聞いたことあるようなないようなイタリア風なアコーディオンの音楽が、やけに陽気で、僕は小馬鹿にされているような気分になる。「ま、まあ……中林のを通話状態にすればいいんだし」

樹先輩が取り繕うように僕をいさめるが、僕はじろりとそれを睨んだ。

「それなら、中林と連絡が取れなくなるじゃないですか。どうやって撤退のタイミングを作るんですか？」

撤退は先輩が中林の携帯に電話を入れる事になっていたはずだ。

もともと通話状態なら、着信を鳴らす事なんかできない。

「それはそうだけど」

樹先輩は困ったような顔をして、腕を組んだ。何やら必死に考え
てくれているが、僕にはもうわかっていた。僕らが出来るのは……。

「中林を信じるしかないね」

やっぱり。

僕らの作戦は、第一段階どころか実行前にあえなく破綻の憂き目
にあってしまったようだ。

とたんに心細くなって、大森に押しつけるように彼の携帯をつき
返すと、そつと帽子の鍔を下げ、会場の方に目をやった。

会場の席は二十〜三十代の様々な国籍の人間で埋められ始めてい
た。

もうすぐ、ここに彼女が……。ただでさえ人見知りの中林が、外
国人の多い中でうまくやれるだろうか。不安が不安を呼び、さらに
大きな不安となって僕の足元にぽっかりと穴を空け始める。しっか
りと踏ん張らないと、って思うのに、力が入らない。

「大丈夫だって。小木。ちょっと計画狂ったくらいで、崩れるわけ
ないじゃん。ただ、中林が『セイ』って名乗るだけなんだぜ？」

樹先輩が慰めるように、いつの間にか爪を噛み始めていた僕の肩
を叩いた。

確かに、確かにそうなんだ。

遠征までして、変装して、なんだか大がかりな気になってるけど、
要はそれだけ。そう、それだけの事。

うまく行かない事の方が難しい。

「そうですよね」

僕は膝の上で握りしめていた自分の拳に息をつく。その時、大森
の声がした。

「来た」

「え？」

思わず何も考えないで顔を上げてしまった。

その僕の不用意な視界に飛び込んできたものに、息をのむ。

「ええ？」

僕は目の前の光景が俄かに信じ難かった。

何度も瞬きし、目を凝らす。

どうして？

なにがあつた？

何故？

僕の頭の中にたくさんの疑問符が飛び交い、疑問符の数が増すほどに混乱が極まってく。

「おいおい。小木。これって……」

樹先輩も驚きに声をなくしているようだ。

大森も、唸り、鼻息を荒くしている。

そうしている間にも、僕らの目の前では想定外の光景が展開して
いて……。

「どうなってるんですか」

僕はひきつる自分の口元を押さえながら、帽子の影からそっと奴
の横顔を見た。

心臓がもはや言う事をきかず暴走しているし、喉は締めあげられ
たような痛みを感じるほど干上がり、頭の中は真っ白だ。

それでも、僕は今、僕の目に映る、目の前の光景を理解しようと
必死になって凝視した。

でも、どうみても信じられない光景で……。

樹先輩が乾いた自分の薄い唇を舐めると呟く。

「まさか一緒に登場するなんて」

「しかも、すでに仲よさげだ」

その声で、僕はようやく、現状を把握する。そして昨日から、い
いや、中林がセイへ変身した時から感じていた漠然とした不安が何
かを悟った。

そうだ、これは僕が恐れていた状態。

僕の正体がばれるよりも、この作戦が失敗するよりも、もっとも

つと最悪な展開。

そう、僕が恐れていたのは、中林に彼女を取られること。

そしてまさに、今、それが目の前で具現化したかのように、腕をくんで恋人同士の様に中林と泉さんが囁き合い店に入ってくる光景が展開しているのだった。

見たくないのに、見てしまう。

そんな時つて誰にでもあると思うんだ。

臭いつてわかってて臭いを嗅ぐ。

いけないとわかっててその行為に走る。

それらの間に多少のズレはあれど、とにかく、頭は不快だ、禁忌だと感じていいる事象について、興味を引かれるのは一体どういうこと見なんだ。

僕は半ば、人間の本能に対して怒りを覚えながら、二人仲良く並ぶ背中を見つめていた。

かれこれ、オフ会が始まってもう三十分も経つ。

つまり、中林自身が言っていた限界時間とはとくに過ぎているつていうのに、奴自身が動こうとはしていなかった。

「まだ、繋がりませんか？」

大森が僕をちらちら痛々しげに見ながら先輩に訊ねた。先輩は先輩で、たぶんすっかり顔色をなくしているのであろう僕の横顔に視線を送りながら、わざとらしく「おかしいな」と何度もつぶやきながら答える。

「電波、悪いのかな」

そんなはずない。

さつきつき返し、まだテーブルの上に乗ったままの大森の携帯を見る。開きっぱなしのそれは、電波がバリッ、つまり先輩の言うことは僕に対する慰めにすぎないのだと語っている。

オフ会は自己紹介を始めていた。

中林と彼女は店に入って来てから今まで、片時も離れようとはしない。常に体のどこかはくつつけあい、会話をするときには互いの耳元で囁き合っている。

僕らに背を向けた状態で座っているから、表情まではわからない

けど、さつき向かいに座っている他のメンバーに冷やかされていたくらいだから、中林もまんざらでもない顔をしているのかもしれない。

その時に、一瞬だけ見えた、彼女の横顔を思い出す。

僕の見た事のない笑顔だった。僕と一緒にいる時に見せる、どこか遠慮したような、どこか作られたような、そんな笑顔じゃなくて、心から安心し、思わず零れたに違いない笑みだ。

僕の心の殻の内側に、何か熱くて痛みを覚えさせるような、どろっとして粘着質で、それでいてじわじわ増殖し続ける何かが、べっとりと張り付いているような感覚がした。

「もしかしたら、向こうの充電が切れたのかも知れねえし。きつと、あれは演技だよ。気にするな、小木」

先輩が僕の背中を叩くように声をかけた。

大森も「ピザが冷えるから食べよう」なんて柄にもなく気を使っている。

でも、そんな彼らの態度が優しければ優しいほど、僕の立場は削れていくような気がした。

自己紹介の番が彼らに回ってきた。彼らは二人で立ち上がる。会話までは聞こえない。あの、忌々しいアコーディオンの馬鹿の様に陽気な音楽が邪魔をしていた。どつとメンバーに笑いが生まれたように見えた。中心にいる二人は顔を見合わせ、再び皆の方を見ている。なにやら、どちらかが言った言葉に、盛りあがったている様子だ。中林は肩をすくめ頭をかく。彼女がその仕草をいさめ、再び笑いが起こる。

何が一体面白いのか理解不能だったが、どうやら自己紹介は成功に終わったようだった。

また、二人同時に席に着いた。

「小木。大丈夫だった。ちょっとビビったけど、あの中林だぜ？」先輩が見かねたのか、僕の肩を強引に引いた。僕の体はたわんだゴムの様に先輩の方を向かされる。

視界が、やけに歪んでいた。先輩の顔も、大森の顔もふやけて見えた。慌てて目線を下げ、いつの間にか膝の上で握りしめていた拳を見ると、手の甲に雫が落ちた。

僕は、泣いていた。

「小木。大丈夫だって」

恥ずかしさと悔しさと不安で、僕は言葉を見失っていた。

何を声にしても今は形になりそうにもないし、形にできたとしてもあの中林を疑い恨む声になってしまいそうだ。

あの、中林が……そんなはず。

僕は懸命に自分に言い聞かせる。

中林は一番の親友なんだ。お互いを認め合って、お互いを信頼している。中林はリアルな女に興味ないって言ってたんだ。ゲームばかりして、目を合わせて会話するのに一年かかる。中林は人みしりの、人間不信で……中林は、中林は……。

僕は頭を振った。駄目だ。やつぱり、あんなのを見せられた今、僕はどうしても奴を批判してしまう。僕が招いた事の尻拭いを僕が頼んだって言うのに、奴をやっかむような事しか浮かばない。

僕は、こんな僕が嫌だったし、なにより、この現実から逃げ出したかった。

『逃げるな。立ち向かえ。逃げるのは、この、最悪な現状を肯定するのと同じだ』

ラブレイドの声がする。

立ち向かう。どうやって？

僕の頬が痙攣していた。もう一度顔を上げる。目の前に飛び込んできたのは……。

「？」

僕は目を瞬かせた。

「お、つぱい？」

「なあ、小木。ちょっとおっばいでも見て落ち着け」

僕の目の前にあったのは、先輩の広げた写真集と大森のフィギアだった。

「あ、あの……」

「いいから、何も言わずにおっばい見とけ。男って言うのはな、たいていの事ならおっばいで解決できるんだ」

「は、はあ」

果たしてそうだろうか。いや、そんなはずないんだけど。

僕はそう思いながらも、なまめかしいポーズをとる二次元の女の子の向こうにいる先輩の神妙な顔と、三次元だけど動かない女の子の向こうに見えた微妙に男前な顔の大森を見比べた。

二人とも、必死に僕を励まそうとしてくれているのだけはわかって、僕は少し気持ちが軽くなった気がした。

だよな。

ここで中林を疑って、泣いていたって何の解決にもならないよね。思わず笑みがこぼれる。

「ほれ見ろ。おっばいに救われたじゃないか。おっばいを甘く見るなよ」

「そうだ。なめるな」

二人が真剣な顔をして僕の前からそれぞれのお宝を引いた。

僕は大森の言葉を復唱しようとして、よその人が聞いたら不穏な言葉になるのに思い至り「そうですね。侮れませんか」と笑いをこらえながら言いなおし、一つ深呼吸した。

確かに、おっばいのおかげかどうかは置いておいて、少しは気持ち落ち着いたような気がした。

大丈夫。

中林は中林だ。

大丈夫。

僕は息を吐くと、もう一度彼らの方を見ようと顔を上げた。

その時だ。

「お！ 中林からメールだ！
樹先輩の声でした。」

僕の猜疑心 2

振り返る。

先輩の掌の中の画面に新着の表示とともに、中林の名前が点滅していた。

男三人、額をすり合わせてその画面に見入る。
そこに記されていたメッセージは……

中林聖人

《無題》

S O S

「なんだ、これ」

先輩が拍子抜けしたような声を出した。

大森もない首を捻り「ううん」と唸る。

でも、僕にはわかった気がした。

やっぱり、中林は中林だったんだ。

「先輩！ 今すぐに中林にコールしてください」

「え？ だって、お前」

「もう、終わりって事ですよ」

だよな？ 僕は中林の背中を見つめた。

奴の肩に彼女の頭が乗っている。これ以上ないってほどイチャツいているが、今はそんな事気にしている暇はない。

中林がメールを寄こしてきた。

その方が大事で重大な事なんだ。

「そうなのか？」

先輩は訝しながらそのまま携帯のボタンを押し、自分の耳にあてた。「お、繋がった」と声を漏らし、僕らは中林の方を一斉に熱い

視線を送る。

中林の携帯が鳴った。

ドラクエのオープニング曲だ。

彼女が離れる。中林が周囲に手をかざし、謝るそぶりを見せて横を向き、電話に出る。

「お、中林。俺だ。樹」

先輩の声が出た。中林が何か話している。先輩は「ん？」。「ああ」「それで？」なんて何故か半分怒ったような投げやりな返事をする。と「わかった。じゃ、出て来いよな」と言ってから切った。

中林の方も、電話を切り、ポケットに自分の電話をねじ込む。

「中林、なんて？」

大森が身を乗り出した。山が、動くようだ。僕も、無言で先輩を見つめる。しかし、先輩は肩をすくめ

「いや。別に何も。とにかく、もう切り上げ、撤収だつて」

そういつて、僕の肩に手を置いた。ぶつくさいいながら片付け始める大森を見ながら、僕も撤収の準備を始める。

とにかく、彼女には気づかれずに済んだようだ。現状把握はこれからすればいい。あれだけの場面を見て置いて、泣くことしかできなかった自分への言い訳をしながら鞆に手を置く。

先輩の声がすぐ近くでした。

「ちゃんと、自分でどういいう事なのか、訊けよ」

ドキリとした。

僕は思わず先輩の顔を見返す。間近で見る先輩の顔は、やっぱり骨と皮だけで、血色も悪かったけど、目だけは鋭かった。見透かされたような気分になって、僕は思わず押し黙る。

「いいか。俺は何にも訊いてやらん。大森もだ。これ以上、人に頼るな。自分でなんとかしろよな」

「は、はい」

言われて、どこかで彼らが中林を問いただしてくれるのを期待していた自分に気がついた。

僕は目をそらし、片づけを続けるふりをする。
そうだ。何があったのか。自分で聞かないといけない。

どうして彼女と一緒に現れたのか。

どうしてあんなに親しげだったのか。

どうして長居したのか。

どうして電源を切っていたのか。

ちゃんと名乗れたのか。

ちゃんと成功したのか。

ちゃんとバレずにやれたのか。

彼女の事をどう思ったのか。

「行くぞ」

大森の声にハツとして僕は腰を浮かせる。

振り返る。オフ会はまだまだこれからのもので、笑顔に溢れてい

た。でも、もう、そこには中林の姿はなく、彼女の隣には別の女性

が座っている。

僕は席を立ちながら、そのオフ会に背を向けた。

『傷つかない人間関係何かないんだぜ』

中林の声が聞こえたような気がした。

そこに、一人の店員がそわそわした様子でやってくる。なんだ？

僕は一瞬ドキリとして「あの」という遠慮がちな声に振り返った。

「あの、お客様」

「なん、でしょうか」

挙動不審だったか？ それとも彼女か中林からの伝言か？

僕は緊張の面持ちで店員の次の言葉を待つ。店員は、少々申し訳

なさそうな顔をしながら、小声で

「先ほどから拝見していたのですが」

「はい」

やっぱり、きよどつてたか!?

助けを求めようと振り返る。が、先輩と大森は僕を残してさつさと店を出て行くところだった。酷い! なんだよ! お前ら一体、何しに来たんだよ!

「お客様?」

「あ、はい。なんででしょうか」

「その……」

鼓動が高鳴る。視界の端に見え隠れする彼女の姿を意識する。こちらは見ていないようだ。なんだ? 一体、なんだ?

僕の緊張がMAXに向かう。

店員の顔がいつそう悲痛さをます。

僕が固唾を飲み込む。

店員がメニューで顔を隠し、僕の耳にそつと囁いた。

「阪神。今日負けたんですか?」

「はあ?」

はんしん?

僕がきよとんとした顔を見ると、店員がはにかんで

「いや、さつきから携帯を見ては皆さんものすごい顔しはってたんで、負けたんかなあと」

とノンキな顔で応える。

はんしん、阪神……そうか、そうだよね、ハ、ハハ……。僕の格好にあのやり取りだと、そう見えるかもね。

僕はすっかり脱力して、店員の肩に手をおくと、引き攣る笑みでこう答えたのだった。

「お会計お願いします。ちなみに、こうみえても僕はカープファンなんです」
と。

僕の猜疑心 3

僕は書店で合流した。

店の前に立っていた中林は、すでに前髪をいつものように戻して顔を隠し、ぼんやりとした様子だった。憔悴している、といってもいいのかもしれない。

とにかく、疲れ切った様子でまともな会話ができそうになかった。問いたださそうと意気込んでいた僕の気はそがれたのだが、どこかホツとする自分もいた。

先輩も大森も、中林の疲れた様子に気がついたらしく、これといった声をかける事はなかった。

そのまま四人で無言で大阪駅へ向かい、新大阪につき、新幹線に乗り込む。

新幹線は日曜のせいなのか、混んではいたが、座れないほどではなく、僕はバラバラに席に着いた。

運悪く、いや、都合よく？ 僕と中林は二人席に並んで座る事になった。

周囲にまつたりとした疲労感が横たわっている。それは中林のものだけでなく、この週末をどこかで過ごし家路につく、この車内にいる人間全員から滲み出たものなのだろう。通路を挟んで隣に座るサラリーマンなんかは、パソコンを開けたまま眠っていた。

パソコンか……。僕はそつと窓側の席に座る中林を見てみた。

先輩と大森は離れた席にそれぞれ一人で座っているはずだから、助けはまず来ない。

先輩の言葉を思い出す。そうだ、自分でやらなきゃ。

窓が吠える様に鳴った。ガタガタと震える。対向車とすれ違っているようだ。さっきまで後方に飛んでいく景色を見つめていた中林の顔が、暗闇の鏡に浮かびあがった。前髪の隙間に見える目は、開けられたままだ。眠ってはいないらしい。

窓に映った中林の影と目が合う。中林はどこか面倒くさげに僕を一瞥すると、息を一つはいて外を見た。対向車の姿がなくなり、現れた景色に視線を泳がす。

訊かなきゃ。

立ち向かうんだ。

っていつか、僕は何を恐れているんだ？

『恐れを感じた時、その恐れに目をこらせ。そして自分に問いかけるんだ。何を恐れることがあるのだと』

これと言ったのはラブレードじゃない。確か、まだ裏切る前の彼の親友の言葉だ。僕は、その裏切りこそ恐れているのだと気がつき、溜息をついた。

中林の横顔に心の中で語りかける。何があつたの？ 泉さんとはどういうやり取りがあつたの？

「聞こえね〜よ」

「え？」

不意に中林の声がして、僕は驚いて顔を上げた。中林は相変わらず仏頂面のまま外を見ている。その、口元だけが動いた。

「声にしないと、聞こえねえつつてんだ。何か言いたげな目で見つめるくらいなら、自分で声にしるよ」

「あ、すみません」

僕は謝ると、何度か瞬きをした。

それでも、すぐには何から口にしていいのかわからず戸惑う。どの言葉も不適切な気がしたし、どの言葉も何かが足りないようにも思えた。

そんな僕の言葉を、中林は始めの間は半ば無視するような形で待っていてくれたが、新幹線が名古屋に止まる頃にはとうとう堪忍袋の緒が切れたらしく、舌打ちをすると僕の方を振り返り声を上げた。「あ〜」。イライラすんな！ さっさと見えよ！ 何でもいいから、

直接俺に言えばいいじゃんかよ！」

名古屋で乗り降りする人たちが一斉に僕らを振り返った。僕は気まずさに「中林、声が大きいですよ」といさめようとしたが、中林は僕の襟首をつかまえさらに声を荒げる。

「お前、悔しくないのかよ。ム力つかないのかよ。勝手に作戦変えられて、自分の彼女とイチャつかれて、その上、何の説明もしない俺に、腹立たないのかよ！」

「そ、それは……」

これは逆ギレって言うんじゃないだろうか？ どうして僕が怒られているのだろう？ そんな事を頭の端で考えながら、助けを求め様に周囲に視線を巡らせた。背もたれ越しに大森と樹先輩が顔を突き出してこちらを見ていた。でも、どうやら二人とも助けるつもりはないらしい。どちらかと言うと、他の野次馬と同じような、好奇心と冷やかすと、迷惑がる様子を混ぜ合わせた表情で、関係者じゃないふりをしているようだった。

新幹線の溜息の様な空気が抜ける音がして、名古屋駅を発つアナウンスが流れる。ほとんどの人が落ちつくべき場所に落ち着き、知らぬ顔をしながら僕らの動向を探っている気配が疲労感漂う空気に乗せされた。

「小木！ 聞いているのか？」

「聞いてますよ。とにかく、そんなに大きな声を出さなくても十分に聞こえる場所にいますから、声を落として下さい」

僕は中林の手を外しながらそう言うと、取り合えず笑って見せた。日本人はどんな時にでも微笑むから不思議だと、以前彼女が言っていた事を思い出す。

日本人は、喜怒哀楽、おおよそどんな感情でも微笑みを作る。それが不思議で不気味で理解できない。そのような事を言っていたように思う。

僕はその時何にもいえず、やっぱり愛想笑いを浮かべるしかできなかったけど……僕はそれが日本人の悪癖だとは思えなかった。

感情も行動も、周囲の人間や空気を考えて表に出す。だからこそ、嫌悪や悲しみのような負の感情をあからさまに表に出さず、笑みという他人にとつて一番受け入れやすい表情を緩衝材として使用するんじゃないのだろうか。

しかし、今の中林にも僕のそんな理屈は通用しないようだった。

彼は僕の笑みにあからさまな嫌悪を示し、眉を寄せるとまた舌打ちをした。

「お前は、真剣じゃないのかよ」

「え？」

「どうして、ヘラヘラしてんだよ！」

中林は言葉一つ一つを石つぶてにして僕に投げつけるような口調でそう言つと、頬杖をついて、下から僕を睨みあげた。

「お前には覚悟が足りねえんだよ。覚悟が」

「どういふことですか？」

「どういふことも、何も、そのまんまだよ」

中林はそう言つと、僕から目をそらし、腕を組んだ。

「気にならねえのかよ。俺と彼女の事」

「それは、気になりますけど」

「だったら、ビシツと訊けよ」

「訊くつて……」

何から聞けばいいんだよ。それに、訊けば教えてくれる内容なら、先に行つてくれたらいいじゃないか。僕は心の中で愚痴ると、口を噤んで俯いた。

中林はいよいよイライラして来たらしく「あ~~~~~」と壊れた電子機器の様な声を立てて前髪をかき回し、ぱしつと自分の両ひざに手を置いた。

「ああ、もう！　じゃあ、言つてやる！　俺はな、彼女に惚れた、

お前の彼女に一目惚れしたんだ！」

「ふえ？」

驚きのあまり、僕は変な声を出してしまった。

すぐ目の前にいる中林の顔をまじまじと見る。しかし、彼の表情のどこにもこれが冗談だという隙はなく、むしろ緊張に青ざめているように見えるくらいだ。

「いいか、今日から、俺はお前のライバルだ。っていうか、俺は、セイはもうお前の味方なんかじゃねえ」

「ま、まっつて……どいういう」

大森や先輩も立ちあがって僕らを見ているらしき視線を感じるけど、今はそれに手を振る余裕なんかなかった。

僕は耳に届いた言葉を理解、解読するのに必死で、舌もうまく回らない。

それは中林も同じらしく、何かを口の中でもごもご言ってから、再び声を上げた。

「それに、俺は彼女とはもう、すっごく、信じられねーほどめっちゃくちや仲良くなったんだ。ははっ。悔しいだろ。ざまあみる。んで、メルアドもケータイ番号も交換したんだ。見てたんだろ？ 俺達の事。彼女も俺の事、一瞬で気に入ったみたいでさ。超ラブラブなんだって」

「は？ なに？ それって」

「お前は『セイ』に裏切られたって事だよ」

中林はそこまで言うのと、自棄を起こしたように高笑いし席を立った。呆然とした僕を残してどこかへ行ってしまふ。

彼がどこへ行くのかわからない。でも、僕は追いかけることができなかつた。

えっ？ うそだろ？

中林が？ 彼女を？

彼女も？ 中林を？

また、こみ上げて来そうになる涙を喉の奥で食い止めて、顔を上げる。

でも、もう、そこには中林の姿はなく、気まずそうに僕を見つめる大森と先輩の顔があるだけだった。

僕の猜疑心 4

僕らが乗り換えの駅に降りた時、同じホームに中林の姿はどれだけ探してもなかった。

樹先輩の携帯にメールが入っていて、別ルートで帰るらしいということがわかり、そのまま僕らはローカル線に乗り、三人で大学近くの駅まで行った。

改札をくぐる。

終電一本前の駅には人影はなく、僕らは冷たい夜風の中、間抜け面を並べてぼんやりと佇んだ。

僕の思考は、動いているようで動いていなかった。

駅に着くまでに、携帯で彼女のブログを確認したけど、オフ会に出ている彼女が記事を更新するはずもなく、事実はまだ闇の中だ。

中林はどうやって帰ってくるのだろう。

振り返る。

改札向こうの人気のないホームには、さびれた看板が立ち並ぶだけだ。

ふと、あの大きな交差点を連想した。

中林は向こう側に渡れた人間で、僕は渡れなかった人間だ。足元を見つめる。

身体の表面に静電気の様なびりびりとした膜が張って、体中の力を吸い取られていくような感じがした。

気を抜くと、ひざから崩れ落ちそうな感じでもある。

僕に裏切ったと告白した中林の顔を思い出す。

彼に寄り添い楽しげに微笑んでいた彼女の顔を思い出す。

「だよな」

呟きは、こうなる事をどこかで予見していた事を僕自身に教えていた。

怒る？ ムカつく？ 覚悟がない？

そんなの、わからなかった。ただただ、今は力が出ない。

「小木」

先輩の声がした。

心配げに見つめる骸骨の向こうに、同じような顔をしたトトロの顔が見える。

「これ、貸してやるよ。サイン付きだから、本当は保存版で置いとくつもりだったんだけどさ。なんか……他に元気になれるもの、おもいつかねえし」

差し出されたのは、おっぱいの大きな女の子の写真集だった。たぶん、今日の握手会の人だ。

「俺も、これ……」

ついでトトロが差し出したのは、巨乳の女の子の同人誌と、アニメDVD。

「返すの、いつでもいいから」

彼らなりの友情なのだと思った。

手を伸ばし、受け取る。

海部の言葉に落ち込んだ時、一緒に飲んでくれた、中林の事がふと浮かんだ。

写真集と同人誌とDVDを抱きしめ、僕はとうとう膝から崩れ落ちる。新幹線の中から我慢していたものが、ぐっとこみあげてきた。鼻の頭の辺りが詰まるのを、そのすぐ後に目頭が熱くなるのを感じる。

目を瞑ると、今度は彼女の顔が浮かんだ。

手紙の礼に照れた横顔。

初めてキスした時のあの潤んだ瞳。

僕は、僕は……親友と彼女、どっちも、失ったんだ。

気がつく、僕は声を殺して泣いていた。

泣きながら腕の中の友情だけはもう、手放すまいと抱きしめていた。

「小木」

先輩の手が僕の肩に置かれる。

「お前……」

大森の手も添えられた。

「先輩、大森」

僕は涙に濡れた顔で彼らを交互に見つめる。そうだ、僕はまだ独りじゃない。僕には、まだ理解者がいるじゃないか。そう、僕には……。

先輩はうんうんと頷くと、底なしの優しさを思わせる微笑みをたたえる。

「わかった。お前の気持ちはよくわかったよ」

僕は感動して「先輩」とガリガリの先輩に抱きついた。

そして、理解者であるはずの先輩は僕の背中を叩くところ言ったのだった。

「そんなに、おっぱいが好きだったのか」と……。

僕の苦悩 1

今日は何日で何曜日なのだろうか？

いや、その前に、今は何時だ？ 朝なのか？ 夜なのか？

僕はうつろな目で、エンドレスに流しているラブレイドの映像を見ながらそんな事を考えた。

家についてから、まず真っ先にしたのが、携帯の電源を切る事だった。

どれだけの情報社会といえど、家にこもり、携帯を切り、ネットを繋げなければ、その凄まじい流れから逃れる事が出来る。結構、簡単だ。

次に、先輩や大森から借りてきたものを手に取ってみた。でも、今は女の子の姿を見るだけで気分が暗くなり、残念ながらおっぱいは何の解決もしてくれない事に気がついて部屋の隅に重ねて置いた。それから、延々、ラブレイドのDVDを見続けている。

一話目から五十話目の最終回まで見て、今は二回目の二十七話。相当な時間、僕はここにこもっている事になる。

でも、不思議と腹は減らなかつたし、深い眠りにつくこともなかつた。時折、手元に転がっているいつかつたのか不明のお菓子を口に運び、水を飲むくらいだ。うつらうつらしても、中途半端な眠気は夢も見せてくれず、ひたすらに寝返りを打ってはDVDのリモコンを操作するだけの時間が過ぎた。

ただ、天音きらりが出て来る時だけは、胸の奥の方がチリッと痛みを覚え、二日酔いの様な気持ちの悪さが込み上げては来るんだけど、そこは一体どういう意地なのか自分でもわからない意地が働いて、目をそむけることはしなかつた。

愛と勇気の戦士ラブレイド二十七話。マニアの間では神の回と評価の高い回だ。

何がそんなに人の心を揺さぶり熱くさせたのか、何度見てもこれ

といった答えは得られないが、僕は今回もまた、同じ場面……ラブレイドが自暴自棄になっていた相棒を救うシーンで涙を流した。

画面の中のラブレイドは男らしく、言い訳なんかしない。どんな窮地も、どんな理不尽な事態にも、立ち向かい打開する。誰のせいにもしない。何のせいにもしない。ただ、真っ直ぐそれを見つめ、対峙し、苦難を乗り越えながら勝ち抜いていくんだ。

「あなたは、どうなのよ」

画面の中のきらりが、こっちに向かって問いただしてきた気がした。本当は、きらりがラブレイドの親友に向けた言葉だけど、それがダイレクトに今の僕に突き刺さる。

僕はその声に肩を震わせ、じっと考える。

僕は……これまで、自分で何かに立ち向かった事なんかなかった。いつも、無難に、流されるままに。それが平和だし、平和が一番だと思っていた。

恋愛もそうだ。好きな子ができても、告白なんかできた試しがない。これまで付き合った子も、向こうから告白して来て、向こうから去って行った。

僕は、いつも相手の決定に頷くだけだ。

そう、まるで今の状態と一緒だ。一方的に流される映像をただただ見て、ただただそれについて何かを思うだけ。全くの受け身で、僕から何かをすることは無い。流される映像を見て、与えられる情報をもらって、売られるグッズを買って……。

そっいえば僕は、ずっと受け身な人生だったな。

ふと落ちた視線が、自分の膝に止まった。

そして思いなおす。いや、そうじゃなかった頃もあったと。

僕は顔を上げ、棚の一番上に飾ってある、ラブレイドの変身セツトに目をやった。

バンダナとサングラスが一体化したもので、これは小学生の時に親に買ってもらったものだ。

あの頃、僕は本気で自分はラブレイドになれると思っていた。

そつだ、あの時はまだ活発な方で、体操教室にだつて通っていた。側転やバク転が得意で、練習すればすぐに色んな技を習得できた僕は、努力すれば何でもできるような気になっていたんだ。でも……。

僕は立ち上がり、変身セットを見上げる。

ずっと同じ姿勢だったせいか、伸ばした膝に痛みが走る。

痛みを堪え、息をのむ。膝に走る痛みは、我がもの顔で僕の方足を駆け抜け、それから蒸発するように止んだ。

痛みが消えたのを確認してから手を伸ばし、久し振りに手にとつて見る。

埃はかぶっていなかったが、さすがに色あせていて、最後にこれを身に付けたのがいつだったのかは思い出せなかった。

最後につけたのは……ゆっくりと記憶を辿り、今、消えた痛みに帰結した。

そつだ、この膝を痛めた時だ。小学生最後の夏休み。親にせがんで連れて行ってもらったラブレイドショー。あまりに興奮して走りまわったせいで、迷子になった時、女の子がいじめられている場面に出くわしたんだ。

もう、すっかりなりきっていた僕は、何にも躊躇わずに変身した。どんな女の子で、相手がどんな奴だったかは覚えていない。ただ、大人が数人いたのを覚えているから、いじめと言うより、もしかしたらもつと深刻な、誘拐の現場の様なものだったかもしれない。

とにかく、変身セットを身に付けた僕は、大暴れした。でも、相手の数は多くて……この膝を、思いつきり鉄の棒の様なもので殴られたんだ。

結局、女の子を救ったのは駆けつけた警備員で、僕はそのまま救急車で運ばれた。

そして、僕はショーも見れず、体操の道も閉ざされたんだ。

なにかに立ち向かったのは、それが最初で最後だったな。

僕は苦笑して、また変身セットを棚に戻した。

それからの僕は、体操できない自分を誤魔化すように、画面のなかで縦横無尽に駆け回るヒーローにますますのめり込んでいき、今に至る。

足元をみると、神の回、第二十七話はエンディングを迎えていた。エンディングテーマが流れていて、暗い部屋にほの暗い明りがちらついている。

顔を上げた。

まだ、携帯にもパソコンにも電源をいれるつもりにはなれなかった。でも……。

エンディング曲が終わり、次回予告が始まる。そして、最後、ラブレイドの声がした。

「自分と闘え 愛と勇気をもって」

毎回最後に添えられる、ラブレイドの言葉だ。

今の僕には、愛も勇気もないけれど、いつまでも部屋にこもっても何にも進まないな。

僕は溜息を一つつくと、とりあえず気分を変える為に風呂場に向かった。

僕の苦悩 2

風呂に入り、着替えて外に出ると、意外にも外界には光が溢れていた。

目を細め、空を見上げる。

夏へと移行する季節が、清々しさを風にのせて世界を駆けまわっているように見えた。

時計を確認せずに出てきたんだけど、どうやら昼の日中だったらしい。

腹が己の存在を思いだしたように鳴った。

体が、少しは生きるという活動を始める気になったのだろう。僕は肩にかけた鞆をかけ直すと、自分の部屋に鍵をかけた。

大学に足を向けようかどうか迷ったが、一生行かないわけにもいかない場所だという事に思い至り、ついで、オフ会で散財してしまった(皆の交通費や食費を出したから)僕が食事のできる場所なんか安い食堂くらいしかないのに気がついて、結局大学に行く事にした。

正門正面の時計を見ると、三時を指していた。昼時のラッシュを避けられた事にホッとする反面、彼女や中林とどこかで出くわすんじゃないかと、びくつく。

食堂は門をくぐって正面の建物の一階だからさほど距離を歩くわけじゃないけど、家の中にいるよりは彼らとぶつかる可能性は高くなるわけで……僕は道の端っこを、やや俯きがちに歩を進めることにした。

誰にも会いませんように。

誰にも会いませんように。

誰にも会いませんように。

呪文のように心の中で呟く。

じゃ、僕は一体何しに来たんだ？ そんな自問が吹き出すが、やっぱりそれも、この呪文でねじ伏せた。

自分がどうしたいのかはわからないけど、とにかく、外に出て食事をすること、それ自体に意味があるのだと言い訳しながら。

ようやく建物の入口に辿りつく。

僕の周りでは大学生生活を満喫する人間で溢れかえっていた。

皆、各々の時間を、想い思いに過ごしている。

ある人は就職情報の掲示板を見あげ、ある人はサークルのユニホームを着てどこかへ向かい、ある人は友達同士で座り込んで雑談している。

カップルとすれ違う。背の高い男の人と、背の低い女の人だ。

思わず目で追い、いつか海部と飲んだ時に見かけた映画部のOBだと思いいたる。確か、彼の名前もセイだった。いつからセイという名前はイケメンのものって事になったんだろう。そんなくだらな事を考えながら、きつと彼の彼女なのだろう、背の低い女の子と去っていく、面識のないその人物の後姿を見送った。

ああ、きつと、あんなイケメンで彼女もいるのなら、順風満帆の悩みなんか今日の空の様に一かけらもない大学生活を送っているのだろうな、なんてやつかみをしながら。

「なんかさ、ああいう男って、そこにいるだけでもム力つくよな」
声がしたのは、そのカップルの姿が見えなくなった時だった。

始め僕にかけられた声なのだとは気がつかずに、無視していた。しかし、その声は、僕の肩を抱くようにそのぶつとい腕でもたれかかってきた。

「中林って奴もな」

「へ？ あ！」

海部！

僕は驚いて間近に寄せられた海部の横顔を見つめた。

海部は苦々しそうな表情で「そう思うだろ？」とまた、僕の答えを必要としない問いかけをすると、今度は僕を逃すまいとがっちり

僕の肩を岩の様な手で握り、そのまま強引に歩き始めた。

「あ、あの」

存在自体すっかり忘れかけてた。そうだ、こんな奴もいたんだ。

「ここで会えてちょうど良かった。親友であるお前に聞きたい事が山ほどあるんだ」

「え、でも……」

食堂の中に引きずり込まれる。

そして有無を言わさず窓際の席に座らされると、奴は僕の向かいにどっかと腰をおろした。

先日とは違い、明らかに余裕のない顔だった。

太い眉をよせ、唇を結び、座った途端に貧乏ゆすりまで始めている。

ああ、あんなに誰にも会いませんようにって、祈ったのに……。

僕はどこにいてもしれない神様を恨みながら俯いた。

腹が鳴った。

うう。話があるのなら、せめて、なにか食べながら話したい。

僕が腹を押さえると、海部が眉間を解いた。

「お、腹減ってんのか」

「あ、はい」

「まあ、そんな事はどうでもいい」

どうでもいいんかい。

一瞬でも期待してしまっただ自分を恨みながら、僕は「はあ」と溜息の様な相槌を打った。

こうなったら、さっさと海部の話を終わらせてもらっしかない。

海部はやはり僕のリアクション何か気にした様子もなく、大仰に溜息をつくくと、机の上に鉄球の様な拳を置いた。

「で、アイツは何者なんだ？」

「何者って……」

「中林聖人だよ」

僕の苦惱 3

中林の名前を口にするその声には、微塵も好意的な温度は感じられなかった。海部は一度鉄球でテーブルを叩きつけると、僕の方を睨みあげる。

「いきなり美奈子の前に現れて、彼氏面しやがって」
そうなんだ。

上向きになっていた気持ちが一気に真下に向く。

「常に美奈子の傍に張り付いてよ、俺が挨拶しても無視しやがるし、マジ、いけすかね」。美奈子に聞いても、アイツはお前の友達だって事しかいわねえしさ」

噛みついてきそうな海部のモノいいに僕はいちいちビクつきつつ、その内容にもいちいち傷ついていた。

中林と彼女がいつも一緒にいる。

あの日の二人の姿が脳裏に浮かぶ。

肩を寄せ合い、楽しそうにしていた二人の姿だ。

「来週の誕生会にも呼んでるって言うんだぜ？ 大切な日だって言うのによ」

「え？ 誕生会にも？」

「ああ」

海部は頷くと、厭味のように盛り上がった筋肉がついている腕を組んでその割れた顎を引いた。

「で、別に自信がねえわけじゃないんだけどさ。まさか、中林って野郎が、紹介されるなんて事になったら、さすがに心優しい俺も黙っていられないってわけよ」

「紹介？」

「あれ？ お前、聞いてないのか？ ああ、所詮あて馬君だから、訊かされていなくても当然か」

海部が憐れむように僕を見下す。その態度にムカつきはしたけど、

今はそれはどうでもいい。紹介って??

海部がその唇をなめた。気持ち悪い。

「なんでも、俺の親父と美奈子の父親が昔、約束したらいいんだよ。美奈子の父親の五十歳の誕生日に美奈子の婚約者を決めるってな。それまでに美奈子が彼氏を紹介しないなら、自動的に俺を婚約者にする事になってんだ。いや、当然、俺も招待はされてんだけどさ。最近、素直じゃない美奈子の事だ。ここにきて、他のあて馬を用意しないとは言い切れ……」

海部の説明は延々続いていた。

でも、僕の頭には大きな穴があいて、そこに次々と情報が入れられていくのにどんどん零れ落ちていくような感じで……。

理解が追いつかなかった。いや、理解なんかしたくなかった。でも、現実が僕に告げている。

彼女は、僕に肝心な事を言っただけじゃなかった。そして中林と今、一緒にいる。それらが指す方向は、どんな風に都合よく楽観的に考えても、海部が示唆するものと大きな差はないように思えた。

つまり、僕は彼女にとって本当にどうでもいい存在で、彼氏っていう立場にはもう中林がおさまっているって事だ。

もしかしたら、海部の事が嫌で、ちよつと面識があった僕を彼氏って事にしてその場をしのぐつもりだったのかもしれない。でも、本命って言える中林が現れて、もう、彼女は僕の事を……。

ぎゅつと目を瞑る。

やっぱり、あの部屋から出るんじゃないかった。激しい後悔がその空いた穴に僕自身をまるごとをひきずりこもつとしているかのようだ。

「おい、聞いてんのか?」

海部の声がした。

数人の大きな塊の様な気配がいくつか隣を通り過ぎた。顔を上げる。

ラグビー部の人間らしい。海部と親しげに口をきいている。その

内容は彼をいたわるものと中林への悪口の半々の様だ。

海部は自分のホームグラウンドに立っているかの様な顔になり、さつきよりさらにふんぞり返って「そうなんだよ。もう、困るよな」と、全く困ってなさそうな声を上げた。

また、腹が鳴る。

腹の音で僕の存在を思い出したらしく、海部は僕に一瞥をくれると「まだいたんだ」と零し

「もう、お前、いいや。こっちの仲間に助けてもらうからさ。ま、あて馬君も、身分をわきまえて失恋なんて思わずに、強く生きてくれ」

立ち上がり、あの馬鹿でっかい手で僕の背中を思いっきり叩いて行ってしまった。

叩かれた瞬間息が詰まる。言い返す前に、僕は咳こみ、ただただ奴を見送るしかなかった。

「なんなんだよ」

筋肉軍団が食堂を出ていくのを涙目で見送る。

勝手に声掛けて、勝手に話して、勝手に行っちゃってさ。いったい、何なんだよ……。

僕は数回深呼吸し、僕の肺機能が故障していない事を確認すると立ちあがった。とにかく、なにか食べ物を胃に入れなければ。

踵を返し、食券販売機の方を向く。そして、僕の世界は静止した。

「あ」

そこに、一番会いたくなくて、一番失いたくない人の姿があったのだ。

「泉……さん」

僕の苦悩 4

彼女は食堂に入って来たばかりだったらしく、入口傍の券売機の前で、突然現れた（ように見えただろう）僕の姿を凝視していた。

「正義……くん？」

彼女は大きな目を何度も瞬きさせると、くしゃっと表情を崩す。

そして、涙を浮かべ、僕に抱きついてきた。

「ごめんなさい。私、ずっと素直になれなくて。本当はあなたの事が大好きだったのに、天の邪鬼な事ばかりしちゃって。でも、信じて。私が本当に好きなのは、正義君だけよ」

「泉さん……」

僕は感極まって、同じように涙ぐみながら彼女を抱きしめた。

いつの間にかできていた僕らを囲む人の輪から、自然に拍手がわき上がる。

オメデトウ

オメデトウ

オメデトウ

その中には中林の顔もあって……。

そして、僕らは幸せに……。

「正義君？」

僕は彼女の声にハツとして顔を上げていた。

周囲を慌てて見回すと、人の輪もないし、彼女が僕に抱きついている事もない。どうやら、あまりのショックでエヴァの最終回に現実逃避してしまっていたらしい。

僕は軽く頭を振ると、一度だけ爪を軽く噛み、曖昧に微笑んだ。

「あ、お久しぶりです。お元気でしたか？」

言いたい事はたくさんあるのに、実際声になった言葉と言ったら、こんなもんだ。僕はたまに会う親戚なんかか？ 自分で自分に溜

息をつきながら顔を上げる。彼女の頬はやや紅潮していて、眉は潜められていた。

「一步、僕の前に近づく。」

「一体、どうしていたの？ 携帯は繋がらないし、メールも返ってこないし」

「すみません」

「どこからどのように説明していいのかわからない。」

まさか、オフ会を覗きに行っていたなんて言えるわけないし、かといって、これといった言い訳を用意しているわけでもなかった。

結局黙りこむ形になってしまつて、俯いていると、彼女は僕の腕をとつて、すぐ傍の椅子に座らせた。

逃がすつもりはない。そう言う事の様だ。警察の取り調べよろしく、僕の向かいに腰を下ろすと、腕を組む。

「ねえ。どういう事なの？ 話して？」

「それは……」

「話してくれないと分からないじゃない。私」

彼女の声が揺れたので、僕は慌てて顔を上げた。彼女もまた、俯いていた。唇を噛んで、何かに耐えているようだ。自身の腕に爪が食い込むほど手に力を入れているのが見えた。

「正義君が何を考えているか、わからないよ」

「え？」

「だって、そうでしょ？」

彼女は周囲の視線も構わず声を張り上げた。

「いつつ、私の言う事には何にも言わない。何があつても、怒らない。ねえ、どうして？ いつつ、何考えてるの？ どうして、話してくれないの？ それとも、私の事なんか、どうでもいいの？

ねえ！」

なじる彼女の声が、いちいち僕の心を抉つた。

なんだよ、それ。とも思う。

話してくれない？

訊いてこなかったからじゃないか。

怒らない？

怒るような事をしたと思ってるんなら、そっちから謝ればいいじゃないか。

何を考えてるかわからない？

そんなの、そんなの……。

僕は彼女の顔を見た。

とりみだした事を恥じているのか、彼女は涙をぬぐうと、呼吸を整え、手持無沙汰の指を自分の髪に絡めていた。

彼女の表情が、消えていく。

いつもの、人形のような……氷の女王に戻っていく。

「ごめんなさい。でも、連絡取れないようにした理由を教えてくださいな」

さつきとは打って変わった、落ち着いた、事務的な声だ。

僕はまた、彼女から目を反らす。

なんだよ。いきなり怒って、一方的な事を言ったと思ったら、今度は引いて……。そういう態度が僕には一番分らない。

潤んだ瞳で告白して来た時の彼女。

リアルで冷たい彼女。

ネットで僕にデレデレの彼女。

オフ会で中林と仲良くしていた彼女。

どれが、本当の君なんだ。

僕は、どの君を信じたら……。

「泉さん」

僕は目を合わせる様に視線を上げると、じっと彼女の瞳を覗き込んだ。

僕こそ、君の事を知りたい。

僕こそ、君の本当の気持ちを知りたい。

ねえ、僕は君の何なの？

ねえ、僕は君の彼氏だよ？

ねえ、

「僕は君の……」

「悪い。待った？」

その時、僕らの間に声が飛び込んできた。それが誰の声か、脳が識別するより早く僕はわかってしまった。

目を閉じる。息を吐く。彼女が僕の名を呼ぶ声がする。顔を上げ、目を開けた。

「中林」

「小木」

そこには中林の姿があつた。

海部の言っていた事は本当だったんだ。

ここで待ち合わせしていたのだらうと推測させるさっきの一言と、彼らの間に漂う空気に僕は確信した。

「だよね」

眩き、零れた声を拾うように僕は立ち上がる。

並んで立つと、どちらが彼女にふさわしいか、よりはっきりさせられるようで、僕は嫌気がさした。

僕より背が高く、イケメンで、勇気もあつて行動力もある……
どつというわけかわからないが、人見知りが治つた中林に、僕が勝てる部分なんて一つもない。

ついでに名前も小木と中林。小と中。木と林。ここでもなんだか負けている気がする。

気がつくくと、僕は逃げ出そうとしていた。

券売機横を通り抜け、そのまま外へ向かう。

それを、誰かの手が掴む。誰の手か……そんなの奴の手に決まっていた。

「待てよ。小木」

「……何？」

僕は半ば自棄になって振り返る。

また、逆ギレ？

中林は分厚い前髪に向こうの綺麗な顔を歪め、僕を睨んでいた。「ちやんと、彼女と話したのかよ？」

彼女。へえ、中林もそう呼ぶんだ。

何にも面白くないのに、笑みが浮かび二人を交互に眺めた。

怒った顔の中林に、凍てついた表情の彼女。なんだよ。一体、二人とも、僕に何を期待してるんだよ。

「ああ」

そこで思いつき、僕は一人で納得した。そうか、彼らは悪役が欲しいんだな。運命的な出会いをした二人が、ドラマチックに結ばれるための、かつこ悪い悪役を……。

だったら。

僕は中林の手を振り払うと、両手をポケットに突っ込んだ。姿勢を作らなくても、彼を見上げれば自然に下から睨みつける格好になる。

「話すって？ 何を？」

「何をつて……何か言うことあるだろう」

「ないね」

僕は精一杯憎らしい表情を作ると、無理をして鼻で笑った。

「今更、何を話す事があるって言うんだよ。話したら、さつき海部君から聞いたよ」

「海部くん？」

彼女の顔が小さく跳ね上がる。

僕は乾いていく唇を小さく噛み、声の震えを隠すように小声で続けた。

「今度の誕生日会、ただの彼氏紹介じゃなかったんだよね」

「それは」

彼女が珍しく動揺して立ち上がる。

ほら見る。やっぱり隠し事だったんだ。鼻を明かしてやった、そのはずなのに一本取ってやったという優越感ほんの一瞬で、僕の気分はますます落ち込んでいく。

彼女が中林の影になくするように立ちあがったことで、むしろ状況は中林が彼女を守るように立っている形になって、ますます僕はやるせない気持ちになった。

「で、中林も呼ばれたんだろ？ よかったじゃないか」

「正義君？」

「どうでもいい僕じゃなく、ちゃんとした彼氏が見つかって良かったですね、泉さん。僕の役目は、終わった。もう必要ないでしょう？」

諧謔的な物言いは、悪役にふさわしい。

僕は一度言葉を切ると、中林の方を見た。

「覚悟、あるんだよね。君にはあるんだ。そして、僕にはなかった。君は横断歩道を渡れた側の人間で、僕は渡れなかった側の人間だ」

「なんだよ。それ。小木。いいか、聞けよ。彼女はな、知ってたんだ」
「知ってる？ 何を？」

胸の奥が疼いた。

まさか、ブログの、セイの事か？

焦って彼女の方を見る。彼女は苦しそうに息を詰まらせ、両手を胸の前で組んで祈るように僕の方を見ていた。

耳の中でぐわんぐわんと音が鳴る。鼓動が胸を締め付け、胃が絞られる。頭は脳の中に岩の様なものがねじ込まれハンマーで殴打されているようだ。僕の目を見る彼女の、その瞳の中に僕の居場所を必死で探るけど、逃げ場すら見つからなかった。

本当に、知ってしまったのか？

恥ずかしさと罪悪感とがないまぜになって、さらに僕を責め立てる。偽名をつかって、彼女に取り入り、付き合いを良くするような……そんな卑怯な僕を彼女は……。

眩暈が、する。

その僕の両肩を、中林が両サイドから手をつきだし支えた。

「小木。彼女はな、俺が話す前から、わかってた。だから……」
「話したんだ」

なんだ。

力が抜ける。

俺が話す前から……？　じゃ、中林からも話したんだ。ああ、もしかして。

オフ会を思い出す。急に距離を縮めたその理由。ずっと不思議に思ってたんだ。どうやってって。簡単じゃないか。中林は会場に行く前に彼女に出会った。彼女に一目惚れした中林は、彼女の気を引くために僕の事を暴露した。僕に失望した彼女は、優しく親切で正義感のある密告者に心を移した。そういう事。それだけの事。

「小木？」

僕は身を左右に大きく振ると、中林の手を払い、顔を上げた。

これで、もう、僕は名実ともに悪役だ。仕方ないよね。だって、せこい事をしていたのは僕自身なんだから。ばれて困るような事をしたのは、僕なんだ。

視界が、ぼやけていた。涙が、溢れているのだとわかった。

慌てて顔を隠すように俯き、情けなさを絞り出すように目を瞑る。幾滴か雫が靴の上にシミを作った。

「すみませんでした」

声が震えていた。こんな時になって、思い出すのが何故か彼女とすごした時間ばかりだという、自分の心の中の自動再生機能を恨めしく思った。

一緒に入った喫茶店。

一緒に歩いたシヨツピングモール。

一緒に話した先の話。

楽しかった、なあ……。

「正義君……」

彼女が僕を覗き込もうとする気配がある。僕はその視線を振り切るようにさらに頭を下げると

「お幸せに」

顔を上げることなく踵を返し、逃走した。

背中の中林の音がする。もう、勘弁してくれと僕の心が悲鳴を上げる。

思いつきり床を蹴りあげる度に、膝が痛んだ。昔の正義感に溢れ真っ直ぐだった僕が、今の情けなく卑怯な僕に罰を与えている、そんな気がした。

僕のブログ 1

僕は、駆け込むように部室の扉を開けると、そのまま倒れ込んだ。やわらかい感触の後に、汗臭さが追いかけて来て、倒れ込んだのが非常にしょっぱい場所なのに気がつく。

「どうしたんだよ」

「大森」

大森は自分の背中に飛び込んできた僕を、やけにのんびり間延びした口調で振り返った。

「お、お帰り。何日ぶりだ？ 生きてたんだなあ」

奥の方には先輩の声もする。

なぜかホツとして、僕は「勝手に殺さないで下さいよ」と言いながら大森の背中から離れた。

自分で立って、部室を見回して、おや？ と思う。すぐには特定出来ない違和感がして、僕はぐるりと部屋を見回した。

カーテンが閉められているのも、オタクなグッズが並べられているのも変わらない。でも、何かが……。

「ああ、気がついたか。中林がさ、出て行ったんだよ」

「え？」

言われて中林の私物を探す。

確かに、ここに常備されていた彼の服やゲームのソフトやハード機がごっそりなくなっていた。

先輩はつまらなそうに下唇を突き出すと、中林がいつも座っていた場所を見ながら続けた。

「昨日、ここに来てさ。持って行った。何にも言わなかったけどさ、もう、ここには来ないつもりなのかも知れねえな」

「やっぱり……中林は。」

僕は落胆とも諦めともつかない虚脱感に膝をつくと、いつも中林

が座っていた場所を見上げた。

パソコンまで、中林が改造したのではなく、もともと部用にあつた旧式のデスクトップに変わっていた。

そうだ、何よりの違和感は、奴がここにいないことだ。

いつも、どんな時にもそのパソコンの前に座っていた、奴の姿がない。

その事がうら寂しいほどの違和感を僕に与えているんだ。

「中林は、変わった」

いつかどこかで聞いたような台詞を、大森が呟いた。

本当に、本当に、僕は彼女も親友も失ったんだ。

部屋にこもっている時にはどこかで「どうにかなるんじゃないか」なんて考えていた甘い幻想が踏みつぶされ、自分じゃどうしようもない現実が覆いかぶさっていた。

「どうする？ 小木。このままでいいの？」

先輩が僕に尋ねる。

こういう時、どうすればいいんだろう。

「小木は、どうしたい？」

今度は大森が口を開く。

耳に残っていたきらりの声が、それに声に重なった。

『あなたはどうなのよ？』

僕は二人を順に見つめると、最後に中林の影を追うようにパソコンに目をやった。

僕は……僕は、何を。

彼女が言っていた。

僕の気持ちがいらないって。

僕は答えられなかった。

『あなたはどうなのよ？』

僕は、僕は……答えられない事を棚に上げて、彼女の言動を心の中で意味不明だと切り捨てていたんだ。

『恐れを感じた時、その恐れに目をこらせ。そして自分に問いかけ

るんだ。何を恐れることがあるのだと』

何を信じたらいいのか、わからなかった。確かにそうだ。どの彼女が本当なのかわからない。でも、僕が応えられなかったのはそんな理由じゃない。

僕は、僕の気持ちを信じられていなかったんだ。僕の気持ち。信じ抜くべきだった、僕の想い。

『信じ抜く事は困難だ。だからこそ価値がある』

僕の想いは、何だったんだ。僕は……。

パソコンデスクの前に座る。画面を立ち上げる。唸り声が出て、瞬きするように画面が点滅した。よくわからない数字が、ものすごい速さで動いて行き、止まる。パスワードを入れるブランクが水色の画面に浮かんだ。

「小木。まさか、この期におよんで、またセイになりすますつもりじゃ」

背中であげた。僕は言葉にせず、ただ首を横に振る。『セイ』は僕じゃない。『セイ』は今や中林聖人だ。僕は、僕の名前は……。

『逃げるな。立ち向かえ。逃げるのは、この、最悪な現状を肯定するのと同じだ』

ブログの新規登録画面をクリックした。

「小木？」

二人が僕の左右の肩から顔を突き出して画面を見る。僕は構わず記入を進め、ハンドルネームの欄に来た。

ラブレイドの声が聞こえる。

『自分と闘え 愛と勇気をもって』

中林の声がした。

『俺には、匿名で仮面を被った正義のヒーローに覚悟を感じることができねえよ』

『お前には覚悟が足りねえんだよ。覚悟が』

僕は一度大きく深呼吸すると、ハンドルネームにこう打ち込んだ。

【小木正義】

「おい、小木。これ、本名じゃねえか」
先輩の言いよどむ声がする。

わかってる。ブログに本名を晒すのがどんなに危険で馬鹿な行為か。でも、僕は僕に向き合いたいんだ。僕は何を想って、何をしたかったのか。どれほど彼女の事が好きで、どれだけ中林のことを友達だと思っているのか。

そして、見つけたい。何が信じられるかじゃない。何が本当なのかじゃない。僕が、僕自身が何を本当だと信じたいのか、を。

僕は新規に立ち上がったブログの設定画面に映った。
そして、タイトルにこう、打ちこんだ。

【ヒーローオタクと秘密のブログ】

もう、始めの記事のタイトルは決めていた。
僕を見つめ直す為の、僕のブログ。

その、始めの記事は

【僕の仲間1】

僕のブログ 2

その後、僕は一つ記事を書き終えてから、不平不満の声を上げる自分の腹に何にもしてやっていない事をようやく思い出し、部屋にあった賞味期限不明のカップラーメンを口にした。

こういう、賞味期限に関してもそうなのだが、何か問題に直面した時、僕は見て見ぬふりをする事がある。

もしかしたら、もう手遅れなのかもしれない。そうどこかで思いつつも、言い訳をして問題を直視せずにより過ごそうとするんだ。

実際、確認した所で手遅れでも何でもない場合だつてあるのに、事実を確認すること、それ自体が億劫で怖くてできない時がある。

今回の事もそうだった。

実際に確認してみればよかつたような事を、確認してこなかつた。気にしてるのに気にしていないふりをして、やり過ごそうとした。そして、その事実確認を安全な場所でやろうとしたから、僕は…。

書きながら感じる。自分の弱さや、情けなさを。

始め、僕の身に起こつた事を、ブログに綴るといふのは思った以上に辛く感じられた。

コメント欄は、返事が出来ないのを断つた上で空けておいた。とにかく、自分のやったことを再確認するのが辛くても、非難や中傷が来て心が痛んでも、僕は僕がやったことを三者的な目で再確認する必要があると思つたからだ。

実際、ブログを開設して四記事書いたあたりからコメントがつき始めた。連投していたせいもあって、記事が目立つたのかもしれない。

コメント欄の数字が増えるほどに、開けて読みたい気持ちは強まったが、もし、それが誹謗中傷で、読んでしまった後で気持ちが萎えてしまい、書き続ける事が出来なくなつたら嫌なので、そこはぐ

つと抑えて、とにかく僕は書き続けた。

一日目は、軽い僕の環境についての紹介。サークルの仲間や彼女や海部の事について書いた。

二日目からは自宅に戻って、経緯を始めからできるだけ詳細に綴っていく。

書いては寝て、寝ては書いて……腹が自己主張を始めれば要求を満たすために、適当にお菓子やパンをかじる。そんな日々が続いた。ただただ辛かっただけのこの作業にも、光が見え始めてきたのは六日目の辺りだ。どことは特定できないけど、オフ会に行った事を書いていた頃だと思う。

ふと、それまで理解できなかった中林の言動が、僕の心に届いたような感覚がした。

キツイ言葉を投げつけ、一人で横断歩道の向こう側へと行ってしまった奴の気持ち……。

僕は慌てて身を捻ると、床に放り投げたままになっていた自分の鞆を手にとった。

使い古したそのバックパックに手を突っ込みかき回す。

「あつた」

出てきたのは、ガンバライドカード。あの日、中林が僕にくれた仮面ライダーのカードだ。

それを何枚かめくって、じっと見てみる。

なにかあるはずだ。

ブログを書き綴り、中林の言動を反芻した僕には根拠のない確信があった。

なんどもめくり、考える。

仮面ライダーキバ ドガバキフォーム

仮面ライダーブレイド キングフォーム

仮面ライダーディエンド

仮面ライダーカイザ

仮面ライダー電王 ソードフォーム

作品も属性もバラバラだし、主人公で揃えているってわけでもない。

「なんだ？ これの共通点は……。」

「あ」

その中で、一枚だけ、折られているカードがあるのに気がついた。めくってみる。

仮面ライダーナイト ソードベント

これだけ違っつて言うのか？？

僕はそのカードと他のカードを見比べた。

うっん……一体。

注意深くカードの内容をしてみる。

そして、ある事に気がついた。

「え？ 嘘だろ？」

僕は慌てて折られていないカードを広げる。

そして、そこに見つけた共通点は。

【アイテヲブツトバセ】

という言葉だった。

どのカードもどのカードも、後衛のロットパターン名がこれになっっていたのだ。

なんだ、もしかして、中林は僕にこれを言いたくて……。じゃあ。

僕は唯一折られていたカードを手取る。そして、そこに書かれていた言葉に、胸がじわつと熱くなるのを感じたのだった。そこに書かれていた言葉。それは……。

【サポートハマカセロ】

喉を震わせ、何かが溢れ出そうになる。

僕は両手で自分の口を抑えたけど、それは嗚咽となって漏れ出てきた。

中林は、中林は、やっぱり僕を裏切って何かいなかったんだ。自分の好きなゲームと、僕の好きな特撮を合わせたカードゲームにのせてメッセージをくれていた。そんな奴が簡単に僕を裏切るわけがない。

もし、仮に裏切ったのだとしても、必ずそれなりの理由があるはずだ。

僕はブログ画面を映したままのパソコンを見直した。

最後まで書こうと思った。少なくとも、オフ会に行く前までの中林の気持ちはわかった。じゃあ、その後、どうなんだ。奴は本当に彼女に惚れたのか。本当に、彼女は奴を選んだのか。

「続けよう」

僕の指が再びキーボードを打ち始める。

日付が変わり、ブログを初めて一週間になるうとしていた。

僕の見解 1

僕の携帯がギンガマンの主題歌を歌い始めたのは、ちょうどブログを書き終えた時だった。

ギンガマンの主題歌は誰の着信だった？

しばらく聞いていなかった曲に、すぐには誰だと特定できない。

僕は両手に溜まった疲労を空中に逃がすように降りながら、充電機に挿したままの携帯に近づいた。

サブディスプレイを見る。先輩？ 珍しいな。

携帯を手にして、開ける。とたんに、ポップアップ絵本よろしく先輩の声が飛び出してきた。

「小木！ 今、どこにいる？」

何やらせつぱつまつた声だ。

僕は疲労にしびれた手を泳がせるように、先日手に取ったばかりのラブレイドの変身セットに何気に伸ばした。

「どこって、自宅ですよ。ずっとブログしてました」

「自宅！？ お前、今日が何の日か知らないのか？」

「何の日？」

バンダナの端を指に巻きつけながら、カレンダーの方へ首を突き出す。

そっぴや、何日だった？ ずっとこもりつきりだったからわからない。カレンダーが無力なのを知ると、今度はブログの方へ目をやった。

すぐに飛び込んで来た数字は、コメント数だ。最後のあげた記事のひとつ前にはもう十以上のコメントがついている。そっぴや、気になってチェックしだしたアクセス数も最近うなぎ登りだ。もしかしたら、荒らしにあっているのかもれないな。そんな嫌な予感があった。

「おい、小木！ 聞いているのか？」

先輩の声にハツとする。そうだ、今はアクセス数や荒らしはどうでもいいんだ。

「えと、今日は何日でしたっけ」

「おまえなあ」

盛大な溜息が電話の向こうで聞える。

本当に、なんだっけ？ 何か、そんなに重要な事があつたっけ？
「聞いてないのか？ そんな事ないだろ。今日は、ほら、泉美奈子の……」

「あ~~~~!!!!」

お父さんの誕生会！

僕は慌ててパソコン画面で日付を確認する。確かに、今日だ。そして、時間は……。あと、一時間後！

姿見に映る自分を見る。毎日簡単にシャワーを浴びていただけだったから、髭は伸び放題だし、目の下にはうつすら隈も見えるような見えないような……とにかく、ただでさえ貧相な顔がさらに影をつけたような状態だった。

「うわっ。どうしましょう。っていうか、どうして先輩が？」

「どうしてって。今、俺、やばいもん見ちまったんだよ！」

「え？ ヤバいもの？」

「ああ」

慌てている割に、先輩の歯切れがぐつと悪くなる。

その分、緊張も伝わってくるようで、僕は思わず携帯を握りしめた。

「さつき、大森と大学の裏路地を歩いてたんだ」

「どうして、そんな所に二人で？」

「抜けた先に古本屋があつて近道なんだよ。で、そこで中林の姿を見かけたから、声をかけようと思つたら、隣に泉美奈子がいたんだ」
「そうだ。彼女にはもう中林がいるんだ。」

僕が出る幕じゃない。冷静に考えれば僕が出席する必要なんてないんだから、慌てることないじゃないか。

考えがまとまり、僕の肩の力が抜ける。

「ですよ。じゃ、きつと二人で誕生会に出るつもりなんですよ。そんなの、どうして僕にわざわざ」

「違うんだよ！ いや、違うないかもしれないけど、違う！」

「はあ？ どういう意味ですか？」

「だから」

先輩がもどかしげに声を上げる。

「二人でちよと余所行きの恰好して歩いてたのは本当だ。けど、俺が言いたいのはそういうことじゃなくて、大変なんだよ」

「だから、なんなんですか？」

「さらわれたんだ！」

「はあ？」

僕は耳に届いた先輩の言葉に首を傾げた。

さらわれた……おおよそ、日常生活の中で聞くような単語じゃない。せいぜい、テレビの中のドラマかニュースで聞くくらいだ。

「そう、さらわれたんだ」

先輩はまるで自分自身の興奮を抑え込むように、もう一度言う。「俺と大森が中林に声をかけようと思った時だ。二人は古本屋のある通りに入るか出ないかだった。いきなり車が現れてさ。中からごっつい連中が出て来て、あっという間に二人を車の中に押し込んだんだ」

一息でまくし立てた。

その内容はおおよそ信じるに値しないようなものだったが、先輩の声には凄味があり、内容よりもその声に納得させられる。

「大森は？」

「追いかけた」

「へ？ 大森ですよ？」

あの巨漢がどうやって車を？ トトロならネコバスや空飛ぶコマを使えるだろうけど、ただのトトロ似のオタクにはそんな真似は到底出来るような気はしない。

そんな僕の想いは、樹先輩も言わずとも知れたらしく、「正確に言えば、追いかけてようと、試みた、だ」と付け足した。

「でも、無理でき。とっさにできたのが、その時手にしていた携帯のリダイヤルで俺のにかけて、車の中に投げ込む事くらいだっただ」

「え？」

状況を想像してみる。

何メートル先にいたのかはわからないが、中林と彼女が先輩と大森の前にいた。

いきなり現れた車。

大男たちが二人を車に押し込めようとする。

当然、中林も男だ。抵抗するだろ。

助けようとする先輩達。でも、到底無理だと判断した時……どうしてそんな機転が回ったんだ？

僕はいぶかしんで眉を寄せた。

その時、飛び込んできたのは大森の

「今回は、携帯、中林に渡せた」

という言葉だった。

そうか、大森の奴、オフ会の時の失敗をヒントにして……。

大森は大森なりに今回の事を気にしてくれていたのか。僕は自分の胸が締め付けられるのを感じた。

もしかしたら、いや、もしかしないで、先輩も大森も、僕の事を心配してくれていたのだ。

大阪についてきたのは彼らの趣味が便乗していたんじゃないかという、自分の邪推を心の中で謝る。

「どうやら、見つかつて電源はすぐに切られたみたいだけどさ、通話状態にしてたから情報が少し入ったんだ」

また、電話の声は先輩に変わった。

「だから、誕生会の事もわかったんですね」

「そう言う事」

先輩はビンゴと叫ばんばかりの声をあげる。

「どうやら、海部の作業らしい。誕生会が終わるまで、二人をラグビー部の部室に監禁するような事を言っていた」

監禁……。大男たちに捕まって、縛られ身動きを封じられている二人の姿を想像する。

ラブレイドの変身セットを弄んでいた僕の手には、いつの間にか力が込められていた。

「どうする。小木」

「え？」

先輩の声が、僕を試すように囁いた。

「中林も彼女も、お前を裏切った人間だ。別に殺されるわけじゃない。誕生会への出席を見合わせさせられるだけだ。むしろ、中林が彼氏として公に出る機会が先延ばしになるって言うのは、お前にとって悪い話じゃねえんじゃないか？」

「それは……」

そうだ。確かに、命の危機ってわけではなさそうだ。せいぜい、四時間ほど拘束され、海部がパーティー会場ででっ上げの欠席理由を嘯く程度だろう。

「それに、犯人は皆、ゴツかった」

大森の声。

食堂での彼らの姿を思い出す。同じ人類とは思えないほど発達させた筋肉の鎧を誇らしげに纏った、屈強な男たち。もし、もし、中林達を助けたいと思うのなら、彼らを敵に回す事になる。

「裏切り者を助けたって、お前には何にも得する事ないよな。彼女が戻ってくるわけじゃねーし、ボコボコにされる可能性だって……」
「少しずつ冷静さが戻ってきたのか、先輩の声が落ち込む。」

その後ろで「確かに、怖い」と大森の素直な意見も述べられた。僕は視線を落とした。動いてもいないのに、膝が疼いた。

この痛みは、弱いくせにヒーロー気取りで余計な事をしたからできた痛みだ。もし、あの時、自分の事を考えてあんな事しなかったら、僕は今頃体操選手になっていたかもしれない。オタクじゃなく、表舞台で喝采を浴びるような、そんな人生だったかもしれない。

僕は、あの女の子を助けたところで、何にも得はしなかった。そう、得どころか……失った物の方が大きかったんじゃないか？

今回だってそうだ。助けに行った所で何かがある？ 恋人が別の男を結ばれる。それだけだ。そして、きつと僕はこの膝以上の怪我をする。そうだ。きつと、今回も得るものなんかなくて、失うものの方が……。

手の中のラブレイドのバンダナを見つめた。

これじゃまるで、ラブレイドの最終回だ。相棒に裏切られ、恋人が窮地に陥る。

目を閉じる。何度も、何度もみたラブレイドの最期を、思い出す。裏切られ、窮地に陥れられたラブレイド。でも、何故、彼は最後の最後まで、相棒を、愛する人を守る事を迷わなかったんだ？

『自分と闘え 愛と勇気を持って』

僕は目を開けた。

顔を上げ、さっきまでにらめっこしていた画面を見る。

僕の気持ち、僕が信じるべきもの。守りたいもの。

それは僕自身か？

ブログを思い出す。

ブログは教えてくれた。僕の弱さを、僕の卑怯さを、僕の卑屈さを。でも、同時に気付かせてくれたじゃないか。

美奈子さんの僕への想い、中林の僕への友情を。そして、わかったはずだ。自分の気持ちがどこにあるのか、自分がどうしたかったのかを。

今、わかった。最終回の、ラブレイドの気持ちか！ そうさ

「迷う事なんかなかったんだ。自分を信じさえすれば」

「あ？ 小木？」

「先輩。連絡、ありがとうございます」

「おい、どうすんだよ。まさか……」

僕は、手の中のバンドナを改めて握り直すと、一度静かに息を吐き、こういった。

「今から、僕の親友と大切な人を、助けに行きます」

愛と勇気の戦士ラブレイドのテーマ

皆の笑顔を守るため

愛の戦士 ラブレイド

罪を憎んで人を憎まず

勇気の戦士ラブレイド

悪い奴ら

悪の軍団ワルアーク

忍び寄る奴等の手から

君を守るよ

正義の心で

飛び上がれ

ラブレイドキック！

唸れ轟音

ラブレイドパンチ！

どんな時でも立ち上がる

君の笑顔がそこにある限り

行け行け

愛と勇気の戦士 ラブレイド
行け行け

愛と勇気の戦士 ラブレイド

皆の涙を拭うため

愛の戦士ラブレイド

恐怖にも立ち向かう

勇気の戦士ラブレイド

いけない奴だ

悪の総領キョウアクーダ

迫りくる奴の影から

君を守るよ

正義の力で

飛びあがれ

ラブレイドキック！

唸れ轟音

ラブレイドパンチ！

どんな時でも逃げないぞ

君の涙を止めるまで

行け行け

愛と勇気の戦士 ラブレイド

行け行け

愛と勇気の戦士 ラブレイド

本当は怖い時もある

本当は逃げたくなりもする
でも

信じるんだラブレイド

自分と闘い

自分を信じて

愛と勇気の為に!!

飛びあがれ

ラブレイドキック!

唸れ轟音

ラブレイドパンチ!

そして決めるぜ

ラブレイドファイナルアタック!!!!!!

行け行け

愛と勇気の戦士 ラブレイド

行け行け

愛と勇気の戦士 ラブレイド

行くぞ君の

愛と勇気の戦士 ラブレイド

僕の変身 1

大学に向けて自転車を走らせる僕の耳には、i podからエントレスでラブレイドのテーマが響いていた

もう、何年も前から寝言でだつて歌える、この世で一番僕の胸を熱くさせ、僕の細胞一つ一つに染みこんでいる曲だ。

昔のヒーローの曲だから、今の特撮で使われるような、派手さもかっこよさもない。

でも、僕はこのストレートな歌詞が好きだった。

なにより、気に入っているのは2メロが終わって、サビに入る前のこの部分。

本当は怖い時もある

本当は逃げたくなりもする

でも

信じるんだラブレイド

自分と闘い

自分を信じて

愛と勇気の為に！！

とても、素直で正直な部分だと思う。普通なら隠そうとする部分かもしれない。でも、ラブレイドは違う。自分の弱さも情けなさも知っている。知った上で、いや、だからこそ強くなるうと思えるんだ。

仮面ライダーカブトでも、天道が加賀美に言っていた。

『弱さを知る者こそ、本当に強くなれるんだ』って。

仮面ライダー555も言っていた。

『怖いさ…だから一生懸命生きてんだよ！人間を守るために』
ウルトラマン80だつて

『僕もね、本当は凄く怪獣が怖いんだ。ビルみたいにデッキイし、物凄い顔しているし、それに力も強いし、火を噴いたり、殺人光線を出したり！本当に怖いよ。でも、戦うんだ！』
って言ってた。

そうだ、ヒーローは皆、敵とだけ戦っているわけじゃない。仮面ライダーも、レンジャーも、ウルトラマンも、宇宙警察も、そしてラブレイドだって、皆皆、自分の中の弱さと闘っている。だから、強いんだ！

大学が見えた。

膝が軋んだ。古傷がまた騒ぎだした。痛みが「引き返そう」と囁き始める。「行った所で、ボコボコにされるだけじゃないか。怖いじゃないか。見て見ぬふりをすればいいじゃないか」って。

でも、僕はぐつと唇を噛みしめると、前を向き、その痛みを抑えつけるようにペダルを踏み込んだ。

再びヒーロー達の言葉を思い出す。

『優しさを失わないでくれ。弱い者をいたわり、互いに助け合い、どこの国の人達とも友達になろうとする気持ちを失わないでくれ。』

例えその気持ちは何百回裏切られようと。それが私の最後の願いだ』

『少しの勇気さえあれば、誰だってヒーローになれるんだよッ！』

『待っててもヒーローなんて来ない。だから俺が守るって決めたんだ！ たとえ今は君一人守るのがやっとでも……諦めない！ 運命に負けたくないんだ！』

『友情とは友の心が青臭いと書くってな。青臭いなら青臭いで……それを本気でぶつけなければ意味が無い！』

『俺は好きな人のために滅びたとしても……馬鹿なことをしたとは思わない』

『お前がやらずに誰がやる！？ お前の涙で奴が倒せるか！ この地球が救えるか！ みんな必死に生きてるのにくじける自分を恥ずかしいと思わんか！ やるんだ！ もう一度やるんだ！』

僕の中に溢れているヒーローやその仲間達の声がこだました。そして、最後に僕の背中を押したのは、やっぱり

『自分と闘え 愛と勇気を持って』

僕のヒーロー、ラブレイドだ。

そうだ、行くんだった。迷うな。行くしか無いんだ！

大学の門を抜け、グラウンドの傍にあるラグビー部の部室へ向かう。

恐怖と興奮と覚悟が、ごちゃ混ぜになって僕の心臓を叩いていた。でも、もう、不思議と引き返すなんて事は考えつかなかった。美奈子さんが僕より中林を選んだことも、中林が僕から美奈子さんを奪った事も、もう関係ない。ただ、僕は、僕の愛する人、僕の仲間、それを助けに行くだけだ。

部室前に着いた。

プレハブでできた長屋の様な運動部の部室棟。グラウンドに面していて、その前には様々な器具や道具が積まれていた。背中ではラクロスサークルの子たちの練習する声がする。やけにそれが平和に聞こえて、これから飛び込む嵐の前の静けさを想わせた。

乱れた呼吸を整える。自分の荒い息を感じながら自転車を降り、イヤホンに手をかけた。

行くぞ

愛と勇気の戦士 ラブレイド

ちょうど最後のフレーズが高らかに歌い上げられ、曲が終わる。耳からそれを抜く。涼しい風が火照った僕の額を撫でて行った。

そうだ。やってやる。できる。いや、やってみせる！

ぐっと拳を握りしめる。そこで初めて、まだラブレイドの変身セツトを手に行っていた事に気がついた。思わず笑みがこぼれた。

そういうことか。

僕はもう一度それを握りしめると、その変身セットのバンダナをぎゅっとつけた。

僕は、変身したのだ。

愛と勇気の戦士、ラブレイドに。

一步踏みだす。靴底に砂が音を立てる。

中には何人の敵がいるのだろう。美奈子さんは、中林はどんな状態で監禁されているのだろう。海部はまだいるのか？ 奴らは武器を持っているのか。

緊張が不安を、不安が恐怖を呼ぼうとする。僕はそれを押しこめるように固唾を飲んだ。

「おい、一人で行くつもりか？ ラブレイド」

声が出したのは、部室のドアノブに手を置いた時だった。僕は驚き、振り返る。そして、目を瞠った。

「先輩。大森」

「水臭い」

大森が呟いた。

「全くだ。俺達、仲間だろ？」

先輩が自転車を立てかけながら言う。

僕は笑った。

なんて、なんてかつこ悪いヒーローなんだ。僕たちは。グラビアおたくで丸腰の骸骨に、アニメおたくで数歩歩くだけで息切れするトトロ。そして変身セットを身につけて強くなっただけで息切れする撮オタクの僕。かつこ悪い。ほんとにかつこ悪くて……サイコーだ。

「馬鹿。こんな所でヒーローが泣くなよ」

先輩は駆け寄ると、僕を軽く小突いた。僕はバンダナの下を拭いながら

「泣いてませんって」

と返すと、二人の方を改めて見た。

「いいん、ですか？ 相手はラグビー部ですよ」

「わかつてる。だから、来たんじゃないか」

先輩は笑うと「なあ？」と大森に振った。大森はない首で首肯し答える。

「一人より三人の方がマシ」

「いいか、小木。お前はオタクだ。オタクがオタクを甘く見てどうする」

「それは……」

「そつだ、なめんな」

どこかで聞いたやり取りだ。

僕は二つの顔を交互に見た。先輩は、似合いもしないウィンクをして、僕の肩に手を置くと

「いいか。もつと、自分に自信もて。オタクはオタクに誇りを持つべきだ。小木。お前はお前が思ってるほど弱くないし、オタクは悪くない」

と言いきった。そして、ニヤツと笑う。笑うとますます死神……いや、死神博士に似ていた。もしかしたら、このままイカデビルに変身してしまうんじゃないだろうか。

「それを、証明してやるうぜ」

「先輩」

「俺たちなら、やれる」

「大森」

彼らは感動に胸を詰まらせ言葉をなくした僕に力強く頷いた。

僕は、僕には仲間がいる。たとえ、かつこ悪くても、ピンチに駆けつけ、一緒に危険に身を投じてくれる仲間が。

「わかりました。お願いします」

僕も頷き返すと、覚悟を固め、再びラグビー部のドアノブに手をかけた。

「中にはラグビー部の一年川田。二年の大河内、池波、沢田の四人。海部はさつき出て行った」

「先輩、いつの間？」

「お前がここに来るまでに、窓から偵察しておいたんだよ」

大森が先輩の声に「準備万端」と付け足す。心強い。もしかしたら、本当に、僕らはやれるかもしれない。

ドアノブを握る。そこで、ふと思いつき、僕は彼らを振り返った。

「あの」

「なんだよ。さっさと行けよ」

「いえ」

気になったことがあったのだ。突入前に一つ確認しておきたかった。それはこんなに機転がきく彼らなのに、どうして……

「どうして、この事を僕に連絡したんです？ 気が動転していたから、っただけじゃない気がするんですけど」

そう言うと、彼らは顔を見合せて、小さく笑った。そして、僕の背中を叩くと

「俺達も信じてたからだよ。愛と勇気の戦士ラブレイドが助けくれるってな」

そうだった。

「二人とも……」

もう、迷う事はない。

もう、何も考えることもない。

やることは一つ。

愛と勇気をもって大切な人を守ることだけだ。

「行きますよ！」

「了解！」

僕は思いつきり息を吸い込んだ。

鼓動が高鳴る。

体温が上昇する。

手に力がこもる。

世界中の音が消える。

そして、僕は一気に戦場への扉を開けはなったのだった。

僕の変身 2

一気にドアを開けた。内側に放たれたドアは、勢いに押され壁にぶつかり盛大な音を立てる。そして目に飛び込んできたのは、口をタオルでふさがれ、両手首を縛りあげられた中林と美奈子さんの姿だった。

すぐに二人に駆け寄ろうとした僕に、凶器の様な怒声があつつけられる。

「誰だ！」

僕は足を止め、周りを見回した。

中林と美奈子さんの目が驚きに見開かれている。周囲はラグビー部の部室らしく、防具が壁にずらりと掛けられていて、右手奥には脱ぎ散らかされた靴や服が散乱した汚いロッカーがあつた。正面の窓は半分が卑猥な女性のポスターで覆われていて、もう反面は隙間を作りだらしく引かれたカーテンがかかっている。おそらく、あの隙間から先輩達は中の様子を観察したのだろう。その窓の下に置かれているヘルメットが並べられている棚に二人はくりつけられ座らされていた。

強烈な男臭さが鼻につく。汗と油とその他様々なものが混ざり合つて発酵したような臭いだ。

先輩と大森が背中を押され、扉が閉められた。鍵がかけられる音がする。

正面にいる囚われの二人と僕の間を遮るように、男が二人。ロッカーの前に添えられたベンチに座る男が一人。そして僕らの後、扉を閉めた男が一人。先輩が言うように四人の男たちが僕らを囲んでいる。

「誰だつて聞いてんだ。このコスプレヤローが」

正面にいる二人のうち髭を生やしたゾル大佐似の方が一歩踏み出すごんできた。もう一人のラオウ似の角刈りは僕の反応を伺うよ

うにニヤニヤしている。位置的に考えて、きつとこの場で真っ先に動き、ドアに鍵をかけたジャイアン似が下っ端にあたる一年の川田だろう。と、するとベンチで腕を組み、まだ身じろぎもしなごつしりと構えているのがこの中で一番のリーダー、ラブレイドの最悪最強の敵キョウアクーダって事になる。

僕は恐怖に震える足に、これだけ分析できるんだ。落ち着け。と言いかせるように力を込めると、そのまま相手を睨み返した。

「ぼ、僕は……」

「なんだ？ 震えてるぞ」

からかうような野次を飛ばしたのはゾル大佐だ。

うるさい。うるさい。うるさい！

黙れ。僕は、僕は……。

僕自身、奴に言っているのか、恐怖に震えあがった体に言っているのかわからなかったが、心の中でそう叫ぶと、声に出してこっぴどんだ。

「僕は愛と勇気の戦士、ラブレイドだ！」

敵達の目が、点になり口をあんどぐり開ける。

僕は構わず台詞を続けた。

「善良なカップルを監禁するなんて、許せない！ お前達の悪を、

このラブレイドが倒してやる！」

両手を掲げ、大きく旋回。くるっと一回転して、ピタッと止まる。

そして、お決まりのポーズ。

そつだ、僕はラブレイドだ。愛と勇気の為に戦うのだ……！！

「あははは。こいつ、馬鹿じゃね。何言つて……」

ゾル大佐がライオンの咆哮の様に歯茎をむき出して笑った。ベンチの男以外の二人も地面を揺るがすような笑い声をあげる。

ゾル大佐はひとしきり笑うと涙を拭い、海部と同じ岩の様な手を突き出して僕の肩を鷲掴みにした。

「コスプレごっこなら、オタク部に戻つてやれよ。な？ ここの事黙つてんなら、俺らもお前らのこと大目にみ……」

「手を放せ！」

僕はその手を振り払う。空気が裂けるような音がして、ゾル大佐の手が弾かれた。

「今すぐ、彼らを解放しろ。さもなければ、正義の鉄槌がお前に……」
「はあ？」

僕が台詞を言い終えるか言い終えないかの時だった。振り払われ、赤くなった手の甲を抑えていた、ゾル大佐の顔が見る間に赤くなり、その形相が変化していく。

「うわっ。黄金狼男」

先輩の声が出た。からかっているのか本気で言っているのかはわからない。

「なんだって？ お前ら、こっちが優しい顔をしていたら、いい気になるなよ！ 沢田さん！」

坊主がベンチに座っているリーダーを振り返る。

「やっちやっつてもいいですよね」

声をかけられたキョウアクーダは、それまで閉ざしていた口をゆっくり開いた。

他の殺気立ち始めた三人達とは違って、まだ余裕があるようで、威圧的ながらも静かな佇まいだ。

腕を組んだまま、じっと僕の方を見つめる。まるで、僕の覚悟を押し量っているようだ。

怖い。負けるか。怖い。逃げるもんか。怖い。怖い。怖い。怖い。でも！

僕はこみ上げて来そうになる涙を奥歯で食い止めた。じっと、そらさずに、そいつの目を見つめ返す。

キョウアクーダは僕を見ながら頷く。

「海部は邪魔者がいたら、口をふさげと言っていた」
その目が笑ったように細められる。

「徹底的にな」

冷たいものが僕の背中を走った。

僕の変身 3

生唾を飲み込む。

そうさ、それでいい。望むところだ。僕は、僕はここに戦いに来たんだから。

「だってよ」

マンガよろしく、他の三人が拳をポキポキと鳴らしながら、僕らを囲む輪を狭め始めた。

僕らは背中合わせに固まり始める。

喧嘩なんか、あの、女の子を助けた一件以来、した事がない。腕力もなければ、機転もきかない。でも、でも……。

男たちの背中に向こうに二人の姿が見えた。二人とも、縄をほどこうと必死にもがいている。

中林と目が合う。奴は「逃げろ」と言いたげな目で僕を見つめ返した。

美奈子さんと目が合う。彼女も「逃げて」と訴えていた。

僕は、そんな二人の不安を打ち消すように笑って見せた。

手が震えていた。足は地についていないようだった。頭は半分酸欠状態で、胸が苦しい。心臓は恐怖に震えて縮みあがっている。

でも、でも、僕は、笑えた。笑って、彼らに頷けたんだ。

大丈夫、今から助けるから、と。

「歯あ、くいしばれよ！」

大きな拳が降ってきたのは、その時だった。

あ！ と思った次の瞬間には、僕の体は吹っ飛ばされていた。

酷い不協和音がなりたてられ、なだれのように何か降ってくる。熱い。こめかみの辺りが焼けつくように熱い。僕の周りを埋め尽くす何かをかき分ける。見ると、ラグビーボールだ。どうやら、僕はボール籠に突っ込んだようだ。

ぼんやりしかける頭を振る。かすみがかかった視界の向こうで、先

輩がラオウに、大森がジャイアンにやられているのが見えた。

「おい、あれはやっぱギャグだったのか？」

ゾル大佐がボールの山から僕を引つ張りだし、今度はその棍棒の様に太い足で僕を蹴り上げた。

内臓と言つ内臓が悲鳴を上げる。なのに、声は不思議と喉を震わせなかった。正確に言つと、震わせることができなかった。

胃の底から上に向かって蹴り上げられた僕の体は、宙に浮く。熱い。痛みより熱さを感じ、一気に吐き気がこみ上げる。何か折れる音が聞こえた。

「ほらほら。ラグビーボールでも、まだ手ごたえがあるぜ？ あ、足ごたえか？」

少しも巧く言っていないのに、ゾル大佐は満足げな声を上げると床に転がった僕の頭をその大きな足で踏みつぶす。

「うつつ」

僕の頭蓋骨が軋む音が内側から聞こえた。

うつつすら目を開ける。先輩も大森も、すでにぼろぼろだ。こんなこんな……まだ、こっちは一発も出していないのに、ここまで歯が立たないなんて……。

「何か、言つてみるよ。なんなら、腕の一本でも折るか？」

ゾル大佐が足を外すと、僕の腕を逆手にとつて後ろに捻りあげ、まるで人形でも扱うように軽々と僕を持ち上げ無理やり立たせた。「ほら、見てみるよ。正義の味方さん」

ぐいつと向けられた先には口ツカーが並び、その前に鏡があつた。そこには、まだ一発も繰り出せず、それどころか本当に一瞬にしてポコポコにされた僕の姿が映っていた。

すでに、バンダナも半分ずれて、僕の変身は解けかけている。

「お前は、もうポコポコ。お前の仲間も」

今度は後ろを向く。見ると、本当に折れてしまいそうな角度で腕を曲げられ床に顔を押し付けられた先輩と、頭から血を流し力なく突っ伏している大森の姿があつた。

「お前が助けに来た奴も、最悪の状況じゃねえか」

角度を変える。まだ、捕まったままの二人がこつちを見ていた。

「お前、何にもできないんだな」

ゾル大佐が僕を嘲る声が耳元でした。

悔しさに涙が込み上げてくる。

僕は、僕は、やっぱり。ただのオタクだ。弱くて情けなくて、卑怯な……。

僕は……。

ゾル大佐が僕の手を放した。

僕は床に無様に倒れ込む。奴はその僕に唾を吐きかけ、こういつた。

「土下座しろよ。今、ここで。そしたら、許してやるよ」

「どげ……ざ？」

僕は奴を見上げた。鬼の様な、怪獣の様な、モンスターの様な、オルフェノクの様な、怪人の様な……恐ろしい相手を。

「そうだ。土下座して謝るんだ。「オタクごときが、出過ぎた大口を叩いてスミマセンでした」ってな」

オタクごときが……オタク……オタク……。

僕はじつと自分の手を見つめた。

確かに僕はオタクだ。

ラブレイドなんかじゃない。

ヒーロー何かになれない。

仲間も、大切な人も救えない。情けない……。

「僕……僕は……」

痛みと体中が叫んでいる。怖いよ。怖いよ。もう止めよう。謝っ
てしまおう。そんな風に懇願している。

顔を上げた。キョウアクーダがさつきと変わらない姿勢でベンチ
に腰を下ろしたまま僕を見ている。冷たい、冷たい眼だ。そして、
その目に映る僕はやっぱりヒーロー何かじゃなくて……。

「ス……スミ……」

僕の頭が少しずつ床に落ち込んでいく。
僕は、僕は、ただのオタクだ。

「頑張れ！ ラブレイド！！！」

その声が聞こえたのは、僕の額が床につく、その時だった。

え？ きらりがここに！？僕は驚いて目を見開き、顔を上げ振り返る。

そして、僕の目に映ったのは

「ラブレイド！ 頑張つて！ 負けないで！ お願い！ ラブレイド！！！」

「美奈子……さん」

なんと、美奈子さんが声を上げている姿だった。口輪を外した時に乱れたのだらう髪で、涙でグシャグシャにした顔で、僕に向かって懸命に叫んでいる。

「アナタは、愛と勇気の戦士なんでしょ？ だったら、負けないで！ お願い！ 立ちあがって！」

床に、何かが滑って行った。美奈子さんに気を取られていた皆がそれが何かに気がつくその前に、それは中林の手に当たって止まる。

「美奈子、さん？」

僕は痛みを堪えながら彼女の方を見つめた。彼女は唇を真一文字に結び、顎を引いた。

「ラブレイド。絶対助けに来てくれるって信じてた。あの日の様に」

「あの日？」

美奈子さんは再び顎を引く。

「そう、アナタの未来を奪ってしまった、あの日」

「あ」

僕は彼女をまじまじと見た。どうして、彼女があの日の事を知っているのかという疑問より先に、フラッシュバックの様に、時間の彼方から記憶の洪水が押し寄せてくる。

あの日、あの時、助けた女の子。

あれは……あれは……。

「もしかして」

「そう、私なの。ラブレード。お願い。負けないで！ あの日みたいに、闘って！」

ブログで言っていた僕が彼女を助けたってというのは、あの日の事だったのか。だから、彼女は僕の事を……。

僕は息を一つはくと立ち上がった。痛くないところの方が少ないんじゃないかって言うくらい、体のあちこちに痛みが走る。でも、立たないわけにはいかないんだ。

だって、だって、僕は

「なんだ？ まだ、やるのか？」

ラブレードなんだから……！！

僕はゾル大佐を睨みあげると呼吸を止めた。

かまえる。そして、一気に相手の足元目がけて飛び込んだ。ゾル大佐の足にくらいつく僕。タックルよろしく、しかもいきなりだった僕の動きに、ゾル大佐は反応できなかったようで、思いつきり後ろに倒れた。

鈍い音がする。僕はすぐに足を離すと、夢中になって奴の上に馬乗りになった。そして、奴の顔を見て驚いた。

「あ、れ？」

気絶している。

どうやら、運悪くベンチの角に頭を打ったようだ。白目を剥いて口から泡を吹いていた。

「やろう！」

大森にかかっていたジャイアンがその様子にいち早く反応する。僕に岩石の様な拳を繰り出してきた。

「うわっ！」

僕は慌ててしゃがみこむ。

後ろで何かが盛大に割れる音がした。

「？」

見ると、ジャイアンはあの鏡に拳を突っ込んでしまったらしい。ものの見事に鏡の破片が拳に突き刺さり、真っ赤になっていた。

「お前っ！」

次に襲いかかってきたのは先輩を捻りあげていたラオウだ。

大きな体のわりに俊敏な動きで僕に駆け寄ると、その勢いのまま足を振りあげた。

思わず息をのむ。

どうやら素人ヒーローのラッキーもここまでだったようだ。僕は思いっきり脇腹を二つに折られ、床に叩きつけられた。

身体が一度床で跳ね、僕の意識は一瞬遠ざかりかける。それをラオウは許すまいと、僕の襟首を掴まえ持ち上げた。

「ただで帰れると思うなよ」

凄みのある声が、僕の鼻先に熱い息とともに吹きつけられた。

僕の変身 4

もう、痛いのか熱いのか、どうなのかわからない。視界が妙に狭いし、耳鳴りも酷いから、状況もよく確認できない。

どうやら、顔が腫れてきて、頭を強く打ちすぎたらしい。

でも、それでも、もう、不思議なくらい恐怖は感じなかった。

それどころか、自然に笑みがこぼれている。

鏡の方に目をやる。戦意喪失して真っ赤な拳を抱え項垂れるジャイアンの背中の方を向こう側。割れた鏡の中に、彼女の顔が見えた。恐怖と不安に青ざめ震えている。けど、それでもしっかりと僕を見つめてくれていた。

そうだ、大丈夫。

僕は、やれる。やる。

君の笑顔を守るため

君の涙を拭うため

罪を憎んで人を憎まず

恐怖に立ち向かうんだ

愛と勇気の戦士

ラブレイド！！

「小木！」

その時、声が駆け抜けた。

疾風が横殴りに吹いたような衝撃を感じた瞬間、ラオウの顔が視界から消える。

ラオウの馬鹿でかい体が傾き、僕は奴の手から解放された。よろめきながら何とか踏みとどまる。

「一体？」

何が起こったんだ？ 狭い視界を巡らせ、何が起こったか目を凝らす。足元を見る。なんとラオウが倒れているじゃないか。

「え？」

本当に、何があつたんだ？

呆然とラオウを見下ろす僕の体が、再び揺れた。いや揺らされた。

「小木！ 大丈夫か！」

僕の肩を揺する、懐かしい声。僕はゆらりと顔を上げる。でも、見なくてもわかっていた。だって、僕の相棒は一人しかいないんだから。そうか、ラオウは奴が……。

「中林」

僕は目を合わせた相棒に笑って見せた。中林は照れくさそうに苦笑してラオウを見下ろし軽く足を僕に上げて見せた。

どうやら真横からラオウの側頭に蹴りをきめたらしい。ラオウは気絶していた。中林は「格ゲーで何百時間もイメトレしてる、ゲームオタクをみくびんなよ」とラオウに言い捨てると、僕の方をもう一度見た。

やっぱり、中林は僕の親友だ。たとえば、同じ人を好きになっても、恋人を奪ったとしても……僕らの友情は変わらない。

僕は嬉しくなって、微笑んだ。中林も微笑み返すと、黙って頷く。そして、僕に何かを見せるように目の前に掲げて見せた。

それはカッターだった。

「え？ これ」

「大森が俺に投げてくれたんだよ。漫画用のカッターじゃねえ？ ほら、ここにスクリーントンついてる」

中林はそう言いながら僕に肩を貸すと、肩越しに大森を振り返った。

大森は血だらけの顔を少し起こし、親指を突き出す。

「大森……」

さすが、漫画おたくだよ。お前は。

僕はカッターと奴を見比べて、思わず笑みを零した。

イメトレのゲームオタクにトーンカーターの漫画オタク、オタクサイコーだ。

「小木。ホツとしてる暇はねえぞ。まだ、大将が残ってる」

中林の鋭い声にハツとして、僕は表情を引き締めた。

そつだ、まだ下つ端をやつつけたただけだ。まだ、キョウアクーダが……。

僕らはベンチの方を向き直った。

キョウアクーダは微動だにせず、まだ余裕の表情を浮かべ、僕らを見つめていた。

「なんだ。そんな武器持ってきてんなら、最初っから使えば良かったじゃないか」

キョウアクーダはそう言うと、中林の方をじつと見据えた。

視線だけでこちらの呼吸を苦しくさせる眼光に、僕も息を飲む。

「そんな事、するかよ」

中林はそう言うと、カッターを泉さんの方へと投げた。彼女の足元に当たる。自分でロープを切れ、そう言う事なのだろう。

やっぱり、中林は彼女の事をちゃんと……そう感じると、胸の奥が痛まないわけじゃなかったけど、奴の口元や目の周りに戦いの痕を見ると、同じ戦場に立つ仲間として非難する気にはなれなかった。

「どうしてだ？ 本気で勝つ気はないのか？」

どっしりと据えられていた腰がゆっくりと持ち上げられる。

キョウアクーダこと沢田は立ち上がると、他の三人よりさらに大きい事がわかった。いや、実際、身長や体重がどうなのかはわからない。ただ、彼から発せられる空気が僕にそう感じさせた。

「化け物だ……」

大森の呟きに、僕は心の中で賛同する。

本当に、ラブレイドの最強最悪の敵キョウアクーダよろしく、沢田には威圧感があった。

それこそ、こんな薄っぺらい刃物くらいなら跳ね返してしまえ

うな鋼の筋肉が体中についているし、その上についた顔もまた筋肉に似合う精悍なものだ。眉は太く目との距離は短い。四角い顔の中央に胡坐をかいたような鼻がついていて、口は真横に結ばれていた。もし、こんな場面でなく、日常ですれ違えば、「すみません」といつてまわれ右したい相手だ。特に何も悪い事をしてなくても。

「卑怯なお前らには分かんないだろうがな、本当に強い男なら当たり前の選択だ。なあ。小木」

中林の声に、僕は頷く。

片眉を上げたキョウアクーダがその答えを求めるようにこちらを向いた。

僕は口の端を上げ答える。

「だって、君たちは丸腰だったじゃないか。丸腰の人相手に、凶器を使うのは正義じゃない」

だよな？

僕は中林の方を振り返る。中林はそんな僕に満足げに頷くと、もう一度キョウアクーダの方を見た。

「わかったか。強さは腕力じゃない。強さは心なんだ」

「へえ。心……」

キョウアクーダは口の端を釣り上げると、おもむろに僕らに背を向けた。

なんだ？ 何をするつもりだ？

顔を見合わせる僕らをよそに、ロッカーを開けると、中から何かを取り出す。

「最近さ。俺、凝ってるものがあるんだ」

何かを手に振り返った。

それは

「あ」

ノートパソコンだった。

キョウアクーダ、いや沢田のごつい手の中ではそれこそ薄っぺらいノートにしか見えないそれを、立ち上げた状態で僕らに見えるよ

うに画面を向ける。

「最近は何でもパソコンが教えてくれるんだよな。本当に、便利な世の中だ」

「それがどうした!」

中林が隣りで叫ぶ。けど、僕は声が出せなかった。

小動物を悪戯にいたぶり、弱らせる肉食獣の様な笑みを、沢田は僕に向けていた。予感がしていた。嫌な方の、予感だ。

沢田は僕の反応を試すように器用にキーを押しながら画面を展開させていく。

「でさ、面白いサイトを見つけたんだ。正義の味方の正体が暴露されてる、サイト」

僕の鼓動が胸を打つ。

沢田の目が一層細められる。

僕の拳が握られ

沢田の指がキーを弾いた。

「ヒーローオタクと秘密のブログ」

「！！」

僕は背筋をピンと伸ばす。

やっぱり。沢田は僕のブログを知ってる。

見ると、画面には見慣れたページが表示されていた。間違いない。

僕の、僕のブログだ！

「ファンですよ。小木正義さん。記事は全部読ませてもらってます」

沢田はくくつと口の中で笑うと、今度は自分の方に画面を向けて操作し始めた。

「随分カッコいい事言ってくれたけど、実際はどうなんですかあ？

なあ？ 小木正義さん。ほら、彼女についてこう書いている。」

彼女の綺麗な手を見る。実は……まだ一度も繋いだことのない、手だ」

沢田はわざと茶化すように声色を変えて、ブログの中の一文を読んだ。

とたんに耳がかあつと熱くなる。

そうだ。僕は確かにブログを公開していた。公開するって言う事は、いつ、どこで、誰に読まれていても仕方ないって事。つまり、

沢田や海部にだって……。

「オタクもエロい事、考えるんだな。学園クイーンもお高く止まっちゃって」

沢田は彼女へも侮蔑するような言葉を投げつけるとまだ続けた。

「お前らオタク部の事も書いてるぜ。骸骨にトトロねえ……あはは、結構うまいじゃん。で、そのゲームおたく君は」

かちやかちやとキーを弾く厭味な音がする。

僕は恥ずかしさと悔しさで拳を握りしめていた。確かに、僕の中の弱い部分、情けない部分を自らさらけ出した。そうすること

で、再確認できたし、見えなかった事にも気がつけた。けど、文字にするのと音声にされるのでは、まるで違う。他人の声を介した僕の情けなさや卑怯さは、さらに色や形を明確にさせ、鋭い楔になつて僕を射抜くようだ。

「ああ……そうだな。確か、もともとこのお嬢さんはお前の彼女つて事になつてたんだよな。それを、親友面して横取りしたわけか」
「黙れ！」

中林が怒鳴る。しかし、その声に怒りがこもるほど沢田は嬉しそうに顔を歪め、僕らを見つめた。

「お前ら。仲良く肩組んじやってるけどさ……いいのか？ この正義のヒーローさんはネットでは、お前の事、こう言ってるぞ」

中林の頬に緊張が走る。

僕は唇を噛んで、自分自身が打ち込んだ文字を思い出す。そう、僕が心の中で呼んでいた中林の名前、それは……。

「裏切り者」

中林が息を飲んだのがわかった。

僕の胸がギョツと締め付けられ、焦りを感じながらも中林を見つめる。

「確かに、そう書いてあるぜ。なあ、そうだろ？ ご本人さんよ」

「中林。僕……」

「小木」

中林は僕の目を覗き込むようにじつと見つめた。それは本当なのか？ 中林の目はそう問うている気がした。僕はその目を見つめながら、自分自身が書いたブログを、もう一度思い出す。

確かに、僕は書いたはずだ。でも、それは話の途中で、その先には……。駄目だ。

僕は一度視線を外し溜息をつく。こんなの、言い訳だ。途中経過にしる、何にしる。僕が中林を裏切り者だと思い、そう思った事をブログの記事にしたのは本当なんだから。

ラブレイドは言い訳をしない。僕も、自分のやった事に言い訳を

するような人間にはなりたくない。

僕は顔を上げると、一度唇を強くかんで、それから

「本当だよ」

小さく、でもハッキリと事実を認める事を伝えた。

「ブログを書いていたんだ。これまでの事、全部。その中で僕は、確かに君の事を裏切り者だと書いた。しかも、オフ会に参加する前から君が彼女をとっちゃうんじゃないかって、疑ってたことも」

「小木」

中林は落胆とも怒りとも違う声でそういうと、僕からそっと離れる。

だよ。

仕方ない。これが正直な気持ち。正直な事実だもの。

僕は顔をしかめながら自分の足で立つと、項垂れた。中林に支えられ助けられていた体は、所存なく、痛みだけを従え、棒立ちになる。先輩の、大森の、中林の、そして彼女の視線が、痛かった。

微妙な距離のできた僕らに、何が愉快なのか、沢田の笑い声が割り込んできた。

「あははは。残念だよな。こんな大けが覚悟でこいつを助けても、この正義のヒーローはお前たちをそう言う風に見てたんだ。今でも、こんな大人しい小犬の様な顔をして、心の中ではお前らを馬鹿にしてんだぜ？」

偉そうなことぬかすくせにさ。と、沢田はつけたし、パソコンを脇に置いた。

僕の読者 2

「小木」

「正義君」

皆が僕を呼ぶ声がある。

きっと、皆、本当の僕をしまって酷くがっかりしただろう。もしかしたら、傷つけてしまったかもしれない。

僕はじつと自分の足元を見つめる。ボロボロの二十五センチの小さなスニーカー。僕はこのスニーカーの様にちっぽけで、薄汚い。でも、でも、どれだけ誤魔化しても、僕は、僕で……。

「小木」

中林の手が添えられた。

僕の頭はばね仕掛け人形のように跳ねあがる。視界に皆の顔が飛び込んできた。それぞれが、それぞれの表情で僕を見守っている。

「正義君」

彼女の声がして、彼女を見た。

綺麗な顔だ。大好きな、瞳だ。

僕の、大好きな人。

でも、だから……僕は。

「すみませんでした」

頭を下げた。

「ブログに書いた事は本当です。僕は嫌なやつです。美奈子さんのブログを読んで、他人になり済ましてました。それを誤魔化したくて、友達に事実隠蔽の肩棒を担がせようともしました。そのくせ、中林に嫉妬したり、先輩や大森をオタクだってばかにもしている所がありました。僕は卑怯で弱くて情けなくて……」

ラブレイドのバンダナに手をかけ、外す。それはするりと抵抗なく解け床に落ちた。

「オタクで、チビで、卑屈で。これが本当の僕です」

一度目を閉じ、暗闇に目を凝らす。

呼吸する。

鼓動を聞く。

「でも」

僕は、僕だ。

どこまで言っても、それは変わらない、変えられない。だから……僕は僕から逃げない！

「もう、これ以上、嘘も隠し事も、逃げるのもやめたいんです。だから」

僕は顔を上げ、目を開き、構えた。

身体が軋む。

心が痛む。

でも、もう、逃げないって決めたから。

「ここで、沢田。君を倒して、僕の親友と大切な人を救う！」

僕はそういつと沢田を見据えた。

「ば〜か」

そんな僕の背中を叩いたのは、他でもない、中林だった。

奴は口の端を上げ、部屋にいる皆を見回す。

キョトンとする僕と沢田をよそに、先輩も大森も、美奈子さんまで苦笑して、中林の視線に頷いていた。

中林はその反応を満足げに眺めてから、改めて沢田に視線を送る。

「ファン心理としてはさあ、自分だけの掘り出し物って思いたいの
はよくわかるけどさあ……沢田、おまえ、そのブログ、一日にどれ
くらいアクセスあると思ってるんだよ」

「なにを？」

「結構、人気ブログなんだぜ」

「何が言いたい。こんな所でブログ自慢か？」

沢田は威嚇するように中林と距離を詰める。近づくと見上げるような巨体は、本当に怪物さながらだ。

でも、中林は逃げも恐れも見せず、笑みを浮かべたまま対峙する。

「ば〜か。行間読めね〜んなら、偉そうにブログの読者名乗ってんじゃねえよ。つまり、ファンはお前だけじゃねえってこと」

あ！

僕もようやく答えに辿りつき、軽く口を開ける。

慌てて皆の顔を見た。

先輩は「骸骨はねえだろ。死神の方が未だマシだ」と苦笑した。

大森は「トトロは可」とにいつと本当にトトロの様な笑みを見せる。

そして、僕はゆっくり彼女の方を見た。

彼女は涙に濡れた顔で僕を見つめると、困ったように眉をひそめ、少し頬を赤らめ

「始めはビックリした。でも、お互い様だよ。ううん……ちゃん

と、ちゃんと顔を見て話してくれたぶん、正義君の方が偉いかな。私もブログじゃなくて、ちゃんと声に出していわなきゃね。ごめんね、正義君」

そういつて微笑んだ。

皆、皆、僕のブログを読んでくれたんだ。

僕の話、僕の本音を、皆が読んで、それでもこうやって……。

「良いか、沢田。本当の友達は、正直に話して謝る奴に唾は吐かねえし、ましてや笑ったりしねえんだよ。お前に、わかるか？ 自分の弱いところ、悪い所に目を向け、認め、謝る、勇気の強さを」

中林はそう言つと、再度、僕の背を力強く叩いた。

「こいつは、強い！ お前なんかより、ずっとだ。わかったか！」

「中林……」

僕は涙で潤む目を奴に向けた。中林は苦笑しながら「泣くな。馬鹿」と僕を小突いた。

僕には、僕には、もう、怖いものなんかない。

「やっつけるぞ。小木」

「うん」

背にあった中林の手がつきだされた。

ラブレイドのバンダナだった。

僕は頷くと、それをしっかりと受取り、そして再び身につけた。きゅっと頭に力を込めて縛る。

そして、巨大な敵に向き直る。

沢田、いいやキョウアクーダは出鼻をくじかれた事が悔しいのか、顔を歪め僕らを修羅の様な顔で睨みつけていた。

オタクの闘い 1

拳が握り締められ、岩の塊が出来上がる。

「オタクが……いい気になるなよ!!」

その巨大な拳が、動いた。

と、思った瞬間だった。その場の誰も反応できなかった。

ただ、僕の視界が急に開け、枝が折れるような音が連続して響き、同時に肉に何かが食い込むような鈍い音がした。

そして、僕の目がその変化に追いついた時、見えたものは、中林が床に倒れている姿だった。

「中林!」

自分でも自分の声だとわからないような、叫びとも悲鳴ともつかない声が喉を震わせた。

床に倒れた中林は、起き上がるうとしない。それどころか、ぴくりとも動かない。

「中林!」

もう一度彼を呼ぶ。先輩が一番に動き、彼を抱き起した。

「中林!」

先輩が中林の頬を叩く。微かに眉がしかめられるが、意識が戻らない。血の気がさつと音を立てて引いていくのを感じた。

中林が、やられた。

一撃で。

どうしよう。どうしよう。僕の為に、中林が……。

駆け寄ろうとした僕の肩を、キョウアクーダが掴む。

「おっと、逃げるなよ。お前も、同じ目にあうんだ」

それは、まるで人を人とも思わない、中林をあんな目にあわせても、罪悪感すら感じていない、外道の声だった。

薄笑いに興奮が混じったそれに、僕の体温が上昇し始める。

「頭で理解できないなら体で覚える。オタク野郎。お前らみたいな

ゴキブリ連中、やられたって世の中困らないんだよ。オタクはオタク同士、人間様の邪魔にならないように、今まで通りゴキブリらしく暗がりでもソコソコ生きていろ」

僕は唇を噛んだ。

オタクのどこが悪い。

オタクの何がいけない。

もし、こんな卑劣な事をするのが人間って言うのなら、僕はゴキブリで構わない。大切なものを見失い誇りを失うくらいなら、痛みと誇りを抱えたのゴキブリの方がずっとマシだ！

僕は振り返ると、奴の顔をじつと見た。

「なんだよ。その目は。まだたてつくのか？ いいか。お前に一つ教えてやるよ」

キョウアクーダはそういつて目を細めると、僕の肩を握りしめていた手をといて再び凶器の拳を作り上げる。

「人間様に……」

僕は足を踏みしめた。

目を閉じる。

先輩の顔、大森の顔、中林の顔、そして美奈子さんの顔が次々浮かぶ。

僕は、僕は彼らの為にも、負けるわけにはいかないんだ！

これまで、何千、何百と憧れ、見つめ続けてきたヒーローたちが僕の中で鼓動を打ち始める。

「たてついたゴキブリはな」

膝がジンと痛んだ。

もう、体操は無理だと言われた僕の体。

弱いくせに、強いものに立ち向かったって、怪我するだけだと囁く痛み。

「ぐちゅって潰されても」

でも、お願いだ。

一度だけ、一度だけでいい。

ラブレイド。

「文句は」

今、だけでいいから！

この先、例え、走れなくなっても、歩けなくなっても、構わないから。

今だけ、今だけ、

僕に力を貸してくれ！

「いえないんだぜ！」

キョウアクーダの巨大な鉄拳が振り下ろされた。轟音を立て、恐ろしいスピードで僕をとらえようとする。

僕はぐつと息を殺すと、思い切って体を沈めた。膝が断末魔のような叫びを上げる。それでも、僕はぐつと踏みしめる。

奴の拳が僕の頭を掠め通り過ぎた。

どくん

今だと鼓動が教えた。

僕は痛みとともに、自分の想いをぐつと膝に込めると、地球を抑え込むように踏み込み、そして

「ラブレイドキーーーーック！」

飛んだ。

キョウアクーダの目が見開かれる。しかし、拳を振り降ろしたばかりの奴の頭は完全に無防備だ。

その無防備なこめかみに、僕の足は僕が考えるよりも前に一気に振り抜かれた。

脛に、鈍い痛みが走る。妙な感覚がその一点から足を伝い、体中に広がる。

キョウアクーダの体が揺れた。奴の頭が僕の足に薙ぎ払われるようにぶれる。

そして、巨大な鉄の塊は地にひれ伏した。

僕もそのまま倒れ込んだ。

同時に、激痛が膝を遅い、僕は声にもできずに蹲る。

「正義くん！」

声が飛び込んできて、影が僕を覗き込んだ。

だめだ、痛みに、意識が吹っ飛びそうだ。

「正義君！」

誰かが僕を抱き上げる。

僕は痛みに歯をくいしばしながら、うつすらと目を開けた。

「美奈子……さん」

「馬鹿！ 正義君の馬鹿！」

美奈子さんは大粒の涙をいくつもその瞳から零すと、僕に抱きついた。

僕はその涙にただただ申し訳なくて

「すみません。すみません」

その言葉ばかりを繰り返した。

そうだ、中林は、キョウアクーダイや沢田は……。どうなったのか、見極めないといけない。もし、本当にやつつけられたのなら、急いで、美奈子さんと中林を会場へ……。

「小木！」

振り返った僕に手を上げて見せたのは、先輩と大森に支えられた中林だった。

「中林！ 大丈夫なの？」

「平気。脳しんとっ起こしただけだ。それより、お前の方は……」

中林は気丈に起き上がろうとしてみせる。僕も、膝の痛みはほとんど増していくけど、皆を安心させたくて、笑ってみせた。

「大丈夫。それより……早く、会場へ」

「行かせるかよ」

僕の声を、地の底からの唸り声が飲みこんだ。

僕は息を止め、振り返ろうとして、頭を鷲掴みにされる。

「ひっ」

美奈子さんが恐怖に口を閉ざす。

痛い。僕の頭が……何かに締め付けられている。確認したくても首が全く動かない。一体、誰が……。視線を、必死で動かしながら、頭の上に手を伸ばす。腕だ。人間の……嫌な予感に僕は顔をしかめ、もう一方の手で彼女の体を「逃げて」と押しやった。

僕はありったけの力でその腕を握り返す。僅かに僕の頭が角度を変えた。そして、ようやく視界に入った顔は……

「沢田！」

オタクの闘い 2

「残念だったな。あれくらいの一撃で、俺がくたばると思うなよ」
沢田はこめかみを腫らした顔で不気味に笑うと、僕の頭を掴んだまま立ちあがった。

「いたつ。痛い！！！！」

頭だけを握りしめられた状態でつりさげられる。両こめかみから万力で挟まれ、頭蓋骨が砕かれそうな痛みだ。僕は必死に奴の腕を外そうともがくけど、全く奴は動じない。

やっぱり、現実テレビのようにはうまくいかないのか。

僕は痛みに声を上げながら、それでも何とか抵抗しようと手足をばたつかせた。

「ゴキブリ野郎のオタクが。もう、絶対に許さん。この場にいる全員、無事では帰さんからな！ ほら、お前らも起きろ！」

沢田はそのまま部室内を歩き、床に転がっているゾル大佐とラオウ、そしてジャイアンを順に蹴り起こした。

あの、大男たちが、唸りながらも気がつき始める。そして、次々とその体を起こし出した。

そんな。

頑張ったのに。ここまでやったのに。

腫れあがって狭まれた視界に映るのは、満身創痍の仲間と、ぼろぼろの僕の足、そして意識を取り戻し体の具合を確認するように動かす奴等の姿。

ここにきて、復活するなんて。不死身なのか沢田は。これじゃ、もう、打つ手は……。

僕は絶望に冷えて行く心を感じながら、奴のやけの様な笑い声に目を固く閉じた。

やっぱり、やっぱり。オタクはヒーローになれないのか。

こんなに、僕のことを知り、僕の事を大切にしてくれた仲間を、

僕は助けられないのか。

もう、本当にここまで……。

「覚悟しろ」

沢田がそう言っつて、歯を剥いて笑った時だった。

「それはこつちの台詞よ！」

その声が聞こえたのは。

ドアが思いつきり開け放たれ、光が薄暗い部室に射し込む。

「!？」

僕はその眩しさに目を細めた。

「なんだ？ お前……あ」

沢田から、手の力が抜けた。僕はぼとりと床に落とされる。

「なんだ？ いったい、誰が……。」

「正義君。大丈夫？」

再び美奈子さんに抱き起こされながら、霞む目で辺りを見回した。

その僕らの傍を、物凄い勢いと圧力が通り過ぎていく。

「ねえ！ 四股つてどつちいう事よ！ 沢田君！」

「嘘つき！ 私だけつて言つたじゃない！」

「おおこつち。この女はなに？ この写真の説明しなさいよ！」

「川田君。酷い……サイテー……！」

え？ え？ なんだ？ 何が起こつて……。

僕は啞然として口を開けたまま、目を疑つた。

「絶対許さないんだから……！！」

僕らを助けたのは、ヒーローでも、警察でも、奇跡でもない。それは、大勢の女の子の集団だったのだ。

次々に女の子たちが洪水のごとく流れ込んでくる。そして各々凄まじい形相で、さつきまで修羅の様に恐ろしかった男達にくつてかかっていた。

「一体……」

「とにかく、外に出ましょ」

美奈子さんはその濁流から僕を避難させるように、引きずりなが

ら外に連れ出す。

沢田達は、怒りに顔を赤くしたたくさんの子達に詰め寄られ、さつきまでの強気はどこへやら、弱り切った顔で女性達の怒りの大波に溺れそうになっていた。

「なんだ、これ」

「オタクの底力だよ」

「先輩？」

顔を上げると、先輩はニヤニヤしながら携帯を振って僕に見せた。「オタクの情報収集能力を甘く見ないでほしいね」

そして、今やバーゲン会場のごとく混乱し始めるラグビー部の部屋に目をやってから

「奴ら、海部を筆頭に派手に遊んでたんだよ。そりゃもう、手当たりしだいだよ。だから……」

にししと人の悪い笑みを浮かべた死神博士は携帯画面を僕に見せた。

「ここに踏み込む前に、ちょっと報告させてもらった。あ、鍵を開けたのは大森な」

見ると、そこには浮気現場らしき画像を添付したメールが表示されていた。

僕はあっけに取られ、先輩と大森の顔を見比べた。先輩は大森に目くばせし、拳を突き合わせる。「準備万端」と大森が呟いた。

先輩は嬉しそうに頷くと、そのままその手を僕に差し出す。

「俺様は、グラビアおたくのみならず、美女オタクだからな。自分のいる大学の女の子のメルアドや付き合いくらい抑えてるんだって」
そして僕をゆっくりと立たせた。

僕はキョトンとして先輩を見つめる。そんな馬鹿な……と思いつつも、美奈子さんのプロフィールを恙無く言えた彼だ、ましてや現実にごうやってたくさんの女の子たちが押し掛けている。本当なんだろう。

オタク……恐るべし。驚くというか、感心と言うか、呆れたとい

うか、とにかく呆然とする僕に死神博士は似あわないウィンクをする

「だから言っただろ。たいていの事はおっばいで解決するって」と断言したのだった。

正義の失恋 1

「それよか、時間」

大森が言った。そうだ、誕生会！

僕は慌てて校舎の高いところに据えられ、いつでも僕らを見下ろしている時を刻む装置に目をやった。開催時間を少し回ったくらいだ。

「美奈子さん。中林。動ける？」

僕は後ろを振り返った。中林に支えられ立つ彼女の姿。それを見て、僕の馬鹿な胸はまだチリッと痛んだけれど、迷う事は何もなかった。

「俺は大丈夫だ。でも、彼女が……」

みると、酷く足を震わせていた。まだ、さっきまでの乱闘の恐怖が残っているんだ。仕方ないだろう。気絶や流血の場面に居合わせて、平気でいられる女の子の方が希少だ。

彼女は確かに、ラブレイドのヒロインに似てはいるけれど、普通の女の子なんだ。

「自転車はお前のと、俺ので二台あるだろ。小木、お前が彼女を乗せてけよ」

「え、でも」

先輩が僕の背中を軽く突き飛ばす。

確かに、自転車は二台。彼女は自分で元気に自転車こぎますって状態じゃない。でも、だったら……。

僕は中林の方を見た。奴は僕の視線に気がつくと、面倒げに前髪をかき回し

「俺、沢田の一撃で結構フラフラだからさ。お前、頼むよ」

「でも」

「お前じゃないと、意味ねえって」

中林はそう言って、彼女に目をやる。二人は視線で会話し、そこ

にどんな言葉があつたのかはわからないけど、彼女は頷き僕の方を見た。

「お願い」

じつと彼女の眼を見る。僕を映したその瞳は、不安と戸惑いに揺れていて、まるで僕に告白して来たあの時の様な色をしていた。

膝が波打つように痛みを訴える。熱も感じる。本当は、骨まで碎けてそうなの、そんな痛みだ。

それに、今や彼女は僕の恋人じゃない。中林の彼女であつて、これから奴を父親に紹介しに行く、そんな場面だ。

どうして、その手助けを僕に……。

ふっと、息を抜いた。小さくかぶりを振る。

馬鹿。難しく考えることなんかじゃないか。いきさつがどうであれ、自分の大切な人が助けを求めている。この僕に。だったら、取るべき答えはただ一つ。

「わかった。美奈子さんは僕の後ろに乗って。中林は先輩の自転車で……」

僕の言葉に場の空気がふわっと緩んだのを感じた。

先輩と大森は「俺達はここを何とかするから。明日にでも、飯、おごれよ」「飯、おごり」と言つて、自転車を跨いだ僕に手を振つた。

自転車がゆっくりと動き出す。

背中に美奈子さんの温もりを感じた。髪の毛の匂いがした。もう、こつすることもなくなるのだと思うと、鼻の辺りがツンとした。

「正義君？」

「ううん。大丈夫。行こう」

ペダルを踏む。膝が限界だと悲鳴を上げた。でも、僕は僕の古傷に、心の中で謝りながらこう言つた「ここまで来たんだ。あと少しだけ……頼むよ」と。

一度動き出すと、想像していたよりは膝の負担もなかった。それ

よりは信号待ちで止まって、再び動き出す時の方が苦しかった。

体中に棘の鋭い電流が駆け抜けるような痛みがして、ズキンズキンと鼓動を打つ。それも、数回漕いで行くうちに、勢いがタイヤを前に進めるのに力を貸してくれて、踏み込む動作は少し軽減された。とは言っても、痛みは一行に引かない。引くどころか、一秒ごとに「いいかげんにしろ」とでも言いたげに自己主張を強めて行く一方だ。

彼女の家へあと信号二つという場所で赤信号に止められた時には、もう、脂汗さえ額に滲んできていた。

駄目だ、気を、紛らわせないと。僕はそう思い、口を開けた。

「あの」

「あの」

同時に彼女の声もする。驚いて苦笑し「先に」と僕は彼女に促した。彼女は一瞬躊躇したあと「うん」と声を漏らして続ける。

「あの……まさ、ラブレイドでいった方がいいのかな。ありがと。本当に」

彼女にしては面白い気の遣い方だなんて思いながら、僕は苦笑を深めて「いえいえ、正義の味方だから」と答えた。

流れていた方の信号が黄色に変わる。

背中に、より重みを感じた。彼女が僕に抱きついているのがわかった。僕は緊張と同時に、心配になって、一個前の信号でひっかかって止まっている中林の方を振り返る。でも、奴は気がついていないのか無反応だ。

仕方なしに、僕は再び前を向いた。

「それと。呼び名」

「呼び名？」

「うん。いつもは【泉さん】だったのに、今は【美奈子さん】って。それに、敬語もなくなってる」

「あ」

僕は言われて気がつき、目を瞬かせた。思いつきなりきっちゃ

つてたからなのか、確かに、言われてみれば……。耳が熱くなるのを感じ、顔を伏せる。

信号が赤に変わった。

中林が近づいてくるのが自転車の軋む音でわかった。目の前の信号が青になるけど、中林を待たのために僕は走りださない。

「すみません」

「ううん。この方がいい。これからも、これで行って」
「でも」

美奈子さんはもう……。

僕は口を閉ざすと、追い付いてくる中林の気配を感じながら息をついた。美奈子さんは優しいから、僕が助に来た事を恩に感じてこう言ってくれている。きつとそれだけだ。でも、それは中林に悪い。元カレの僕が彼女に馴れ馴れしくして、いい気がするわけない。

確かに、そうして親しくして、よりを戻すチャンスをつかがうって言うのもあるかもしれない。でも、僕は……。

「美奈子さん」

「ん？」

彼女の視線を頬に感じた。でも、僕はその瞳を見ることはできなかった。見たら、この気持ちが増え、溢れてしまいそうだから。

まだ、好きだ。きつと、これからも好きだ。でも彼女は僕のもとから去る。彼女の家についてしまえば、僕から離れ、違う人の手を取り行ってしまう。そう考えると、苦しくて切なくてやるせない。でも、でも……。

「中林は、いい奴です」

僕はそう言うと、僕の想いを封じ込めるようにして大きく息を吐き、それからようやく振り返った。

笑顔が、自然に僕の頬を緩ませた。

「だから、美奈子さん。絶対幸せになれますよ。このラブレードが保証します」

「ラブレード……」

美奈子さんは、僕の顔を見て言葉をなくしていた。

西日に彼女の顔が照らし出されている。

オレンジ色に染まった頬は涙の跡があったけど、それでも美しいか
った。

僕は彼女の涙を止められたんだ。それだけで、十分だ。もともと
正義キヨロは孤独が似合うものなんだしね。

僕はそんな風に嘯く僕を、ちょっと好きになれたような気がした。

夕闇が背中の方から迫って来ている。

世界が静かで穏やかな夜にゆっくりと染まっていく。微かに夕げの香りがして、僕は今や僕を支配し始めた痛みをその平和な空気にどうにかして溶かせやしないかとありもしないことを考えていた。

そうでもしていないと、体中の、特に膝からの痛みと、彼女をもう少して失うのだという心の痛みとで、バラバラに砕けてしまいうだった。

でも、僕は間違っていない。そうだよ。いつの間にか僕を追い越し前に行く中林の背中に、後ろにいる彼女の温もりに、そう問いかける。心の中の呟きは彼らに届くはずはないけれど、彼らの幸せそうな笑みが見られたなら、それが答えになるような気がしていた。最後の角を曲がり、彼女の家がある通りに入る。すぐに門の前で誰かが立っているのが見えた。

「お父さん！」

彼女は影になっていたその人物をそう呼んだ。僕は慌てて自転車を止め、彼女を下ろす。

いきなり？

心の準備が……そうまごつく間にも、その影は大きさを増し、彼女の下へと辿りついた。

「どうしたんだ。お客様はもう皆さん、いらっしやってるよ」

想像していたよりも、物腰の柔らかいスラリとした背格好の紳士だった。顔立ちもハーフなのか、ちょっとエキゾチックでいて、当たり前のように整っている。彼女を見る眼差しは優しく、少し中林に似ているような気がした。

「こちらは？ あ、もしかして、美奈子の彼氏かい？」

父親はそういうと、ちょっと悪戯っぽい眼差しで僕と中林を見つめた。どちらか判断付き兼ねている様子だ。

ズキン

痛みが走った。

これは体の痛みだろうか？それとも、心の方？

ズキン ズキン

『ズキン』という擬音語がだんだん可愛らしい物に思えてくるくらい、痛みが酷くなってくる。

「あ、お父さん、あのね」

美奈子さんが戸惑ったように、父親と僕らの間に割り込んだ。

ズキン

ああ。僕の事なら気にしないでよ。

ズキン

お父さんも、社交辞令はいいですよ。

ズキン

どう見たって、彼女に釣り合う彼氏は……。

僕は一步引いて、中林の背を押した。

「小木」

中林が僕を振り返る。

痛みに、目が霞んできた。駄目だ。きっと、もう、本当に限界なんだ。頼む。後、少し。少しだけ。ハッピーエンドを見送るまで、持ってくれ。僕の体と心。

「美奈子さんを、頼む。お前なら、任せられる」

「お前……」

中林はそれでも踏み出そうとはしなかった。

奴の足が地面にくっついていてるかのよう、一步も動かない。

どうして？ お願いだ。早く。早く。

ズキン ズキン ズキン ズキン

膝が痛んでいるのか？ 心が叫んでいるのか？

彼女が離れていく。彼女が他の人と一緒に。いつか想像した、僕をおいて一人で行ってしまう彼女の姿を思い出す。これでいいんだ。大切な人も、親友も救えて。これでいいんだ。

そう言い聞かせるけど、僕の中の痛みは増すばかりで、とうとう込み上げてきた涙を一粒もこぼすまいと、僕は俯いてギュツと目を瞑った。そうすることしか、できなかつた。

好きだ。ダメだ。好きだ。言うな。好きだ。これでいいんだ。好きだ。好きだ。諦められるわけない。でも、でも……僕はそれ以上にやっぱり、彼女の事が大切なんだ。

暗闇の中彷徨う思考。

そして、最後にたどりついたのは、彼女の笑顔だった。だから僕は、震える拳を握りしめ、ぐっと奥歯を噛み、沈黙した。

「お父さん」

「！」

その硬く握った拳を、誰かが握る感触がした。僕は驚いて顔を跳ね上げる。

僕の手を包んでいるのは……彼女の綺麗な手だった。どうして？

美奈子さんと目が合う。彼女は混乱する僕に微笑んだ。そして……

「私の彼氏は彼。ラブレイドよ。どう？ 凄いでしょ」

そう言ったのだ。

「はあ？」

僕はあんまりの紹介に、いや、中林じゃなく僕を紹介した彼女の言動に、目が点になる。

どういうこと？ 中林は？ ええっ？ だって、あれは、え？

え〜？？

慌てて中林の方をみるけど、奴は顔色一つ変えていない。そしてその平然とした顔でこういったのだった。

「まあ、お前、バンダナしたまんまだしな」

「ああ！！」

本当だ！ 僕はさらに慌ててバンダナに手をかけた。

そうだ。沢田と最後に対峙した時、中林に渡されて変身し直してから、そのまんま。僕は、ずっとこの恰好で街中を自転車で走り、そして……。

彼女の父親の方を見る。

コスプレしたまま、彼女、いや元カノだけど、の父親に会ったって言うのか！？　なんて、失礼極まりない事を僕はしてしまったんだ。

「すみません！　すぐに、外しま……」

「どうしてだい。そのままでもいいじゃないか！　そうか、美奈子の彼は、そうか！」

しかし、美奈子さんの父親は怒った様子もなく、むしろ嬉しそうに声を上げて笑うと、バンダナを外そうとした手を止めた。

「どうかしましたか？」

石段の上の方から声が降ってくる。見上げると、海部ともう一人、女性の影。海部は僕らの姿をみて驚いたように目を見開き、足を止めた。後ろについて来ていた女性も足を止めたようだけど、奴の馬鹿でかい体が壁になってよく見えない。

「残念だったな。海部。本物の彼氏の登場だ」

中林は腕を組んでそう言うと、僕の背中を叩いた。

「中林。本物の彼氏って……君じゃ」

その言葉に、中林はキョトンとする。「はあ？」と気の抜けたような声を出して、美奈子さんの方を見た。

「あれ？　いつから付き合ってたっけ？」

「……もしかして、小木君」

美奈子さんが神妙な顔つきで僕を覗き込む。

「まだ、オフ会の事、気にしてたの？」

「あ、いや。だって……そうじゃないんですか？　中林もそう言うてたし」

「本当なの？」

美奈子さんの責めるような声に、中林がまずったと言わんばかりの顔をして、前髪をかき上げる。

「あ、ああ。あんまり、こいつ見るとムカついたからさ。ちょっとハッパかけるつもりで……でも、オフ会ではそういう設定で行く

って事になってたじゃんか」

「設定？」

僕は二人のやりとりについて行けずに、左右にある彼らの顔を交互に見た。美奈子さんはしばらくの間、冷たい目で中林を睨みつけていたけど、「そういうこと」と呟き、僕に視線を戻す。

「あれは、演技だったの。説明しようと思っただけど、正義君、ずっと連絡とってくれなかったじゃない」

「え？ どういう……」

「つまり、俺達の作戦はばれてたって事だよ」

中林はそう投げやりに言うと、何かを取り出して僕につきつけた。

「あ、ガンバライドカード」

そう言ったのは、美奈子さんの父親だ。

中林は頷き

「あの日、俺達、ゲーセンに向かう途中で別れたろ。で、ゲーセン巡りしてたらさ、出くわししまったんだよ」

「出くわしたって？」

まさか……。僕はそつと振り返る。すると、美奈子さんが馴れた手つきで中林からカードを取り上げ、僕に振って見せた。

頬が少しあからんでいる、気がした。彼女はまさかの予想に見つめる僕から目をそらし、口ごもった。

「ガンバライドしてる、私とよ」

「ええっ？ 美奈子さんが、ガンバライド!？」

全くもって、想像できない組み合わせだった。

だって、彼女とはゲームの話も、仮面ライダーも、っていうか特撮の話さえ一切やったことはないのだから。

それに、こんなに美人で、綺麗で、完璧な人が……ゲーセンで……。

「あのなあ、小木。人を見かけであれこれ決めつけるの、お前の悪い癖だぞ。不細工の堅気もいりゃ、ベッピンのオタクだっているんだよ」

「でも……」

「とにかく、そこで中林君とバツタリ。私、何度か正義君と一緒にいるところ見てたから、顔は知ってたし……セイの事、ちよつと疑ってたしね。で、ゲームセンターから連れ出して喫茶店で少し問い詰めたら、白状したの」

だから、中林の姿があの時見つからなかったのか。

「少しどころじゃね〜ぜ。小木。この女、めっちゃおっかね〜から。考えるなら今のうちだ」

中林が僕に耳打ちした。「中林君!」とがめる彼女の声に中林は首を引っ込める。

「で、白状してもらって、それならって書店で待ち合わせて……私と彼が仲良くする芝居を打ったの」

「どうして、そんな事」

「どうしてって……」

彼女は手を下ろすと、もじもじしだした。「どうしてわかんないのよ」なんて言いながら僕を肘でつついてくるけど、僕にはさっぱりわからない。

? なんだ? どういうことだ? 僕らの計画に気がついてたん

なら、そんな事しないでいいに来たらいいのに。さっぱりわからな
い。そう、僕が首をかしげ彼女の顔を見ている時だった。耳に飛び
込んできたのは、意外な人物の声だ。

「状況は分からないけど、美奈子は、ラブレイドくんやキモチを
やいて欲しかったんだね？」

「お父さん！」

美奈子さんは、今度はハッキリわかるくらい真っ赤になって、彼
女の父親に拳を振り上げた。

じゃ、じゃあ。本当に、本当は、僕は……。

中林が

「そゆこと。彼女はただ、あの場でお前に妬いてほしかっただけな
んだよ。なのに、お前ときたらぐずぐず、うだうだ。連絡も取れな
くしやがって。状況がややこしくなったのは、お前ら二人がヘタ
レだったせいだよ」

と呆れ顔で苦笑した。僕らの顔を交互に見て、前髪をかき回す。
「ついでだから言っとくけど、それから毎日この女から問い詰めら
れて大変だったんだぜ？ このままじゃ、俺からお前がオタクって
のもバレるんじゃないかって部屋にも居づらくなつたしさ。食堂で
会った時なんか、お前ん家に押しかけるっていうのに付き合わされ
る所だったんだからな。今日もどうしても海部に勘違いされるのは
イヤだからって、お前のピンチヒッターって言うか、お前が彼氏っ
て証言させられるためにつれてこられただけだよ」

唇を尖らせ肩をすくめてみせると「俺はゲームキャラにしか興味
ないって言つたる」ともつけたす。

胸の奥の奥で固まって冷え切っていた何かが、ゆっくりゆっくり
と溶けだすのを感じた。

本当に、本当に、僕は、僕は、まだ……。

「この子の彼氏だと大変でしょう。ラブレイドくん。本当に、昔か
ら好きな子には素直じゃないんだ」

お父さんがそういった。

「お父さん！」

美奈子さんがこれ以上何も言うなと声を上げる。

なんだか、お父さんの前にいる美奈子さんは、子供みたいで可愛らしい。怒ったり恥ずかしがったり……表情がコロコロ変わって。

僕は、こんな美奈子さんも、ううん。どんな美奈子さんも、やっぱり……。

美奈子さんがしかられた子どもの様な顔で、こちらを見た。

「ラブレイド。私……」

上目使いに潤んだ瞳。あの日と変わらない輝き。きっと、その言葉の先にはたくさん言葉が詰まっている。

「なに？」

僕は僕の中の優しさをかき集め、聞いた。

本当は、聞かずに彼女の気持ちを汲み取るべきなのかもしれないけど、きっと、これは僕に、ううん僕らにとって必要な事なんだ。

彼女もそれがわかっていているらしく、怒ったような顔を伏せると、後ろでに手を組んで、しばらく口の中でごにごによと言葉を転がしてから、本当に小さな声でこう言った。

「ごめん、なさい。許さないなんて、言わないよね？」

濡れた長いまつげがゆれる。柔らかなほほが桜色に染まって、伏せていたその瞳が僕をちらりと見上げた。

反則だ。こんなの、こんなの……許さないって言うわけないに決まってるじゃないか……！！

僕は一度息を飲み込むと、背すじを伸ばし、固まった状態で答えた。

「は、はい。はい！ あの、こちらこそ。ふつつか者ですが、あの、その、よろしく」

信じられない。夢なら覚めないでほしかったし、現実ならこれ以上の幸福はない。

「それじゃ、嫁入りじゃねーか」

中林が僕の後ろ頭をはたいた。

「それに、俺らを救ったヒーローはラブレードじゃねえだろ」

中林はそういうと、美奈子さんを一瞥してから僕をじつと見た。

僕の弱い所も、かっこ悪い所も皆知っていて、勝ち目のない敵にも一緒に挑み向かって行ってくれた、親友の目だ。それが、にっと細められた。

「こいつは、俺らを救ったヒーローは、小木正義だ」

「中林」

胸の奥がぐつと熱くなる。中林、お前ってやつは……。

「え？ その名前。君、もしかして、あの時の？」

お父さんが驚いた顔をして、僕を見つめた。美奈子さんは得意げに頷いて

「そうよ。私の彼氏は、二度も私を救ってくれた、本物のヒーローなのよ」

僕の手を引いた。僕はその手を握り返す。彼女が照れ臭そうに微笑みを僕に向けてくれた。

手の中の温もりがかけがえのない宝物のように思えて、僕は涙が込み上げてきた。よかった。本当に……。

「凄い！ 凄いじゃない！ 美奈子！ 正義のヒーローが彼氏なんて」

そこに女性の声が飛ぶ。無然とする海部を押しつけ、その後ろ彼出てきた女性だ。その女性は一歩ごとにその姿をはつきりとさせる。

「お母さん」

美奈子さんが僕の手を握ったまま、母親に駆け寄る。その傍を中林が通り抜けた。

「海部は、俺と話をしようぜ。いいよな？」

海部はしぶしぶ足に枷でもついてるかのような足取りで降りてきた。

心配する僕に、中林は「部室で奴を待ってるって先輩からさつき電話あったからさ」と付け足す。ああ、あの渦中に海部も放り込むのか。

僕は海部を見上げながら、申し訳ないけど同情はできなかった。身から出た錆だ。ここで罪を清算するのは彼の為になるかもしれない。

「ラブレイド」

「……」

なにげに項垂れる海部を従え去っていく中林を見つめていた僕は、すぐ間近で聞えた声に目を見開いた。

「愛と勇気の戦士。ううん。私のヒーロー」

だって、その声は……

「ラブレイド」

大きな瞳。少し広い額にぼつてりとした唇。流れるような髪に、知的な声。そこにいたのは、まさしく、僕のヒロイン。永遠の初恋の人。

「天音きらり！」

「はじめまして。正義君。美奈子の母親です」

きらりはそういうと、軽く頭を下げた。

え？ え？ どういう……。

「私の母親、昔の特撮のヒロインだったのよ。それで、父は……」

「ラブレイドのファンでしてね〜。追っかけていたら、本当にヒロインをGETしちゃったんですよ〜」

キョトンとする僕に、彼女の父親は悪びれもせず、いやむしる誇らしげに天音きらりの肩に自身の手を添えてそう言った。

え？

じゃあ、美奈子さんの母親はきらりで、だから彼女がきらりに似ているって言うのは偶然じゃなかったって事!?

僕はまだ信じられなくて、目を見開いたまま彼女ときらりを何度も見比べた。

「え、じゃあ。美奈子さんが日本のオタクが嫌いって言うのは」

「やだ。誰から聞いたの？ ええ。昔はね。あんまり父の趣味にこっちが振り回されるものだから……。今日だって、その関係者の方

もたくさん呼んじやってね。でも、結局、蛙の子は蛙。だよね」
美奈子さんはそう言う舌を出して、さっき中林から取り上げた力
ードを僕に渡してみせた。

なるほど。だからお父さんは僕の恰好を喜ぶわけで、それで……。
僕はぼんやりし始める頭で、視線を動かした。

ドクン ドクン

石段の上に誰かが出てくる。

ズキン ズキン

霞む世界の向こうで、その人物の姿も輪郭をあやふやにする。

「きらりクン。どうかしたの？」

ああ……彼女の母親を、天音きらりをこう呼ぶ事が出来るのは…
…。

そうか、本物のラブレイドは正義は、^{ヒーロー}現実でもきらりとは一緒に
なれなかつたんだ。

「正義君!？」

僕は意識が途切れる、その最後に、本物のラブレイドを見た気が
した。

そして、底のない暗闇に、ゆっくりゆっくり、木の葉の様に落ち
て行きながら、僕のヒーロー、ラブレイドにこう尋ねた。

僕は、僕は、ヒーローになれたでしょうか？

自分と戦えたでしょうか 愛と勇気を持って

と。

僕の仲間と彼女とブログ

僕はその後、病院へ運ばれた。診断は全身打撲に膝の骨折で、僕はしばらくの入院を余儀なくされた。

海部達は見舞いにきた先輩達の話によれば、あの後、さんざん痛い目にあつたようで、今ではビックリする位大人しくなっているらしい。

僕らオタク部にたてつくところくな事がないと、わかつたようだ。報復を心配していた僕は、愉快げに笑う先輩と大森の顔を見て、少しホツとした。

今日も「俺達オタクは色々忙しいからな」といって欠かさず来てくれている先輩たちを、僕はベッドの上から見送った。隣りでPSPをしていた中林は顔も上げずに「何が忙しいだ。ナースの物色に來てるだけのくせにな」と零す。

外を見る。夏に向かう風が吹き抜けていた。空の高い所でトンビが輪を描いて飛んでいるのが見える。眩しい。

「中林」

僕はそのまま口を開いた。中林もPSPから目を離さない。

「中林……本当は美奈子さんの事、好きだったんじゃない？」

トンビが一つ啼いた。甲高く、通るその声は、果てのない青空に溶けて行く。

ベッドの上で僕は色々考えていた。でも、どれだけ考えてもあの、人嫌いで、人みしりで、人間不信の中林がただ問い詰められたからってだけで、人に協力するとは思えなかった。それに、僕でも普通に会話するのに一年はかかったって言うのに、彼女とは出会って数週間で普通に接していた。彼にとって美奈子さんは明らかに特別なように思えて仕方なかったのだ。

確かに、彼女の家の前で彼女が、一緒にいたのは僕にヤキモチを

焼かせるための演技だと言った事に、中林はなんの意義も唱えはしなかった。ゲームキャラにしか興味ないとも言った。

でも……。

僕は、あの時、中林が取り出し彼女に渡し、彼女が僕に渡したカードを思い出す。

仮面ライダー ゼロノスアルティルフォーム

後衛での言葉は【ガンガンセメロ】

でも、ライダースキルにある言葉は

【忘れられた存在】

もしかしたら、中林は自分の想いが忘れられても、伝えられなくても僕らを応援するから、二人で頑張れ。そう言いたかったんじゃないか。僕はそんな風に思ったんだ。

中林は応えない。

静かな病室に、PSPのボタンの音だけが響く。

「小木」

中林は手を置くと、PSPの電源を切った。

そして、僕の前に置いてあったノートパソコンを無言で開けると、病院のネットに接続する。

立ち上げたのは、僕のブログだった。ちょうど、大学に向かう前に打った記事の一個前。コメント十個ほどがすぐに入っていた奴だ。

「お前、たぶん、まだコメント一つも読んでねーだろ」

「あ、うん」

「じゃ、読めよ。ブログって言うのは、こういう交流も楽しみ方の一つらしいぜ。あとさ、食堂でお前に『彼女はわかってた』って言ったじゃん」

「あ、うん」

僕はその時の事を思い出して、恥ずかしいような、くすぐったいような、悔しいような、そんな気持ちになる。

「あれさ。セイの事じゃなかったんだ。いや、知ってたのは事実だけだ」

「え？　じゃあ……どういっ」

「あれはさ。彼女、お前の事をよく知ってたって言いたかったんだ。俺もあの日知ったんだけど、彼女はお前がオタクだって事も、それを隠してることも、二人の仲の事を気にしてたことも、みんな知ってた。でも彼女、昔から素直じゃないんだってな。お前に子ども頃の助けられた時もお礼にも行けなくて、今でもそれ、後悔してるってさ。だから、再会した時は何とかしようって思ったらしいけど、好きな奴ほど素直になれない厄介な性格はなかなか直せないらしくてさ」

中林は「俺にはすっげー素直に何でも話すのにな」と寂しげな苦笑を浮かべると、僕にマウスを押しつけ、自分は鞆を手に取った。うんと背伸びし、さっきの僕と同じ空を見上げ眩しそうな顔をする。「文字だけの世界でも、顔を突き合わせたリアルでも、人が自分以外の人間を理解するの何か簡単にできるわけねえ。人は嘘もつくし、だますし、隠し事もする。仮面をつける。でもさ、お前は見つかったんだろ。答えを……」

振り返った中林は、あの前髪の間からじっと僕を見つめていた。そうだ。僕は、見つけた。嘘と偽りだらけかもしれないこの世界で、何を信じたらいいのかを。

「うん。見つけた」

「だったら、それでいいじゃねえか。俺も、何にも変わらねえよ。俺は俺。お前はお前」

「信じ合う絆は、何より強いもんな」

「それ、どのヒーローの言葉だ？」

「小正義だよ」

僕はそう言うと、笑った。中林もそれにつられて「自分で先に笑うなよ」と吹き出す。

「失礼します」

そこへピアノの音の様な透明な声が出た。

自然に笑い声が空気に溶けて、中林はパソコンのキーを一つ押す。

「じゃ、俺、行くわ」

「あ……」

「彼女と仲良くな」

そういつて鞆を肩にかけて病室を出て行く。すれ違つ美奈子さんに「小木をよろしく」つて言う声が聞こえた。

僕は静かに息を吐きながら、彼女がやってくる気配に笑みを零す。そして、中林が開けて行った画面に、さらに目を細めた。中林……アイツ……。

「中林君。行き違いだったみたいね」

彼女がカーテンを開けて入ってくる。

僕は画面を見たままだ額いた。

彼女は「なあに？」と少々不満げに僕の傍に腰を下ろす。そして、もう氷の女王だったなんて忘れさせるほど、驚いた表情で顔を真っ赤にして、そのパソコン画面に目を丸めたのだった。

そこに映っていたのは記事アップ直後に送られたコメント達。

「やだつ。こんなの見たの？ やめてよ」

彼女が消そうとするその手を、僕が握って止める。もう、その手は振り払われないし、僕が主導権を持つ事だって出来る。だって、もう、僕らは仮面を被っていないから。

正義のヒーローの醍醐味は変身だけど、恋人の僕らにはもう仮面は必要ないってわかったから。

「もう、消してよ！」

「消さないよ。だったら……」

僕は彼女の手を握り直し、顔を覗き込む。

「直接聞かせてよ。美奈子さん」

彼女は少し頬を膨らませ僕を軽く睨むと、唇を尖らせ「いじわる」と呟いてから、その素顔のまま彼女が打ち込んだ最後の言葉と同じ言葉を口にした。

(MNK)

正義君、好きです。彼女でいさせて下さい。

(M N K)

正義君、好きです。彼氏でいてください。

(M N K)

正義君、誕生日で待ってる。

(M N K)

正義君、好きです。それしか言えません。

(M N K)

正義君、お願い。今日は来て。

(M N K)

正義君、お願い。話を聞いて。

(M N K)

正義君、誤解なの。

(M N K)

正義君、会いたいよ。

(M N K)

正義君、こんな所でしか素直になれなくてごめんね。

(M N K)

正義君、大好き！

|| 完 ||

僕の仲間と彼女とブログ（後書き）

最後までお付き合いありがとうございました。

このお話はシリーズ化する予定はなかったのですが、こちらで掲載させていただくうちに、続編が浮かんだので、そのうちまた書かせていただくかもしれません。その時はまた、よろしくやってください。

あと、なにか一言でもお言葉をいただけたら嬉しいです。

本当に本当にありがとうございます。

先日続編が完結しました。よろしかったら、こちらもよろしく願います。

<http://ncode.syosetu.com/n6797k/>

『オタクヒーローと賢者の嘘』

最新作に向けてオタクキャラを募集しております。詳しくは活動報告をご参照ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5898h/>

オタクヒーローと秘密のブログ

2011年1月7日19時40分発行